埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—XI—

清水谷・安光寺・北坂

1981

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—XI—

清水谷(しみずだに)・安光寺(あんこうじ)・北坂(きたさか)

1981

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県を縦貫する関越自動車道は、県西南部首都圏から北部農村地帯にかけて約71㎞に亘ります。

すでに、東松山市までは昭和50年に完成し、現在では群馬県前橋市に至る区間が供用を開始しております。

周知のごとく、埼玉県内の比企、大里、児玉地域は埋蔵文化財包蔵地が多く、このため、文化財を極力さける方策は、県と公団側で慎重に協議が重ねられましたが、29ヵ所の遺跡についてはやむなく発掘調査を実施せざるを得ませんでした。

調査は、日本道路公団の委託を受けて、埼玉県教育委員会が直営で、整理作業は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、引き続き公団の委託を受け実施したものであります。

本書は、美里村、岡部町所在の清水谷、安光寺古墳群、北坂３遺跡の報告書であります。

この記録が完成するまでに、多くの御協力をいただいた日本道路公団東京第二建設局、同東松山工事事務所はもとより、美里村、岡部町両教育委員会、地元関係各位に改めて深く感謝いたします。

なお、すでに本県内関越自動車道は開通しており、残された整理記録作成作業を速やかに進捗させたいと存じます。

昭和 56 年 3 月

財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　関　根　秋　男

例　　言

1．本書は関越自動車道にかかる、児玉郡美里村、大里郡岡部町地区に所在する清水谷遺跡、安光寺古墳、北坂遺跡（昭和51年、委保第５の2655号）の発掘調査報告書である。

2．調査は日本道路公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和51年５月10日から昭和52年１月28日に亘って実施し、整理、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和55年度に受託し、実施した。

なお、調査の組織は４ページに示したとおりである。

3．出土品の整理および図の作成は増田逸朗、水村孝行、中島宏、鈴木仁子が主にあたった。

4．発掘調査における写真は増田、水村、宮崎朝雄（清水谷遺跡、安光寺古墳）、水村、中島（北坂遺跡）が、遺物写真は水村、中島が撮影した。

5．本書の執筆は横川好富、増田逸朗、水村孝行、中島宏、鈴木仁子、島村範久があたった。分担は次のとおりである。

増田　Ⅱ、Ⅲ—(1)(5)、Ⅳ—１(1)３、Ⅴ—(5)、Ⅵ—３、４(3)

水村　Ⅲ—(6)i、Ⅳ—(4)i、Ⅴ—(1)(2)、Ⅵ—１(1)(2)(3)

中島　Ⅰ—２、Ⅲ—１２、Ⅳ—(2)(4)ii、Ⅴ—(3)～(8)、Ⅵ—２４(1)(2)

横川　Ⅰ—１　　鈴木　Ⅲ—(2)(3)(4)遺物　　島村　Ⅳ—２(3)

6．本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第四課職員があたり横川好富が監修した。

7．本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御助力を得た。

浅野晴樹、石岡憲雄、礒崎　一、井上　肇、梅沢太久夫、大塚達朗、小川良祐
加藤普平、上条朝宏、倉田芳郎、小林達雄、笹森健一、　谷井　彪、鶴丸俊明
土肥　孝、中村倉司、松本富雄

目　　次

序

例　　言

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1

1　発掘調査に至る経過 …… 1

2　調査の経過 …… 7

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 8

Ⅲ　清水谷遺跡の発掘調査 …… 19

1　遺跡の概観 …… 19

2　遺構と出土遺物 …… 21

(1)　古　墳 …… 21

(2)　古墳～平安時代の住居跡 …… 23

(3)　建物跡 …… 67

(4)　土壙、井戸、溝、トレンチ出土遺物 …… 68

(5)　鉄　器 …… 73

(6)　縄文時代の遺物 …… 74

i　石　器 …… 74

ii　縄文土器 …… 74

3　小　結 …… 76

Ⅳ　安光寺古墳の発掘調査 …… 79

1　遺跡の概観 …… 79

2　遺構と出土遺物 …… 80

(1)　古　墳 …… 80

(2)　住居跡 …… 85

(3) 板　碑……87
(4) 先土器～縄文時代の遺物……89
i 石　器……89
ii 縄文土器……93
3 小　結……95
V 北坂遺跡の発掘調査……97
1 遺跡の概観……97
2 遺構と出土遺物……99
(1) 先土器～縄文時代の石器……100
(2) 集石遺構、土壙……143
(3) 縄文土器……145
(4) 平安時代の住居跡……156
(5) 鉄　器……189
(6) 建物跡……191
(7) 土　壙……200
(8) 溝……202
VI 結　語……205
1 北坂遺跡の石器群について……205
(1) 石器群の平面分布について……205
(2) 加工痕、使用痕のある剥片について……210
(3) 北坂遺跡の早期石器群が提示する問題点……212
2 縄文土器について……216
3 安光寺1、2号墳について……221
4 歴史時代の遺構と遺物について……232
(1) 遺構について……232
(2) 出土土器について……235
(3) 北坂遺跡の鉄器について……239

挿　図　目　次

第１図　関越高速道関係遺跡一覧…… 5
第２図　遺跡分布図(1)……10
第３図　遺跡分布図(2)……12
第４図　遺跡分布図(3)……14
第５図　遺跡地形図……18
第６図　清水谷遺跡全測図……20
第７図　１号墳周溝内土壙……21
第８図　１号墳……22
第９図　１号住居跡……23
第10図　１号住居跡出土土器……24
第11図　２号住居跡……25
第12図　２号住居跡出土土器……25
第13図　３号住居跡……26
第14図　３号住居跡出土土器……27
第15図　４号住居跡……28
第16図　４号住居跡出土土器……28
第17図　５、６号住居跡……29
第18図　５号住居跡出土遺物……30
第19図　６号住居跡出土土器……31
第20図　７、22号住居跡……33
第21図　７号住居跡出土土器……34
第22図　22号住居跡出土土器……34
第23図　８号住居跡出土土器……34
第24図　８号住居跡……35
第25図　９号住居跡……36
第26図　９号住居跡出土遺物……38
第27図　10号住居跡……39
第28図　10号住居跡出土遺物……40
第29図　11、12号住居跡……41
第30図　11号住居跡出土土器……42
第31図　12号住居跡出土土器……43
第32図　13号住居跡……44
第33図　13号住居跡出土土器……44
第34図　14号住居跡……45
第35図　14号住居跡出土遺物……46
第36図　15号住居跡……46
第37図　15号住居跡出土土器……47
第38図　16号住居跡……49
第39図　16号住居跡出土土器……50
第40図　17号住居跡……52
第41図　17号住居跡出土遺物……54
第42図　18号住居跡……56
第43図　18号住居跡出土遺物……58
第44図　19、20号住居跡……59
第45図　19号住居跡出土土器……60
第46図　20号住居跡出土遺物……61
第47図　21号住居跡出土土器……62
第48図　21、23号住居跡……63
第49図　23号住居跡出土土器……66
第50図　建物跡……67
第51図　建物跡出土土器……68
第52図　井戸跡出土土器……68
第53図　土壙、井戸跡……69
第54図　１、２号溝土層断面図……70
第55図　２号溝出土遺物……72
第56図　トレンチ出土遺物……73
第57図　鉄器……73
第58図　石器……74
第59図　縄文土器……75
第60図　安光寺古墳群全測図(折り込み)

第61図　1、2号墳土層断面図……(折り込み)
第62図　1号墓土壙……80
第63図　1号墓出土土器……81
第64図　2号墳主体部……82
第65図　2号墳出土土器……83
第66図　2号墳主体部出土遺物……84
第67図　1号住居跡……86
第68図　1号住居跡他出土土器……86
第69図　板碑出土状況図……87
第70図　板碑拓影図……88
第71図　石器(1)……89
第72図　石器(2)……90
第73図　石器(3)……91
第74図　縄文土器……94
第75図　塚実測図……98
第76図　北坂遺跡全測図……(折り込み)
第77図　土層図……99
第78図　遺跡の平面分布図…… 101
第79図　Aブロック石器分布図…… 102
第80図　Bブロック石器分布図…… 103
第81図　C_1、C_2ブロック石器分布図…… 104
第82図　Dブロック石器分布図…… 104
第83図　Eブロック石器分布図…… 105
第84図　Aブロック石器(1)…… 107
第85図　Aブロック石器(2)…… 108
第86図　Bブロック石器(1)…… 109
第87図　Bブロック石器(2)…… 110
第88図　Bブロック石器(3)…… 111
第89図　Bブロック石器(4)…… 113
第90図　Bブロック石器(5)…… 114
第91図　Bブロック石器(6)…… 115
第92図　Bブロック石器(7)…… 116
第93図　Bブロック石器(8)…… 117
第94図　Bブロック石器(9)…… 118
第95図　Bブロック接合資料…… 118
第96図　C_1ブロック石器(1) …… 119
第97図　C_1ブロック石器(2) …… 120
第98図　C_2ブロック石器(1) …… 121
第99図　C_2ブロック石器(2) …… 123
第100図　Dブロック石器(1)…… 124
第101図　Dブロック石器(2)…… 125
第102図　Eブロック石器(1)…… 127
第103図　Eブロック石器(2)…… 128
第104図　Eブロック石器(3)…… 129
第105図　Eブロック石器(4)…… 130
第106図　ブロック外石器(1)…… 130
第107図　ブロック外石器(2)…… 131
第108図　ブロック外石器(3)…… 133
第109図　ブロック外石器(4)…… 134
第110図　ブロック外石器(5)…… 135
第111図　ブロック外石器(6)…… 136
第112図　接合資料出土位置図…… 137
第113図　1号集石遺構…… 143
第114図　2号集石遺構…… 144
第115図　1号土壙…… 144
第116図　1号土壙出土土器…… 144
第117図　縄文土器(1)…… 145
第118図　Ⅰ群土器分布図(上1、2、5類、下3、4類) …… 146
第119図　Ⅱ群土器分布図(6類)…… 147
第120図　縄文土器(2)…… 148
第121図　縄文土器(3)…… 150
第122図　縄文土器(4)…… 151
第123図　縄文土器(5)…… 152

第124図　縄文土器(6)…… 154
第125図　縄文土器(7)…… 155
第126図　1号住居跡…… 157
第127図　1号住居跡出土土器…… 159
第128図　2号住居跡…… 160
第129図　2号住居跡出土土器…… 160
第130図　3号住居跡…… 162
第131図　3号住居跡出土遺物…… 163
第132図　4、5、6号住居跡…… 164
第133図　4、5号住居跡出土遺物… 165
第134図　7、8号住居跡…… 167
第135図　7、8号住居跡出土遺物… 169
第136図　9号住居跡…… 171
第137図　9号住居跡出土土器…… 171
第138図　10、11号住居跡…… 173
第139図　10号住居跡出土遺物…… 174
第140図　11号住居跡出土土器…… 175
第141図　12、15号住居跡…… 177
第142図　12、15号住居跡出土遺物… 179
第143図　13号住居跡…… 181
第144図　13号住居跡出土土器…… 183
第145図　14号住居跡…… 185
第146図　14号住居跡出土土器(1)…… 187
第147図　14号住居跡出土土器(2)…… 189
第148図　鉄器、紡錘車、鈴…… 190
第149図　1号建物跡…… 191
第150図　2号建物跡…… 192
第151図　3、3A号建物跡…… 193
第152図　4号建物跡…… 195
第153図　5号建物跡…… 196
第154図　6号建物跡…… 197
第155図　7号建物跡…… 198
第156図　8号建物跡…… 199
第157図　土壙(1)…… 200
第158図　土壙(2)…… 201
第159図　溝、グリッド出土遺物…… 202
第160図　住居跡、建物跡全測図…… 234

図　版　目　次

図版1　清水谷遺跡・安光寺古墳群航空写真

清水谷遺跡

図版2　1号墳周溝・2号住居跡
図版3　3号住居跡・5、6号住居跡
図版4　6号住居跡・9号住居跡
図版5　12号住居跡・13号住居跡
図版6　17号住居跡・18号住居跡
図版7　23号住居跡・1号建物跡
図版8　1号溝・2号溝・縄文土器
図版9　1・3・6・7号住居跡出土土器
図版10　9・11・15・16・17号住居跡出土土器
図版11　17・18・19・20号住居跡出土土器
図版12　22・23号住居跡、建物跡、トレンチ出土土器
図版13　清水谷遺跡・北坂遺跡出土遺物
図版14　陶磁器

安光寺古墳群

図版15　遠景
図版16　近景

図版17　2号墳墳丘土層断面・2号墳周溝
図版18　2号墳主体部・遺物出土状況
図版19　2号墳主体部出土遺物・1号住居跡出土遺物
図版20　1号住居跡・縄文土器
図版21　2号墳板碑出土状況・板碑

北坂遺跡

図版22　航空写真
図版23　発掘風景
図版24　Aブロック
図版25　Bブロック
図版26　Eブロック・集石遺構
図版27　1号住居跡・2号住居跡
図版28　3号住居跡・4、5、6号住居跡
図版29　1、2、7、8号住居跡・7、8号住居跡
図版30　10、11号住居跡・10、11、12、15号住居跡
図版31　13号住居跡・14号住居跡
図版32　1、2、3、3A号建物跡・1号建物跡
図版33　3、3A号建物跡・2号建物跡
図版34　4号建物跡・5号建物跡
図版35　溝
図版36　13号住居跡鍵出土状況・焼印出土状況
図版37　5号住居跡円面硯出土状況・8号住居跡覆土銅鈴出土状況
図版38　石器(先土器)・石器
図版39　石器
図版40　石器
図版41　石器
図版42　石器
図版43　石器
図版44　石器
図版45　石器
図版46　石器
図版47　石器
図版48　石器
図版49　石器
図版50　石器
図版51　石器
図版52　石器
図版53　石器
図版54　石器
図版55　石器
図版56　石器
図版57　縄文土器(1)・縄文土器(2)
図版58　縄文土器(3)・縄文土器(4)
図版59　縄文土器(5)・縄文土器(6)
図版60　縄文土器(7)・縄文土器(8)
図版61　縄文土器(9)・1号土壙出土土器
図版62　1、2、3号住居跡出土土器
図版63　5、7、8号住居跡出土土器
図版64　8、10、11、12号住居跡出土土器
図版65　13号住居跡出土遺物
図版66　13号住居跡出土遺物
図版67　14号住居跡出土土器
図版68　その他の出土遺物
図版69　その他の出土遺物

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

関越自動車道新潟線は、東京都練馬区を起点として、本県の川越市・東松山市・上里町を経て群馬県・新潟県新潟市に至る310㎞の高速道路である。すでに、東京川越市間は、昭和46年12月に、また、川越市東松山市間は昭和50年８月に供用が開始されている。埼玉県内のこの供用区間の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、東京川越市間２遺跡を埼玉県遺跡調査会が、また、川越市東松山市の12遺跡を埼玉県教育委員会が直営で実施し、すでに調査報告書が刊行されているところである。

さて、東松山市から県境の児玉郡上里町に至る、いわゆる東松山以北については、昭和44年４月埼玉県行政推進対策委員会高速自動車道部会幹事会において、５万分の１の地形図に基本計画ルートが示された。この案を、昭和36年度に実施した、埼玉県埋蔵文化財包蔵地分布図と照合すると、20箇所の遺跡と、埼玉県指定史跡杉山城跡（嵐山町）と十条条里遺跡（美里村）が含まれていた。

そこで、この基本ルートに対する文化財保護側の意見を次のようにとりまとめ、高速自動車道部会長（企画部長）あて提出した。

1. 県指定史跡杉山城跡、県指定史跡十条条里遺跡のルートの変更を検討されたい。
2. その他のルート内に所在する埋蔵文化財については、事前調査、発掘調査等により対処可能と思われる。
3. 出土品が多量にあると予想されるので、資料館・陳列館等の建設による保存について考慮してもらいたい（サービスエリア内でも可）。
4. 当面事前調査が必要となる関係箇所が多いので、計画的に調査できるよう検討する必要がある。

関越自動車道東松山以北のルートは、丘陵上・丘陵裾部・平野地帯を約36キロメートルにわたって建設されるもので、かなり多くの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと予想されたので、昭和45年度、文化庁から国庫補助金の交付を受けて、改めて分布調査を実施した。この調査は、県内の考古学研究者を調査員に委嘱して実施したもので、基本計画ルートの東西約２キロメートルの範囲を対象にした。その結果、244箇所の遺跡が確認され、ルートをどのように変更しても、かなりの遺跡が建設用地内に入ることが確実となった。

昭和45年５月、埼玉県行政推進対策委員会高速道路部会幹事会において、建設省関東地方建設局から、５千分の１の図面によるルート説明、さらに、本年６月上旬には、日本道路公団に事業を委託することになっている、との説明があった。一方、この５千分の１のルート図は、県道路建設課にある地図によって各課が検討することにし、重大な支障のある場合は、５月中に、県企画課を通して建設省へ通知することになった。

それから約１年が経過。昭和46年４月、行政推進委員会高速道路部会幹事会において、関越自動車道建設計画にかかる東松山市～上里町間の関連公共事業調査について日本道路公団との打合せ会

が行われ、同年8月以降、関係各課による調査が開始された。この年、県教育局内の組織改正が行われ、社会教育課から文化財係が分離し、文化財保護室が新設され、まだ日本道路公団高速道路建設局と協議の最中であった関越自動車道川越市～東松山市間と平行して、文化財第二係がこの事務に当たった。さて、関連公共事業調査で、文化財保護室が担当した調査は、5万分の1の地形図上にルート案のセンター両側2キロメートル、さらに2千分の1の平面図でセンターの両側100メートルに所在する埋蔵文化財を調べることであった。この調査の結果、5万分の1の地形図を利用したセンター両側2キロメートルでは112箇所の埋蔵文化財が、またセンターの両側100メートルの範囲では、23箇所の埋蔵文化財が含まれていることを確認し、一応この結果を日本道路公団に通知し、埋蔵文化財については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

この間、日本道路公団は、県指定史跡杉山城跡及び十条条里遺跡をルートから大きくはずす努力がなされた。

昭和47年4月、日本道路公団高速道路建設局から千分の1平面図（設計図）が届けられ、本線内の遺跡分布確認調査が文化財保護室第二係の職員によって東松山側と上里町側からの二班に分かれてセンター杭をたどって幅約100メートルの範囲内で行われ、時期的に地上観察の困難な寄居町の一部を後日に残して、一応次の17箇所を日本道路公団に提示した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
滑川　1号	屋田遺跡	比企郡滑川村大字月輪字西新井	古墳群	古墳
滑川　2号	寺ノ台遺跡	比企郡滑川村大字水房字寺の台	塚	
嵐山　1号	越畑城跡	比企郡嵐山町大字越畑字城山	館城跡	戦国
寄居　1号	おかね塚	大里郡寄居町大字鷹巣	塚	
花園　1号	台耕地遺跡	大里郡花園村大字黒田	集落跡・古墳群	縄文・古墳
寄居　2号	新堀遺跡	大里郡寄居町大字用土字新堀	塚	
寄居　3号	沼下遺跡	大里郡寄居町大字用土字沼下	集落跡	奈良・平安
岡部　1号	清水谷遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	集落跡	縄文・古墳・奈良
岡部　2号	安光寺古墳群	大里郡岡部町大字本郷字清水谷 児玉郡美里村大字古郡字石神	古墳群	古墳
美里　1号	塚本山古墳群	児玉郡美里村大字下児玉字西山	古墳群	古墳
児玉　1号	雷電下遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字雷電下	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉　2号	飯玉東遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字飯玉東	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉　3号	女堀条里遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字四方田前 本庄市四方田字堰場	条里跡	奈良・平安
上里　1号	本郷東遺跡	児玉郡上里町大字七本木字本郷下	集落跡	古墳
上里　2号	愛宕遺跡	児玉郡上里町大字七本木字愛宕耕地	集落跡	古墳
上里　3号	中堀遺跡	児玉郡上里町大字堤字中堀北	集落跡	奈良・平安
上里　4号	若宮台遺跡	児玉郡上里町大字帯刀字堀の内	集落跡	奈良・平安

日本道路公団の用地買収および工事計画案の整ってきた昭和48年2月、高速道路建設局及び東松山工事事務所と、工事発注予定と埋蔵文化財についての打合せ会が行われた。東松山以北の工事区は、東松山側から滑川・嵐山・寄居・花園・美里・上里の六工区に分かれており、工事発注は、48年11月、上里工区から始まるという。ここで問題となったのは、48年度に発掘調査を実施しなければならないとなると、関越自動車道川越市～東松山市間で発掘調査した遺跡の整理報告書刊行事業とかち合って調査員が大幅に不足することになる。そこで、今後の工事発注計画と発掘調査を要す

る遺跡との関係を詳細に検討し、調査員の人員増に関する資料を整え、教育局内人事担当課と協議を開始した。

その後、公団側と48年度に調査事業を開始する方針で、細部の協議がもたれ、発掘調査から整理報告書刊行に至る調査事業年次もほぼ了解点に達した。

昭和48年4月7日付け東建総総第222号で、日本道路公団高速道路建設局長から、埼玉県教育委員会を経由して、文化庁長官あて、昭和42年9月30日付けで締結した「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」の第1項に基づく協議が行われ、埼玉県教育委員会は「当該地内に所在する埋蔵文化財については、公団と十分協議し、記録保存のための発掘調査を実施する」との副申を付け、文化庁に進達した。

これについて、文化庁は、昭和48年6月2日付け委保第59号で「当該施行地内の遺跡については工事前に発掘調査を実施すること。重要な遺構を発見した場合には、設計変更等によりその保存に配慮すること。」と回答した。

問題となっていた調査員の人員増も解決し、調査体制も整い、上里町地内の4遺跡の調査経費が48年9月、県議会に上程可決され、昭和48年9月25日付けで日本道路公団東京建設局長あて、発掘調査の実施について、昭和48年度計画書を添えて通知し、10月25日、上里1号（本郷東遺跡）をトップに関越自動車道東松山—上里町間約36キロメートルに所在する埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。

発掘調査を進める一方、山林や宅地等、時期的に地上観察の困難な場所についても、随時確認調査を進めた。その結果、新たに次の11箇所が確認され、その都度、日本道路公団に提示し、発掘調査を実施した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
嵐山　2号	下郷遺跡	比企郡嵐山町大字広野字中野	集落跡	縄文
寄居　5号	中井丘遺跡	大里郡寄居町大字用土字中井丘		縄文
寄居　6号	中山遺跡	大重郡寄居町大字用土字中山		
寄居　7号	狢久保遺跡	大里郡寄居町大字用土字狢久保		縄文
寄居　8号	平原遺跡	大里郡寄居町大字用土字平原	集落跡	奈良・平安
寄居　9号	鶴巻遺跡	大里郡寄居町大字赤浜字鶴巻	集落跡	縄文・平安
岡部　3号	北坂遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	古墳群・集落跡	縄文・古墳
美里　2号	甘粕山遺跡	児玉郡美里村大字甘粕字東山	集落跡	縄文・古墳・平安
児玉　4号	後張遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字下モ田 本庄市大字四方田字堰場	集落跡	古墳
上里　5号	耕安地遺跡	児玉郡上里町大字塊字中堀北	寺院跡	平安・鎌倉
上里　6号	久城前遺跡	児玉郡上里町大字嘉美字一本松西 本庄市大字今井字久城前		奈良・平安

（横川好富）

発掘調査の組織

1. 発　掘

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	石田正利
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課長	柳田敏司
		課長補佐	野村鍋一
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早川智明
			塩野博
			柿沼幹夫
			本間岳史
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	長谷川清
			太田和夫
			千村修平
発掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横川好富
			増田逸朗
			水村孝行
			宮崎朝雄
			中島宏

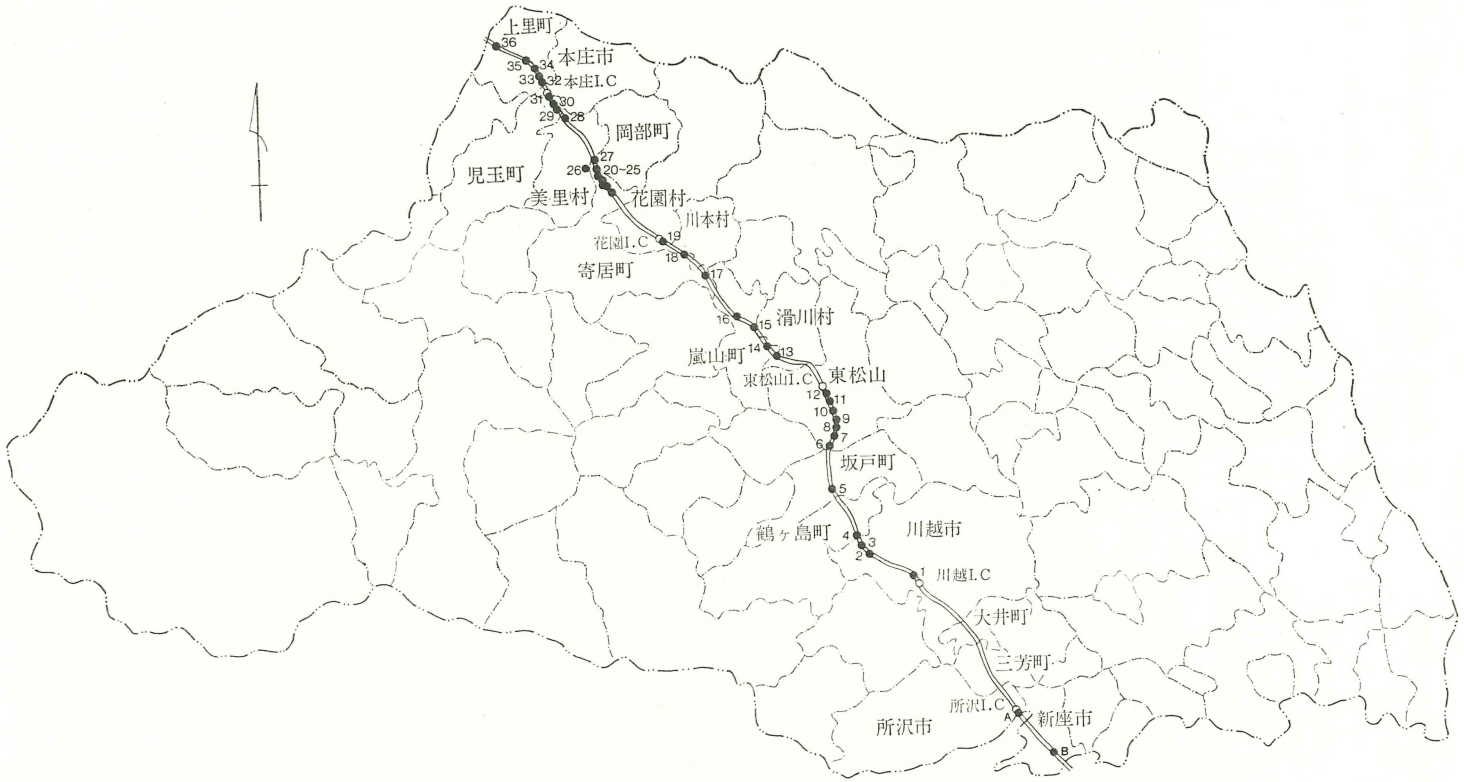
2. 整　理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	関根秋夫
		副理事長	本郷春治
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤悦光
			関野栄一
			福田浩
			本庄朗人
整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究第四課長	増田逸朗
			木村孝行
			宮崎朝雄
			中島宏

3. 協力者

大里郡岡部町教育委員会、大里郡寄居町教育委員会

児玉郡美里村教育委員会、地元区長及び地元住民



第１図　関越高速道関係遺跡一覧

関越高速道関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査年	時代・遺構	報告・遺跡No.
A	内畑	新座市片山字池田	44	縄文前　住居跡９他　　埼玉県遺跡調査会報告	第７集(1970)
B	城	所沢市城	44	縄文前　住居跡３、土壙　　〃	第６集(1970)
1	南大塚	川越市豊田本字中原	46・47	古墳３基　　埼玉県発掘調査報告書	第３集(1974)
2	中組	川越市的場字六畑	46	古墳・平安　土壙、溝	〃
3	上組	川越市笠幡字後大町	47	縄文早・弥生・古墳　住居跡14	〃
4	鶴ケ丘	川越市笠幡字下丹草 鶴ケ島町鶴ケ丘字富士見	47	縄文・鎌倉　土壙、溝	〃
5	花影	坂戸市花影	47	縄文中・奈良・平安　住居跡16、方形周溝墓８	〃
6	駒堀	東松山市田木字立野	46・48	弥生・古墳　住居跡35、方形周溝墓１、古墳２	第４集(1974)
7	田木山	東松山市田木字相生	47	古墳２基	第５集(1974)
8	弁天山	東松山市田木字弁天山	47	塚５基	〃
9	舞台	東松山市田木字舞台	46・48	古墳２基、縄文中・古墳住居跡11	〃
10	宿ケ谷戸	東松山市西本宿字宿ケ谷戸	47	中世　井戸２、溝	〃
11	附川	東松山市石橋字附川	47	古墳４基、古墳住居跡６、弥生後一括土器	〃
12	青鳥城	東松山市石橋字城山他	47	中世城郭　堀、溝、ピット群、地下式壙	第６集(1974)
13	屋田	滑川村月輪字西新井	53・54	弥生・古墳　古墳９基、住居跡21	滑川１号
14	寺之台	滑川村水房字寺の台	53・54	古墳・奈良　古墳１基、住居跡２、塚２基	滑川２号
15	中郷	嵐山町広野字中郷	53	縄文中　住居跡７、土壙、溝	嵐山２号
16	越畑城	嵐山町越畑字城山	52	中世城郭	嵐山１号
17	お金塚	寄居町鷹巣字西浦	52	塚１基	寄居１号
18	鶴巻	寄居町赤浜字鶴巻	52	縄文後　土壙26	寄居９号
19	台耕地	花園村黒田字竹後	52・53	古墳３、縄文中・住25、平安・住80、製鉄炉３	花園１号
20	新堀	寄居町用土字新堀	52	塚２基	寄居２号
21	中井丘	寄居町用土字中井丘	51	縄文中～後・平安　包含層	寄居５号
22	中山	寄居町用土字中山	51	中世～近世　炭焼窯２基	寄居６号
23	猪久保	寄居町用土字猪久保	51	縄文前　包含層	寄居７号
24	沼下	寄居町用土字沼下	51	平安　住居跡24、井戸	寄居３号
25	平原	寄居町用土字平原	52	平安　住居跡３、掘立柱１	寄居８号
26	甘粕山	美里村甘粕字東山	48・49	縄文草～前•晩～弥・平安　住居跡14、炭焼窯４	第30集(1980)
27	**北坂**	岡部町本郷字北坂	51・52	縄文草・平安　住居跡15、掘立柱９	埼埋文報告第１集(1981)
	清水谷		51	平安・中世　住居跡23、溝	
	安光寺	岡部町本郷字清水谷他	51	古墳２基	
28	塚本山	美里村下児玉字西山	49・50	弥生～平安　方形周溝墓９、古墳28、住居跡２	第10集(1977)
29	雷電下	児玉町浅見字雷電下	49	古墳～平安　住居跡63、井戸	第22集(1979)
30	飯玉東	児玉町浅見字飯玉東	49	縄文中・弥生・平安　住居跡２、方形周溝墓５	〃
31	後張	児玉町下浅見字下モ田 本庄市四方田堰場	50・51	古墳・平安　住居跡170	児玉４号
32	久城前	上里町嘉美字一本松西 本庄市今井字久城前	50	古墳末　溝、井戸	第15集(1978)
33	本郷東	上里町七本木字本郷東	48	奈良　住居跡６	第７集(1976)
34	愛宕	上里町七本木字愛宕耕地	48・49	古墳　住居跡８、溝、土壙	〃
35	中堀	上里町堤字中堀北	49	平安　住居跡８	第15集(1978)
	耕安寺	上里町堤字耕安寺	50	平安　包含層	〃
36	若宮台	上里町帯刀字堀の内	49・50	奈良・平安　住居跡75	上里４号

2　調査の経過

昭和51年５月10日、関係者が現地に集合して最終的打ち合わせ、諸確認を行った後調査を開始する。調査は岡部１号（清水谷）遺跡・岡部２号（安光寺古墳群）遺跡・岡部３号（北坂）遺跡の順にあたり、翌52年１月28日をもって終了した。

清水谷遺跡は安光寺１、２号墳の存在する尾根の南斜面にあたり遺跡としては連続するが便宜上分けて各遺跡名を呼称することとし同時に調査を開始した。

清水谷遺跡　５月11日からブルドーザーにより雑木、表土の一部を除去し始めるとともに、事務所の設置、器材搬入を行った。調査体制の整った５月中旬から基準杭を設置し、遺構の分布状態、保存状態を確認し、排土場所を決定するために路線にほぼ直交するトレンチを10ｍ間隔に入れた。その後、グリッド（10×10ｍ）を設置し、遺構、遺物の確認された地区を中心に発掘区全面にわたり遺構の確認作業に入った。その結果、古墳周溝１、国分期の住居跡23軒、溝、井戸跡、土壙等が確認され、６月下旬から梅雨に悩まされつつ遺構の精査にかかる。精査は８月上旬で終了し、８月19日をもって調査を終了した。

安光寺古墳　５月10日から１、２号墳の存在する尾根の雑木、篠竹の伐採にかかる。墳丘の測量写真撮影後、２基の古墳をとおすトレンチを尾根上に設定し発掘を開始する。このトレンチでは周溝、尾根の基部側に国分期の住居跡１軒を確認した。さらに１号墳には直交するトレンチを入れ調査を進めた。5月下旬からトレンチでの所見にもとづき墳丘の表土剥ぎ、周溝の現出作業にかかる。あわせて主体部の確認を開始する。主体部は立地状況から墳頂部に想定されたため慎重を期して精査を進めた。その結果、１号墳では不明瞭であったが、２号墳では墳頂部やや南側で主体部を検出した。７月下旬に、主体部の実測、写真撮影を終了する。墳丘の土層断面図、北側斜面にかかる周溝の追跡調査を行い、全測図を作製し、８月16日全ての作業を終了した。

北坂遺跡　清水谷遺跡、安光寺古墳の調査を終えた８月17日から調査を開始した。北坂遺跡は東から西にのびる台地上に立地しており、関越道上り線のサービスエリア敷地にあたり、ほぼこの台地全面が調査対象となった。調査前の分布調査では、高さ50㎝前後の地ぶくれ状の不規則なマウンドを数ケ所で確認しており、調査当初、これらを低墳丘古墳と考えトレンチを設定して発掘を開始したが、調査が進むにつれ土層の観察等から、これらは古墳ではなく自然の営力により主成したものであると判断するに到った。このトレンチで主に台地中央部から南斜面にかけて縄文式土器、石器、須恵器等が出土したため、全面に２×２ｍグリッドを設定して９月初旬から市松状に発掘を進めた。台地緩斜面では二次堆積のソフトロームが厚くなっているが、中央部では表土が浅く15～20㎝でハードロームに達するため作業がはかどり、11月中旬には、遺物が集中する地区（５ケ所）の拡張、精査を終了した。発掘区東南部のグリッドでカマドを持つ住居跡が確認されたため機械を入れて抜根、表土の一部を排除した。11月下旬から確認された遺構群の調査に入り、ほぼ年内に精査を終了した。翌52年１月11日から遣り方を設定し、実測にかかる。１月28日をもって全ての作業を終了した。

（中島　宏）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

山崎山丘陵の一支丘である諏訪山丘陵は、最高所標高108ｍを測り、水田面からの比高差40ｍほどで、丘陵内には後述する諏訪神社境内に弥生時代の集落、前期古墳で有名な長坂、川輪両聖天塚、尾根上には帆立貝式の諏訪山１号墳が存在する。

本書で扱う安光寺古墳群、清水谷、北坂遺跡は諏訪山丘陵の南面尾根上に存在し、南面西側に突出する尾根に安光寺古墳群、西側尾根上に北坂遺跡、両者に挟まれた谷間（あい）に清水谷遺跡が立地する。

安光寺古墳群は諏訪山古墳群の一支群と見られ、標高82ｍ、水田面からの比高差12ｍほどで、眼下に北流する天神川と美里平野を臨み、前方に開ける古郡地区には、那珂郡の郡衙とも関連あると推定される癈寺と集落跡が発見されている。

清水谷遺跡は、後述する北坂遺跡との谷間に立地し、標高75ｍほどで、谷先端部には今でも溜池が存在し、そこからの水路が遺跡東方を南下している。地形全体は、安光寺遺跡から東側水路にかけてゆるやかな傾斜を保ち、水路附近は二次堆積土層が厚く、遺構の存在は確認されなかった。

北坂遺跡は、標高86ｍを測り、南方に舌状に突出し、比較的フラット面が広い。当遺跡東側にも小規模な開析谷が入り込み、集落の東限を成している。南方に開ける水田地帯は半湿田と見られ、対岸丘陵までは直線距離で約300ｍを測り、ここには竪穴住居跡と掘立柱群が検出された国分期の沼下遺跡が確認されている。

児玉郡内の遺跡の立地、分布状況については、最近幾多の報告書で述べており、論文的文献も刊行されている（註１）。ここではこれを参照されたい。

以下、報告書では、児玉郡の地形の概観と、当遺跡に関連ある時代に焦点を合せ触れてみたい。

埼玉県北部の地形は、南側に上武山地を控え、その扇状地北方に、東流する利根川を臨み、山岳地形から大河川の氾濫原まで、かなり複雑な地形を成している。遺跡は、この地形に適応して、各時代時期に亘って数多く存在し、考古学者にとって、地域研究の最良のフィールドとされている。

上武山地末端にある当地においては、遺跡南方約3.5㎞に標高330ｍを測る鐘撞堂山を始め、200ｍクラスの尾根が県境神泉村へと連なっている。これら上武山地裾からは、当然小河川沿いに扇状地形が発達し、山地末端には小丘陵が連綿と連なり、或いは独立丘陵として存在し、ここには谷水田も多く見られ、複雑な地形を成している。

しかし、大まかな地形区分からすれば、上武山地から連なる丘陵扇状地と底地氾濫原に大きく分けられるが、妻沼底地から続く利根川右岸と、美里村内を流れる小山川両岸の底地とでは同一視できない。かつて私が美里村の地形を称して小奈良的大和三山の如くと言った通り、上武山地から連なる第三期層の独立丘陵である、生野山、大久保山、諏訪山三山が存在し、美里平野は盆地的地形を成している。

この盆地内を流れる川は、上武山地から源を発し、身馴川・志戸川は、当平野部を抜ける大久保山東方で合流し、小山川を成している。流路は大久保山にかなり左右されており、岡部町榛沢地区や利根川右岸とでは、地質的にもかなり異なっている。

小河川の支流は、各谷水田に枝を伸ばし、そこにはグライド層の発達した湿地を形成している。又、この小河川流域も、前述する盆地的地形のため、各所に湿地を残している。

一方、山岳に近い美里村盆地内は、扇状地特有なかなりの礫層が発達し、耕作には不適合な点が多い。このため、上武山地の末端に広がる丘陵とあいまって、現在でも桑園が多く、畑地と化している地域も少なくない。すべからく、平野部西端を流れる身馴川は、河川改修もあってか、冬期の水位は低く、水無川に化する事が多い。この為か、当地域には溜池が発達している。勿論、溜池の起源は明らかでないが、その機能は一般的に、田植時の給水が主であるとされている。

一見すると、地図上では、利根川右岸と美里盆地とで同一視されそうな平野部でも、その地質、水位はかなり異なっている。いずれにしても、この様な水系、水位、土壌の相違は、弥生時代以降の米作中心社会に於ては、その係り方に決定的影響を生じてこよう。

先土器時代

県北部における先土器時代の遺跡は、比較的ロームの発達している3つの独立丘陵、櫛挽台地、児玉丘陵、本庄台地の一部においてさえ、本格的調査は実施された事はなく、ましてユニットや層位的関係で捉えられた例は聞かない。しかし、集落跡の調査、表面採集等では、偶然にも1～2点石器が発見された事はある。県教育委員会で調査した古川端遺跡（註2）では、細石刃1点、グレイバー1点、剥片3点が出土している。当遺跡は小山川右岸に位置する沖積層の自然堤防上に立地し、標高58*m*を測り、縄文後期、古墳時代後期を主体とする。他に岡部町周辺から出土した石器が高橋一彦氏により所蔵されているが、何れにしても数少ない。

県北児玉地方においては、関越道、新幹線、圃場整備事業等でかなり発掘件数が増えている今日遺跡数が少ないのは問題である。地形的に第三期礫層上に黒バンド層、ハードローム、ソフトロームという三層が、僅か150*cm*足らずにあるという地層的条件に由来するものか、或いは、研究者自身の調査方法に起因するのかは、今後に大きな課題として残ってこよう。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、上武山地裾部丘陵に多く分布する。これに加えて3つの独立丘陵上にも分布し、近年その幾つかが調査され公表されている。丘陵端、又は扇状地の遺跡としては、美里村北貝戸遺跡（註3）、水田面からの比高差1*m*前後に立地する古川端遺跡からは縄文後期の遺物が発見されている。又、同様な立地として知られている雷電下遺跡（註4）からも縄文中期の土器が検出されている。

美里盆地を離れ、藤治川右岸櫛挽台地上には、爪形文土器や有舌尖頭器を出した西谷遺跡（註5）、縄文中期の集落である水窪遺跡（註6）が見られる。又、榛沢東光寺裏遺跡（註7）では、縄文前期諸磯期の集落が調査されている。

いずれにしろ、当遺跡周辺で発掘調査された遺跡は少なく、その編年体系などは明確でない。特に西谷、宇佐久保遺跡（註8）を除き早期の遺物は少なく、現在知見にのぼる遺跡としては、昭和51年県文化財保護課で調査した甘粕山遺跡が挙げられるのみである。この遺跡は、諏訪山から小丘陵を越えた至近距離に存し、今は削平され存在しないが、西側に舌状に突き出した丘陵上に位置し早期の土器、石器群が発見されており、北坂遺跡出土品との対比が注目されている。他に、児玉町

古川端遺跡
東光寺裏遺跡
水窪遺跡
西谷遺跡
清水谷遺跡・安光寺古墳
北坂遺跡
北貝戸遺跡
宇佐久保遺跡
甘粕山遺跡
美里村

第2図　遺跡分布図(1)

長沖古墳群内（註９）からも、最近加曾利Ｅ期の竪穴住居跡が発見されている。

以上、調査例は少ないが、縄文時代の遺跡は丘陵上に大多数発見されており、岡部周辺の早期の遺跡は、大局的に見て櫛挽台地端の湧水地、ないしは、これより発する小河川附近に散在していることが判明している。自然堤防上に位置する古川端遺跡の場合は、小山川に面し、縄文後期の立地条件として一般的なあり方を示している。

弥生時代

先に触れたごとく、美里村周辺は上武山地にその源を発する小河川と谷田に恵まれており、初期稲作農耕に適する場所が幾つか存在することは、以前から研究者間では注目されていた。しかし、現在までのところでは、東京大学に用土遺跡（註10）の計画的発掘とその幾つかの新事実から弥生時代の内容が明らかに成っていたのみであった。

これは、開発行為による記録保存の対処の仕方に、種々問題があったためで、最近やっと丘陵上の調査も本格化し、当地域にも遅ればせながら明るい兆しも見えてきた。

用土遺跡は、当遺跡とは水田をへだて、北側に突き出す舌状台地上に位置する標高70ｍ、水田面からの比高差10ｍを測り、西側に小さな谷が、そして北側には、東西に広がる比較的広い湿地水田が見られる。遺物の内容としては、櫛描文を有し、竪穴住居跡は長方形と楕円形に大きく分かれ、又、土器の幅も少なくとも２～３型式に分かれることは確かである。石器としては、有角石斧、磨製石鏃を有し、中期後半から後期初頭にかけての集落跡とされている。

関東地方初期弥生式土器と知られている四十坂遺跡（註11）は、標高50ｍ、水田面からの比高差10ｍの櫛挽台地末端に位置し、眼下に小山川を臨む。台地端に発する湧水と、小山川の造る後背湿地とで、現在でも湿田が見られる。

隣接する甘粕山遺跡内からは、水神平系土器が多量に検出された如来Ｃ地点遺跡が存在し、東国でも数少ない資料として知られている。

生野山古墳内遺跡（註12）からは、比企地方にその分布圏の中心を持つ、吉ケ谷系土器が竪穴内から出土している。

同様に、塚本山古墳（註13）内にも竪穴が発見され、関東東部に類似する壺形土器が検出されている。

さて、ここで県北弥生文化の認識を一変させた、神明ケ谷戸遺跡（註14）を紹介しておく。調査者坂本和俊氏が中心となり、土取り工事に先がけて調査を実施し、悪条件下にも拘わらず多大の成果を得た。

遺跡は上武山地末端から伸びる松久丘陵上に位置し、標高 100ｍ、 南面に僅かに開析された谷水田面からの比高差15ｍを測る。

遺跡の内容は、丘陵斜面に環濠を周らし、この溝内に、同時期と推定される信州系土器が存在し竪穴住居跡も13軒発掘された。北側一部未調査部は残るが、環濠が機能していた一単位集落が捉えられるという。調査者によれば、環濠の機能していた時期は中期末前後だという。

以上の神明ケ谷戸遺跡の調査結果は、県北における弥生文化の解釈の仕方に、大きな資料を提供する事となった。

東富田古墳群
塚本山古墳群
生野山古墳群
千光寺古墳群
西山古墳群
諏訪山古墳群
安光寺古墳
広木大町古墳群
大仏古墳群
駒衣古墳群
白石古墳群
羽黒古墳群
切通古墳群
美里村
阿那志
寄居町
弥生時代集落
古墳時代集落
古墳群
円墳
方形台状墓
方形周溝墓
前方後方周溝墓
帆立貝式古墳
祭祀遺跡
大仏廃寺

第3図　遺跡分布図(2)

先ず、土器論に於て、信州系土器との対比の中で、編年を強化していかなければならない事を再認識せしめ、又、社会構造上に於ては、環濠集落、方形周溝墓の検出等から、南関東との対比が可能になった。又、調査方法では、当地域の弥生文化を解明するのに、上武山地末端の丘陵上の遺跡（山林となっているため確認できていないものが多い）を再確認する必要にせまられている。もっとも、諏訪神社境内や生野丘陵、前述した用土遺跡に於ても丘陵を全面的に発掘したわけでもなく神明ヶ谷戸遺跡の発掘を契機に対処の仕方を一考し、今後丘陵上の調査は一段と重要視して行かねばならない。

古墳時代

安光寺遺跡の古墳時代の遺構は、方形周溝墓と円墳一基である。ここでは、児玉地方の古墳時代に関連する遺跡群について触れておく。

県下に於ける児玉郡の古墳の特徴は、発生期の形態が円墳で、後に現われる前方後円墳が比較的小形で、全長50ｍ以下のものが大部分を示すことである（註15）。そして、前方後円墳の上限は、現時点では、５世紀第Ⅱ四半期をもって出現し、７世紀の第Ⅰ四半期にはその終焉を迎えている。

群集墳は、第一段階（註16）の５世紀代のものは資料が少なく、第２段階（註17）の６世紀後半を中心としたものはその数が多く、第３段階（註18）の７世紀中頃を中心とした末期群集墳に大きく分類できる。

集落としては、五領期のものとして、後榛沢遺跡群（註19）の中に和泉期も含めて数10軒確認されている。この遺跡群は小山川の自然堤防上に立地し、方形周溝墓も12基発掘され、この中に前方後方型を含むことで注目されている。

女堀川の自然堤防上に位置する後張遺跡（註20）は、五領期後半から鬼高期前半にかけて連綿と連なる集落であるが、鬼高以前の竪穴住居跡が190軒検出されている。

神流川の扇状地上に位置する西富田（註21）、諏訪遺跡（註22）周辺にも、後張遺跡同様、五領和泉、鬼高期に亘る集落が確認されている。

又、上里町愛宕遺跡（註23）では本遺跡と同様、和泉期の単純集落が確認されており、ここも神流川扇状地上である。

以上が遺跡の規模がほぼ予測し得る最近の発掘された遺跡であるが、生野山古墳群内、ミカ神社前遺跡（註24）等にも少々確認されている。いずれにしろ沖積扇状地に臨む大集落が多く、古墳時代第Ⅰ段階の積極的水田開発を推測し得るものである。

県内でも当地域は前期古墳が多いことで有名である。弥生時代からの伝統的墳墓である方形周溝と古式古墳との関連を摑むためには絶好のフィールドとも言える。

附近の古墳の変遷は、一応、生野山、大久保山、諏訪山三丘陵に加え、松久丘陵においても明らかになりつつあり、各丘陵ごとに基本的にはその変遷を辿ることが出来る。

先ず、諏訪山丘陵では、方格規矩鏡と多数の石製模造品を出土した長坂聖天塚古墳（註25）、長胴化の埴輪壺を出土した川輪聖天塚（註26）、こたらは丘陵西側斜面に立地し、天神川に面している。

次に丘陵上に帆立貝式を呈し円筒埴輪Ｂ種横刷毛を有す諏訪山古墳、隣接する円墳等が古式の部

第4図　遺跡分布図(3)

類に属する。又、同丘陵が南にのびる尾根上に、今回報告する安光寺1号墓、2号墳が存在する。

松久丘陵においては、弥生時代で記した神明ケ谷戸遺跡内に古墳時代の方形周溝墓が検出され、丘陵上の一基は2.5m程の盛土を有し、周溝は方形に周り、盛土下の主本部から玉類が出土している。ここでは方形周溝墓から墳丘を有する台状墓とも言うべき、一見古墳と見まちがう様な盛土の発達した墳墓への変遷がたどれる。一方、白石古墳群内には2基の長大な粘土槨を有する古墳も検出され、4～5世紀代の墓制が明らかに成りつつある。生野山古墳群内においては、丘陵上にある将軍山古墳を中心に、TK 208以前の樽形瓹を出土する古墳からB種横刷毛の円筒埴輪を樹立する古墳も調査されており、五領式土器を出土した方形周溝墓も含め、一丘陵内の墳墓の変遷が解明されつつある。

大久保山丘陵では、塚本山古墳群の調査で五領期に属する方形周溝墓9基が調査され、その内2基は盛土が有り、14号方形周溝墓からは剣が出土し、周溝内からは五領末期の土師器が発見されている。同一丘陵上に有る前山2号墳は、支丘尾根上に立地し、2.5mの墳丘を保持し、円墳と考えられ、墳頂部から長大な粘土槨が検出された。ここからは剣、鉇、鎌（直刃）、刀子が出土し、周溝内から和泉Ⅰ式の坩形土器2点が発見された。そして眼下に広がる本庄台地上には滑石製刀子、同直刃鎌が出土した公卿塚が存在し、これからはB種横刷毛を有する円筒埴輪が出土している。

以上大久保山丘陵、又、これに隣接する古墳の大きな変遷は、土器形式的には、塚本山方形周溝墓→同14号墓→前山2号墳→公卿塚の順で大きな流れを追うことが出来る。

祭祀遺跡としては、こぶケ谷戸（註27）、亀甲山、狢山（註28）が古くから著名である。祭祀遺物は4～5世紀代の宗教的諸イデオロギーを反映したものとして良く知られている。

こぶケ谷戸遺跡は、天神川の右岸に位置し、かつては、こぶ石と呼ばれる自然石が露出しており小沢国平氏によって調査された事もある。遺物は滑石製品の他、鉄斧、手捏土器、土師器、須恵器等も発見され、その上限は土師器よりすれば五領末から和泉初頭に位置づけられ、天神川流域の農事祭祀と深い係りをもつものである。

亀甲山に関しては、滑石製品と土師器が出土していたが、現在は跡形もなく丘陵は削平されてしまっている。なお、亀甲山は本諏訪山の眼下に位置し、又、こぶケ谷戸も眺望できる。

狢山祭祀遺跡は、諏訪山と山崎山を分つ峠の中腹に位置し、土製人形、動物、器材等が出土して有名であるが、遺物は紛失し、國学院大学に実測図を残すのみである。一部高橋一彦氏の所蔵の土器類等を考慮すると和泉的土器が含まれ、5世紀代にも峠の祭祀が行われたことが予想される。一応、その地理的条件から、国郡制が成立する以前のクニ境的祭祀の場として推測している。

古墳時代の水田開発遺構として、筆者自身、本庄市諏訪遺跡で調査した大溝を7世紀前半の掘削で、給水のための水路として認識し報告している。条里制との関係はともかく、諏訪遺跡の大溝の成立は、県北部で前方後円墳が消滅し、第3段階の末期群集墳が発生する要因の中に求められ、郡司層クラスが中央政権との係りのもとに積極的に開発行為に取り組んでいった証しと見ている。条里遺構の問題は、圃場整備等の開発行為を埋蔵文化財の危機として真剣に取り組む中で早晩解決しなければならない。

寺院跡については調査例は少なく、はっきりしているものはないが、県史等で知られているもの

が幾つかある。寄居町牧ノ内（註29）、美里村大仏、神川村緑野（註30）、上里町五明癈寺がある。

これらの遺跡においては、７～８世紀の氏寺的性格の調査が急務とされている今日、更に官衙的癈寺とも関連させ調査を進めていかねばならないが、現在のところ十分な資料の集積には至っていない。又、式内社としてはミカ神社、金鑽神社、上里町に４社がある。

隣接する甘粕山遺跡では炭焼窯が発見され、同一台地上に金糞と呼ばれている地名があり、スラッグが表採できる。又、花園村台耕地遺跡では、製錬炉３基の他工房跡が調査されている。少し距離は離れるが、伊奈町大山遺跡でも製錬炉が発見され、すでに報告されている。

炭焼窯から短絡的に鉄生産へと結びつけるのは炭そのものの使用場所やその目的が解決されていない現在、問題は残ろうが、花園村で鉄製錬炉が発見されている事からすれば、そう遠くない場所で使用された事は暗示されよう。

平安時代の本地域において、児玉党、猪俣党の武蔵武士団が発生するその要因は、他に類を見ない農業生産の発達と、これに加えて鉄製品（農具、武器）の自給が必要とされよう。炭窯一基の発見と資料化は、着実に中世史の中に組み込まれていく日も遠くないものと思われる。今日報告する北坂遺跡の国分期の集落のあり方とも関連し、中世生産跡と集落との関係を捉えてゆく事は、今後の大きな課題となろう。

（増田逸朗）

註１　柿沼幹夫　上越新幹線埋蔵文化財調査報告書Ⅱ「東谷・前山２号墳・古川端」　埼玉県教育委員会　昭和53年３月
　梅沢太久夫「下廓遺跡」上里町下廓遺跡調査会　昭和53年３月
　柿沼幹夫　「埼玉県北部における縄文遺跡の立地について」　埼玉考古第18号　昭和54年５月
註２　鈴木敏昭　上越新幹線埋蔵文化財調査報告書Ⅱ「東谷・前山２号墳・古川端」　埼玉県教育委員会　昭和53年３月
註３　菅谷浩之　「美里村北貝戸遺跡の調査」第11回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和53年２月
註４　中島宏　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ「雷電下・飯玉東」　埼玉県教育委員会　昭和54年３月
註５　栗原文蔵、小林達雄　「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」　考古学雑誌47―２　昭和37年
註６　栗原文蔵、佐藤忠雄　「水窪・新井遺跡の調査」「水窪遺跡―第二次―」　岡部町教育委員会　昭和51年　昭和52年
註７　中島宏　「岡部町新井遺跡の調査」第９回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和51年２月
註８　中村倉司　「宇佐久保遺跡」　埼玉県遺跡調査会　昭和54年12月
註９　菅谷浩之　「長沖古墳群第４次発掘調査」　埼玉県児玉郡児玉町教育委員会　昭和54年３月
註10　曾野寿彦、吉田章一郎　「石角石斧を出土した埼玉県の弥生式遺跡」　東京大学教養学部紀要11　昭和32年
　曾野寿彦、吉田章一郎　「埼玉県寄居町用土弥生遺跡調査概報」　東京大学教養学部紀要28　昭和38年
註11　栗原文蔵　「四十坂遺跡の初期弥生式土器」上代文化第30号　昭和35年
註12　菅谷浩之、駒宮史朗　「児玉町、美里村生野山古墳群発掘調査概要」　第６回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和48年２月
註13　小久保徹　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ「塚本山古墳群」　埼玉県教育委員会　昭和52年２月
註14　昭和54年　坂本和俊氏により調査された。氏より詳細な御教示を受けた。
註15　田口一郎、後藤範章、山崎武、金子章　「児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」いぶき８・９合併号　埼玉県本庄高等学校考古部

註16　方形周溝墓が5世紀前半で激減し、6世紀中頃横穴式石室を採用するまで、見るべき群集墳はないとされている。しかし、東松山市諏訪山古墳群、千光寺6号墳、長沖古墳群中等、この間を埋める古墳も増えつつあり、実態は明らかになりつつある。

註17　青柳、長沖、黒田古墳群等、埴輪を有し初期横穴式石室が導入され、石室、周溝墳丘等に多大な労働力を投入している。

註18　横塚山、鹿島古墳群等代表的古墳群で、埴輪、前方後円墳の消滅、墳丘、石室構築の省力化が目立ち家族墓的性格も薄らぐ。

註19　佐藤忠雄　「後榛沢遺跡の調査」　埼玉県大里郡岡部町教育委員会　昭和53年3月

註20　増田逸朗、宮崎朝雄　「児玉町後張遺跡の調査」　第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和52年

註21　菅谷浩之　「本庄市西富田新田遺跡調査概要」　第5回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和47年2月

註22　増田逸朗、柿沼幹夫、小久保徹　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ「下田・諏訪」　埼玉県教育委員会　昭和54年3月

註23　駒宮史朗、大和修　埋蔵文化財調査報告Ⅴ「愛宕遺跡」　埼玉県教育委員会　昭和52年3月

註24　増田逸朗　「国道254号線の二遺跡―ミカ神社前遺跡・地台遺跡―」　第2回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和44年1月

註25　菅谷浩之、坂本和俊　「美里村長坂聖天塚古墳の調査」　第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨　昭和50年2月

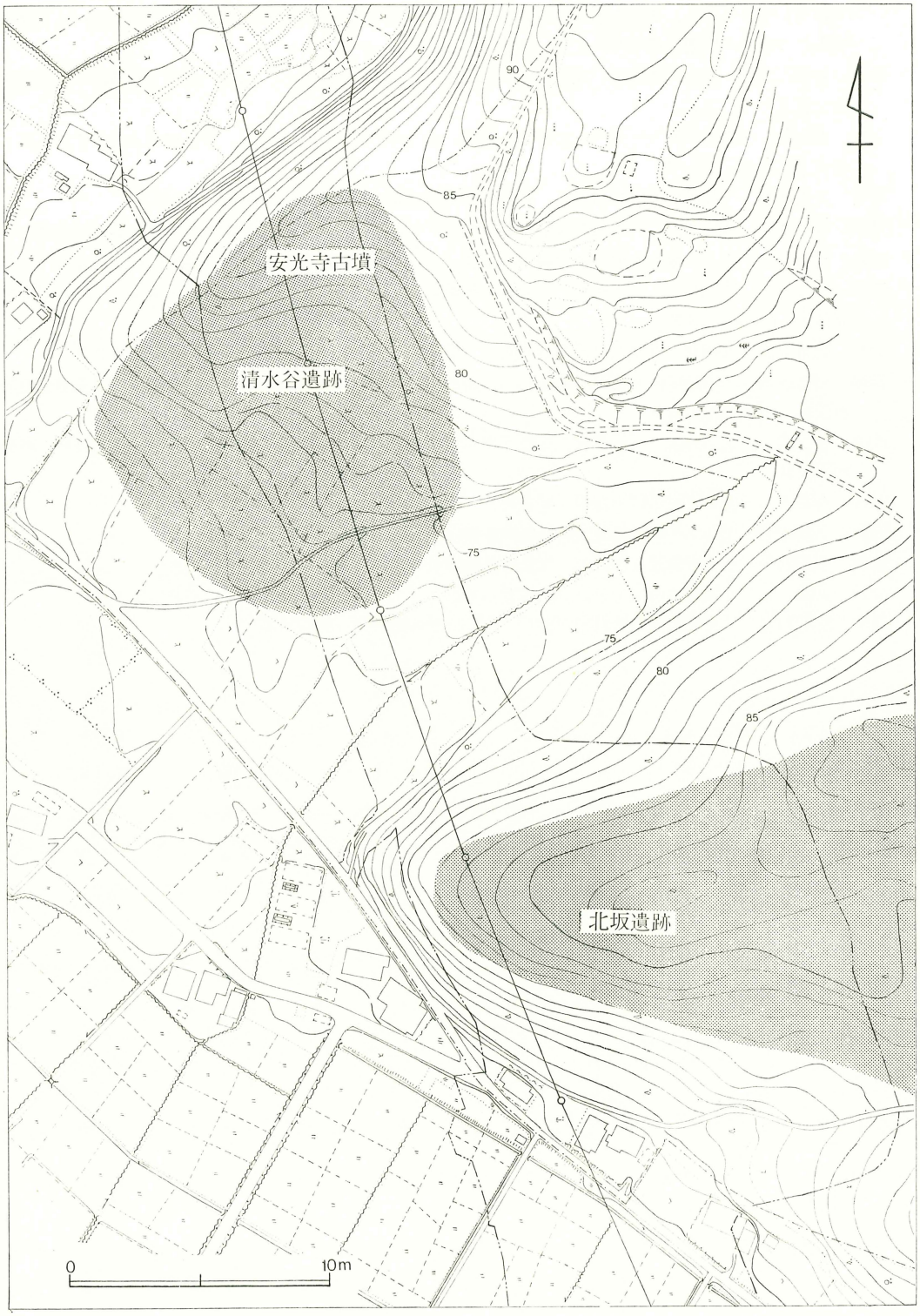
註26　塩野博　「埼玉県美里村川輪聖天塚古墳」　日本考古学年報24　昭和46年

註27　小沢国平　「こぶケ谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書」　昭和35年

註28　小沢国平　「今泉祭祀と祭器」　文化財保護委員会埋蔵文化財要覧㈡　昭和30年

註29　高橋一夫　「馬騎の内廃寺の調査」研究紀要第1号　埼玉県立歴史資料館　昭和54年3月

註30　坂本和俊　「青柳古墳群発掘報告書」　埼玉県遺跡調査会　昭和48年



第5図　遺跡地形図

Ⅲ　清水谷遺跡の発掘調査

1　遺跡の概観

清水谷遺跡は諏訪山（標高108ｍ）の西端に位置し、眼前に生野山（139ｍ）、山崎山（116ｍ）との間に広がる広大な小山川、志戸川扇状地を見おろす丘陵の南斜面に立地している。斜面を登りつめると安光寺古墳群に連続する。この斜面とほぼ南北に走る路線の敷地約7,500㎡が調査区域で、標高は74～81.5ｍである。基本層序は表土15～30㎝、褐色土（遺構確認面）10～30㎝をもってハードローム層に到る。調査区南側では北坂遺跡が占地する台地との間に入る谷の埋没部分にあたり、ローム層は削られており表土下には漆黒色土、黒褐色土が厚く堆積している。地目は、雑木林、荒地、桑畑であった。調査の結果、検出した遺跡、遺物は次のとおりである。

縄文式土器、石器　　早期～中期

古墳跡　　１基

平安時代の住居跡23軒、建物跡１棟、井戸跡１、土壙４基、溝４本（中世以降）

調査前の表面採集では土師器、須恵器片に混じてかなり多くの縄文中期の土器片を得ていたため該期の集落を予想していたが遺構は検出されなかった。この時期の遺跡の主体は調査区の東側、先にふれた谷に向かって南にのびる台地上にあると思われる。押型文、茅山、諸磯ｂ、加曾利Ｅⅱ式土器が出土している。

古墳跡は調査区北部の緩斜面に検出された。墳丘は完全に削平されている。東側で住居跡、建物跡に切られており一部は早くに攪乱されていたことが窺われる。住居跡は調査区北寄りに構築されたグループと谷側の一群とが検出され、中央では途切れる。北群は緩斜面に立地しているため南壁が不明瞭なものが多い。住居跡相互の重複がなく、１軒（18号住居跡）を除き、国分期の遺物を出土している。その分布状況は多分に古墳跡に規制されているようであり、さらに３～５軒の小グループに分かれている。南群は平坦地にあるが、谷を埋めている黒色土、黒褐色土中に構築されている南寄り５軒は掘り込みが浅く、保存状態が極めて悪い。カマドの確認から住居跡の精査にかかるという状況であった。出土遺物は北群とほぼ同時期であった。建物跡は２×３間で柱筋がきれいに整ったもので、住居跡と重複している。

溝は古墳、住居跡を切って掘られており、検出された遺構の中で最も時期が降る。うち調査区を北側で横切って延びるもの、これに連続して谷近くまで延びるものからは青磁少片、中世陶器片が出土している。いわゆる境界溝とは明らかに異なるものであるが、調査区内からの成果では、その機能、性格は詳らかにし得なかった。

清水谷遺跡で検出された集落はさらに調査区東西に延びている—とりわけ北群—ことは想像に難くないが、調査成果と立地する地形を観察すると、今回発掘調査を実施した地区が集落の中心にあたることが推察される。　　（中島　宏）

第６図　清水谷遺跡全測図（Ｓ＝1/800）

2　遺構と出土遺物

(1)　古　墳

1号墳（第7図）

1号墳は、清水谷遺跡西端に位置し、安光寺古墳群東側に接して存在する。本墳は清水谷遺跡の集落調査時に偶然にも発見されたもので、元来は低墳丘を存していたものと考えられるが、既に重機による削平が実施されており、詳細は不明である。

古墳は、西側を2・3・4溝で切られ、さらに東側は19号住居跡で切られている。

規模は、内径14.40m、外径17.50mを測り、ほぼ整円形を呈する。

周溝は、上幅1.6m、下幅1.0m、深さ0.7mの規模でほぼ一定し、 内側立上がりは強く、外側はややゆるやかな傾向にある。東側には浅いブリッジが見られるが、陸橋的性格とは異なるものと見られる。

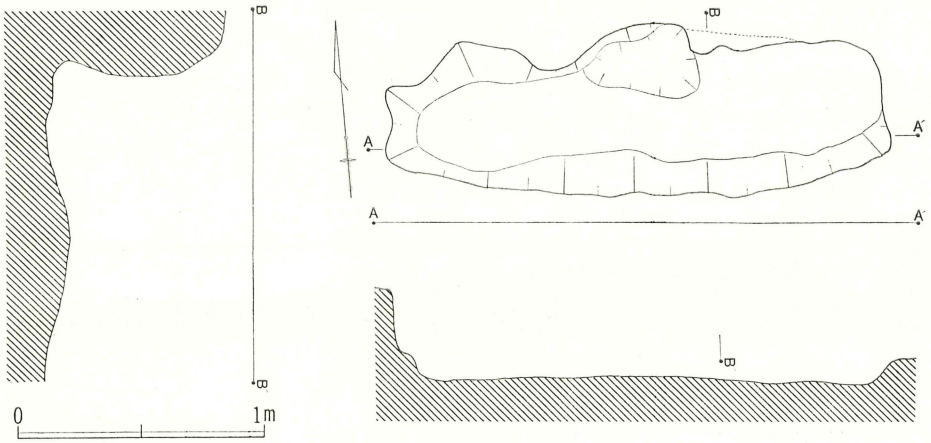
主体部は、前述のとおり削平されているため不明であるが、北側周溝内に土壙が検出されている。

土壙は、長辺2.0m、短辺0.6mを測り、周溝底より僅かに深く掘り込まれている。

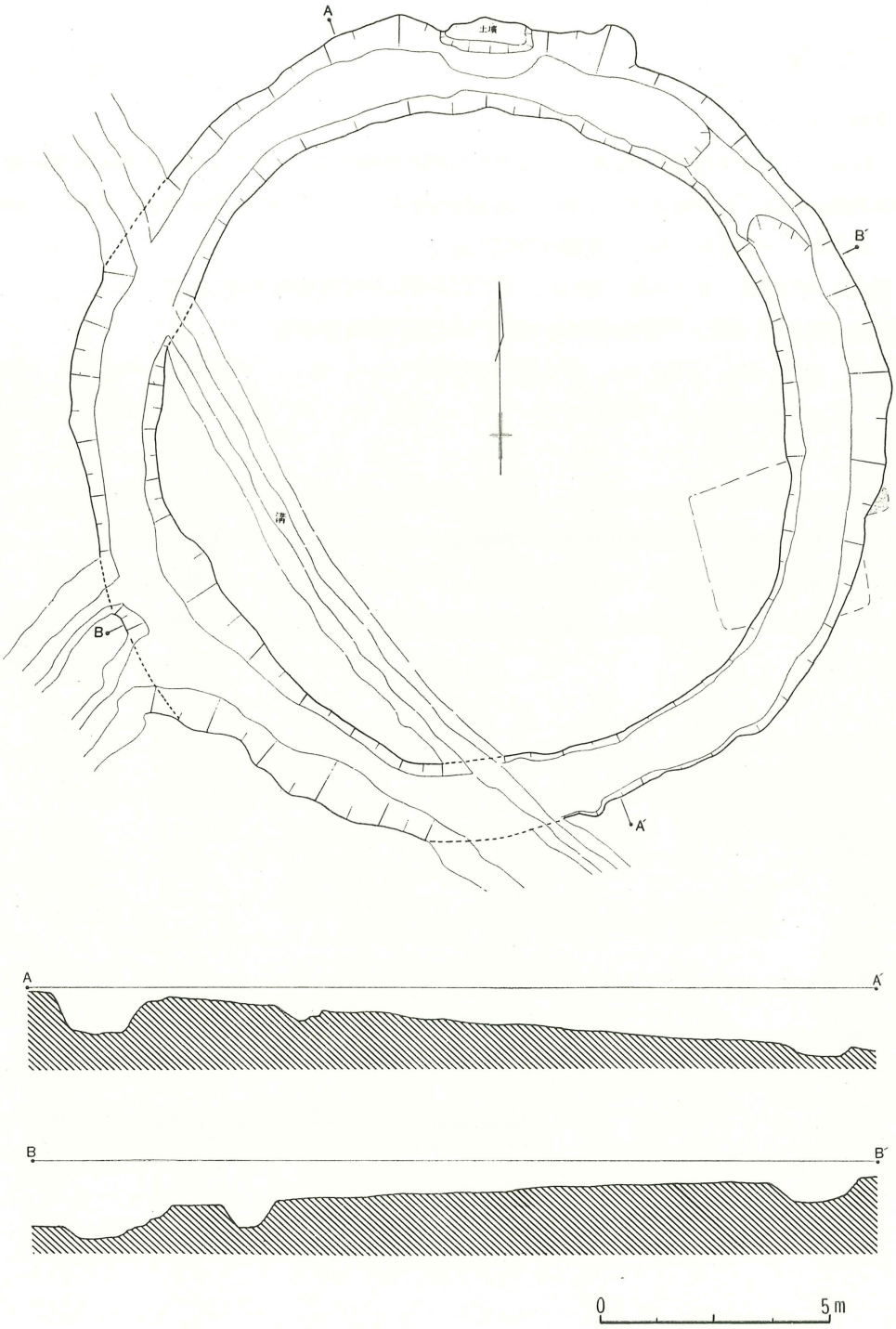
周溝側の壁は不明であるが、外側の壁はオーバーハング気味にロームを掘り込んでいる。

なお、当墳からの出土遺物は、土壙内から焼土が少々見られたのみで、土師器、埴輪等は検出されなかった。

（増田逸朗）



第7図　1号墳周溝内土壙



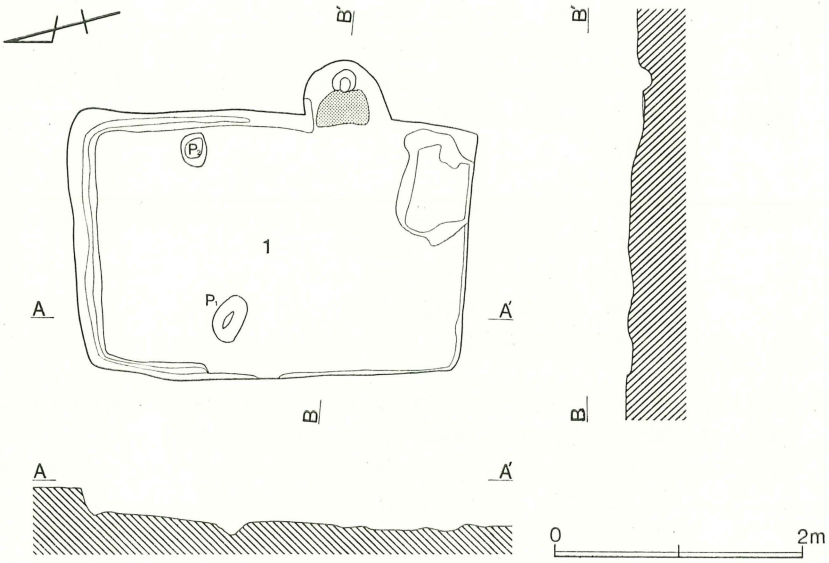
第8図　1　号　墳

(2) 古墳～平安時代の住居跡

1号住居跡（第9図）

円形周溝の西側に位置し、2号溝に近接している。325×215㎝の長方形プランを呈し、長軸は南北を指す。北半に周溝がめぐる。幅10㎝、深さ平均5㎝。壁高は北辺で約20㎝あるが、南及び西辺の一部では5㎝前後と浅く、かろうじてプランが摑める程度であった。カマドは東辺の南寄りにあり底に少量の焼土が認められた。先端立ち上がり部に小ピットがある。裾に用いられていたと考えられる大形の片岩が覆土及び南東コーナー部の貯蔵穴と思われる落ち込み中から出土している。ピットはP_1、P_2の2本あるが浅い。

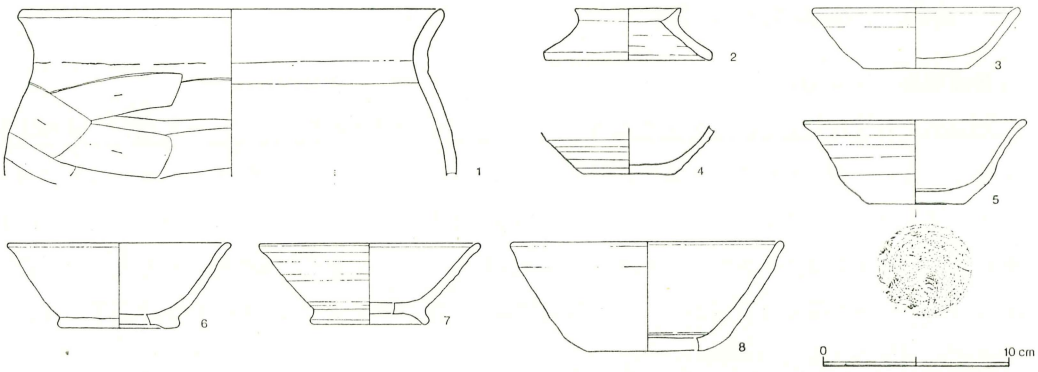
遺物は甕、坏、鉄製品があり北東コーナー部、カマド前面に集中して出土した。



第9図　1号住居跡

1号住居跡出土土器（第10図）

器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径　22.6	口縁は短く緩やかに外反する。肩部の張りも緩い。器肉は厚い。胎土微細粒砂含み密。焼成良。淡橙褐色。	頸部に巻き上げ痕。口縁部整形横ナデ後外面肩部横位のヘラケズリ内面はヘラナデ。	カマド出土口縁と肩部のみ30%
甕	2	台径　9.0 台高　2.8	低い台が「ハ」の字に開く。微細粗粒砂含む。やや軟質。器面荒れる。明橙褐色。	台部は貼付部より剥落。横ナデ整形。つくり、整形ともに雑。	35%

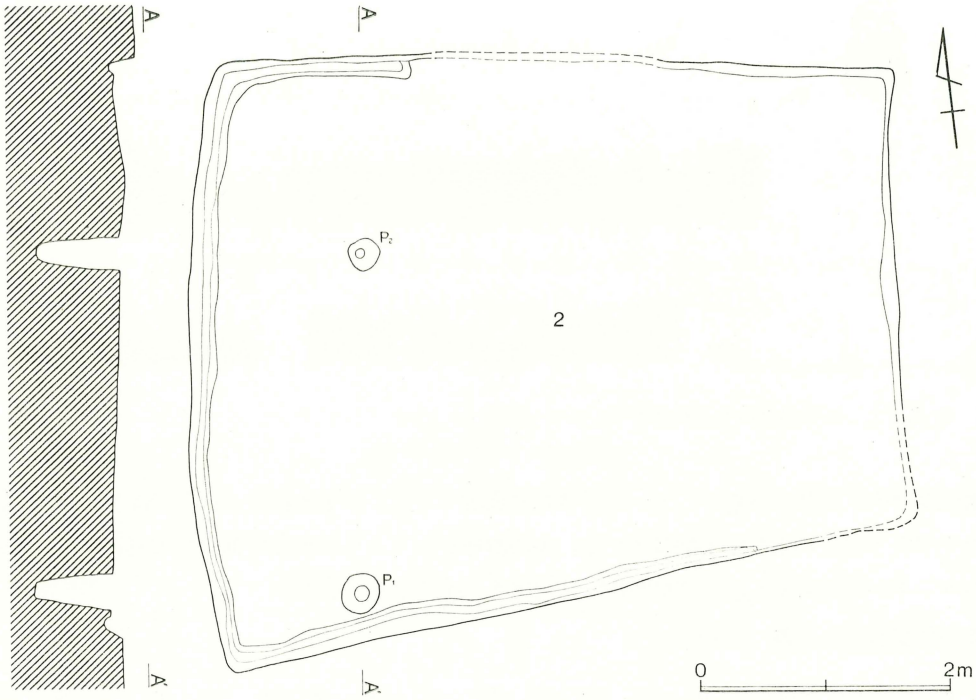


第10図　1号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	3	口径 11.2 器高 3.3 底径 5.6	底部より体部下半に張りをもち開く。口縁部はやや外反する。微粗粒砂含む。軟質。外面灰色、内面灰褐色。	ろくろ整形。右回りの回転糸切り痕。底部に高さ3㎜の粘土小塊が貼り付いており不安定。	口縁部25% 底部60%
坏	4	底径 4.8	径は小さく平底。体部は直線的に開き、中位に張りをもって立ちあがり気味となる。微細粒砂含む。茶褐色、内外面とも灰黒色部を有しその部分は磨滅する。	ろくろ整形。底部は回転糸切り。	底部と体部下半のみ50%
坏	5	口径 12.4 器高 4.5 底径 5.0	径の小さな平底。体部下端で強い張りをもって開き、口縁はそのまま外反する。微細粒砂含む。焼成良。淡橙褐色、外面底部から体下半にかけて黒色。	ろくろ整形。底部は右回りの回転糸切り痕が残る。	口縁部30% 底部100% No.2
坏	6	口径 12.0 器高 4.4 高台径 6.6 高台高 0.6	体部は緩く内湾して開き、口縁はやや外反する。高台は低く雑なつくり。細粒砂小石含む。やや軟質橙褐色。	外面に巻き上げ痕、ろくろ整形。高台は貼付け。全体的に雑な整形	口縁部38% 底部10%
坏	7	口径 11.9 器高 4.3 高台径 6.4 高台高 0.8	体部は直線的に大きく開き、口縁はわずかに外反する。高台は細く「ハ」の字に開く。微細粗粒砂含む。赤褐色。	ろくろ整形。高台は貼付け。	口縁25% 底部15%
埦	8	口径 14.8 器高 5.9 底径 6.3	底部を欠く。体部下端に張りをもち開く。口縁部はやや外反する。微細粒砂含む。淡橙褐色、内面体下半から底部にかけて灰黒色。	ろくろ整形。体部下端は底部整形時にろくろ痕が不明瞭となる。	口縁部18% 底部13%

2号住居跡（第11図）

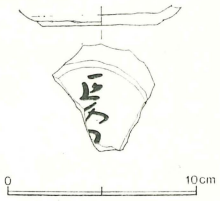
発掘区南寄りに位置している。570×485、365cmの梯形プランを呈する。長軸はほぼ東西である。北辺から南東コーナー部にかけて2号溝に切られているほか、攪乱された部分が多かった。壁高は10cm前後。周溝は北西コーナー部から南東コーナー近くまで西半にめぐる。幅10cm、深さ5cm前後。カマドは残存部には認められず、2号溝に切られた北壁中央ないし南東コーナー部に構築されていたと思われる。柱穴は P_1、P_2の2本あり各々65、67cmと深い。床面は堅緻であるが凹凸がある。遺物は少ない。覆土から底部に墨書された須恵器坏（第12図）が出土している。



第11図　2号住居跡

2号住居跡出土土器（第12図）

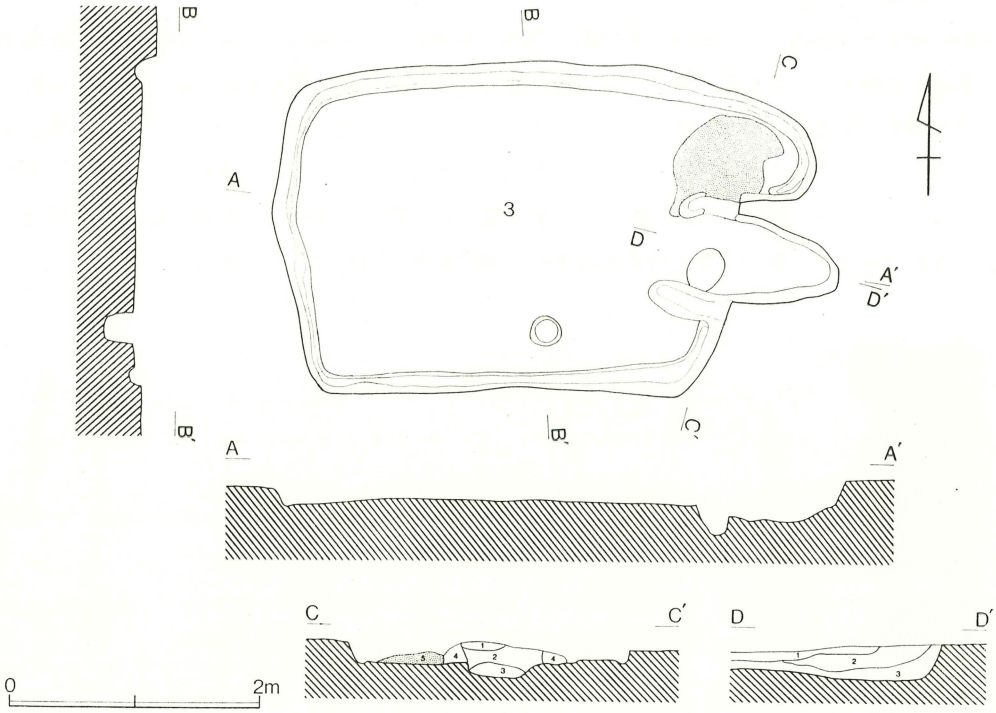
須恵器坏の底部約25%である。底部外面に墨書。「臣万○」か？。つくりは扁平で器肉はほぼ一定。体部下端は内湾して大きな開きをみせる。胎土は密で微粗粒砂含む。焼成も堅緻である。色調は淡橙褐色を呈する。手法はろくろ整形で底部は回転糸切りによる。切り離しは一度入れ直される。



第12図　2号住居跡出土土器

3号住居跡（第13図）

2号住居跡の西側に位置している。370×260cmの略隅丸長方形を呈するが北東コーナー部はカマド状に張り出している。主軸はほぼ東西である。壁高は10～15cm。周溝は張り出し部も含め全周する。幅5～15cm、深さ5～10cm。カマドは東辺ほぼ中央にあり、焚口部幅55cm、壁外に約80cm掘り込まれている。裾は粘土で構築されていた。右裾際に36×24cm、深さ25cmのピットが穿れている。底は床面から約13cm下がっている。カマド左側の突出部には75×65cm前後の



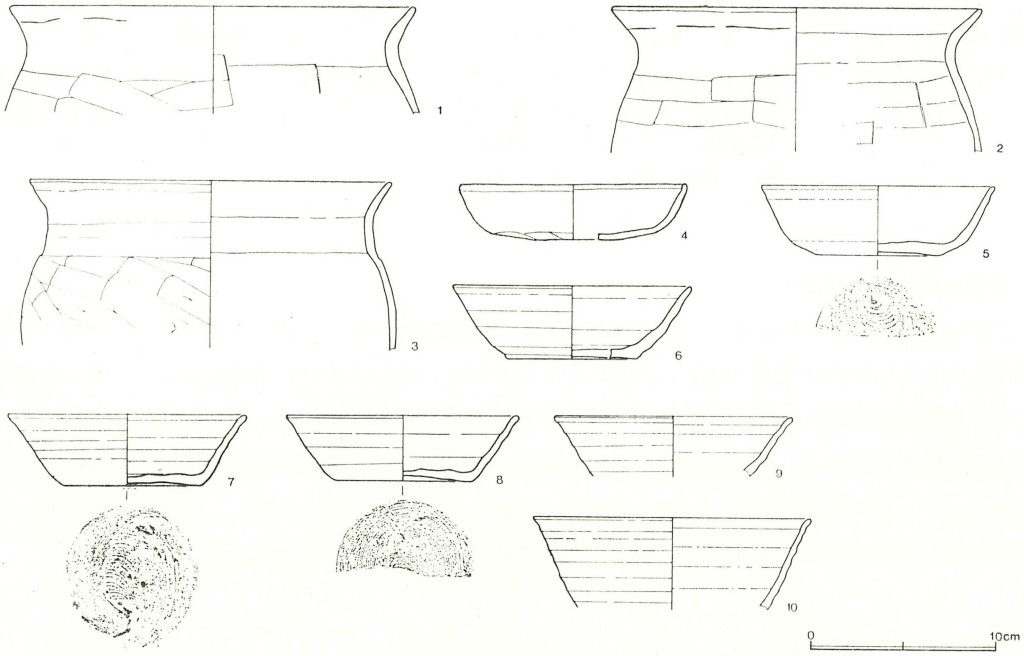
1. 黒色土　2. 灰褐色粘土　3. 黒色土　4. カマド袖　5. 粘土

第13図　3 号 住 居 跡

範囲に厚さ約7㎝粘土が遺存していた。柱穴は南辺中央近くに1本検出された。深さ25㎝。床面は堅緻で平坦である。遺物は土師器坏、甕、須恵器坏がありカマド周辺に集中して出土した。ほかに南西コーナー部の周溝上から須恵器坏（第14図7）が出土している。

3号住居跡出土土器（第14図）

器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 22.0	なだらかな肩部より頸部で括れ口縁は「ハ」の字に開く。微細粒砂小石含む。焼成良。橙褐色。	口縁部整形横ナデ後、外面肩部横位のヘラケズリ。内面横位のヘラナデ。	口縁と肩部のみ30%
甕	2	推定口径 20.0	1とほぼ同様の器形を呈する。微細粒砂小石含む。橙褐色。内面橙赤褐色一部褐色。	口縁部に巻き上げ痕。口縁部整形横ナデ後、肩部外面横ヘラケズリ内面横ヘラナデ。内面に粘土付着	口縁と肩部のみ13%
甕	3	口径 19.5	張りの弱い肩部から頸部は内傾気味に立ち上がり口縁は開く。微細粒砂含み密。焼成良。橙赤褐色。	頸部に輪積痕。口縁部整形横ナデ後肩部外面ヘラケズリ。内面横位のヘラナデ。	カマド内出土口縁部20%肩部30%
坏	4	口径 12.2 器高 3.0 底径 8.7	平底から張りをもって体部は開き口縁で一度外反し口唇部は内湾気味に立ち上がる。微細粒砂含む。やや軟質。橙褐色。口縁外面一部黒色。	口縁部整形横ナデと外面底部ヘラケズリの間は雑なヘラナデが施される。底部内面はナデ、内面は成形時の指頭圧痕残る。	カマド内出土25%



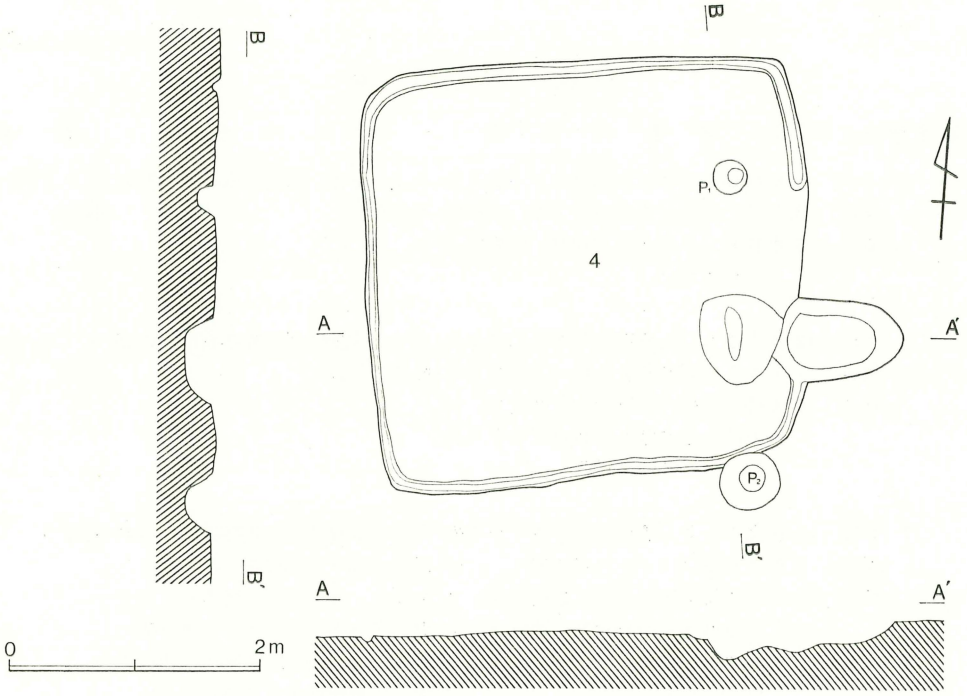
第14図　3号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	5	口径 12.6 器高 3.7 底径 6.8	底部から体部下端で大きく張り開く。口縁はやや外反する。微細粗粒砂、小石含む。軟質。橙褐色一部橙灰色。	ろくろ整形。底部は右回りの回転糸切り痕。	カマド内出土 40%
坏	6	口径 12.8 器高 3.9 底径 7.3	段をもった底部から中位に張りをもち体部は開き口縁へと移行する微細粒砂、小石含む。焼成良。内外面とも口縁から体部下半まで黒色。以下底部茶褐色。	ろくろ水挽成形。底部右回りの回転糸切り痕。	カマド内出土 20%
坏	7	口径 12.9 器高 3.8 底径 7.4	径の大きな底部から下端でやや張り体部は「ハ」の字に開く。口縁は外反気味となる。微粗粒砂、3×9㎜大の小石含む。焼成良。橙灰色外面体部の一部と口縁部にかけて灰黒色。	ろくろ水挽成形。底部は右回りの回転糸切り痕が残るが糸入れから半周位、3㎜上に一度入れて切り直している。糸入れと糸抜き時の段差が3㎜ある。底部は全体的に厚く、場所によって差が激しい。	98%
坏	8	口径 12.6 器高 3.5 底径 7.3	形態は7と同様である。底部中央は2㎜以下となり薄い。微粗粒砂小石含む。焼成堅緻。暗灰色底部外面と内面中央部紫灰色。	ろくろ水挽成形。底部は右回りの回転糸切り痕。	カマド内出土 口縁部23% 底部50%
坏	9	口径 12.8	体部と口縁部のみ。口縁はやや外反する。微細粒砂含む，焼成良。灰色。	ろくろ整形。	カマド内出土 20%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	10	口径 15.0	体部下半はわずかに張りをもち安半は直線的となる。口縁は短く内面に稜をもって外反する。器肉は薄い。微細粒砂、小石含む。焼成堅緻。灰青色。	ろくろ水挽成形。	カマド内出土口縁と体部のみ23%

4号住居跡（第15図）

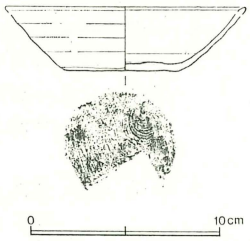
3号住居跡の西側に位置している。東西354cm、南北338cmの整った隅丸方形プランを呈する。軸は方位に合う。壁高は北辺でわずかに認められるだけで、ほぼ全周する周溝によってプランを確認した。周溝は幅10cm、深さ5cm前後。カマドは東辺南東コーナー寄りにあり、壁外に約80cm、掘り込んで構築されている。底は床面より約15cm低く、焚口部は70×60cmの範囲が窪んでいる。柱穴は南東コーナー壁外のP_2を含め2本検出された。深さは各々15、23cmを測る。床面はほぼ平坦で良好である。遺物は少なくカマドから出土した須恵器坏（第16図）のみであった。



第15図　4号住居跡

4号住居跡出土土器（第16図）

須恵質の坏。接合しない口縁部20%と底部80%よりの復元実測である。器肉は非常に薄く焼成も堅緻である。胎土は密で微細粒砂と小石少量を含む。色調は灰褐色を呈し、一部黒褐色となる。手法はろくろによる水挽成形で、底部は回転糸切りによる切り離し。



第16図　4号住居跡出土土器

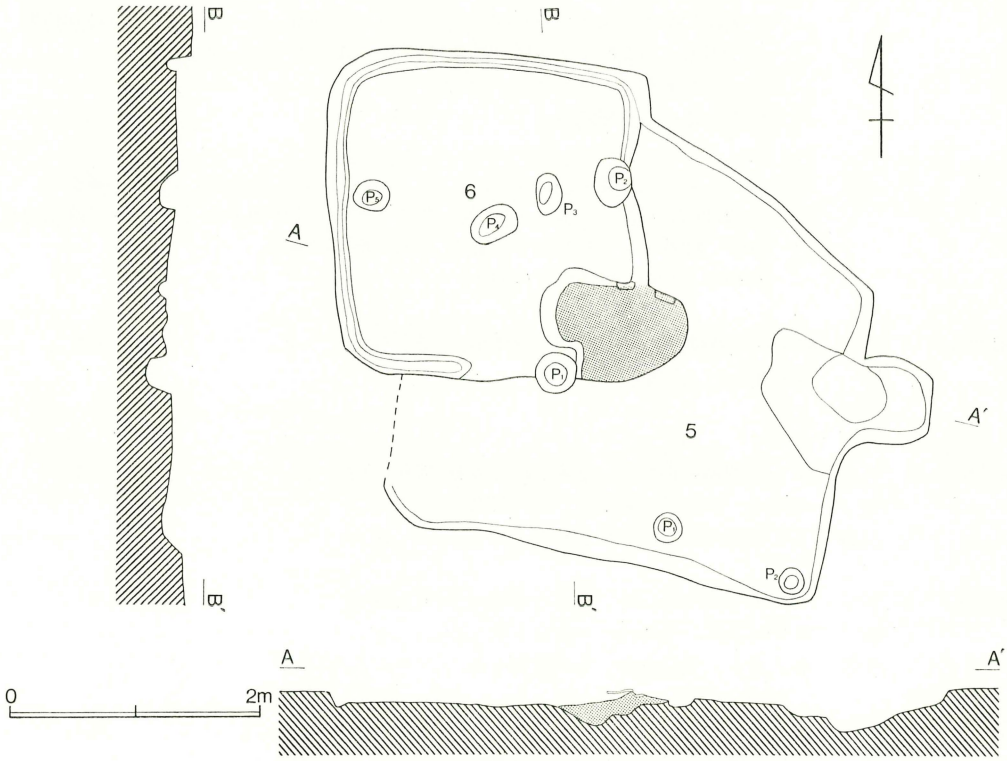
5号住居跡（第17図）

発掘区南寄り、２～４号住居跡の南側に検出された。長軸はほぼ東西にある。北西コーナー部を６号住居跡に切られているが、350×350、265㎝の不整梯形を呈すると思われる。掘り込みが浅く６号住居跡との床面のレベル差はほとんどないが、南辺付近が若干深くなっている。カマドは東辺ほぼ中央にあり、壁外に約60㎝掘り込んでいる。底は床面から約20㎝下がっている。焼土はさほど顕著でなかった。柱穴は南辺に２本ある。深さは$P_1$20㎝、$P_2$23㎝。

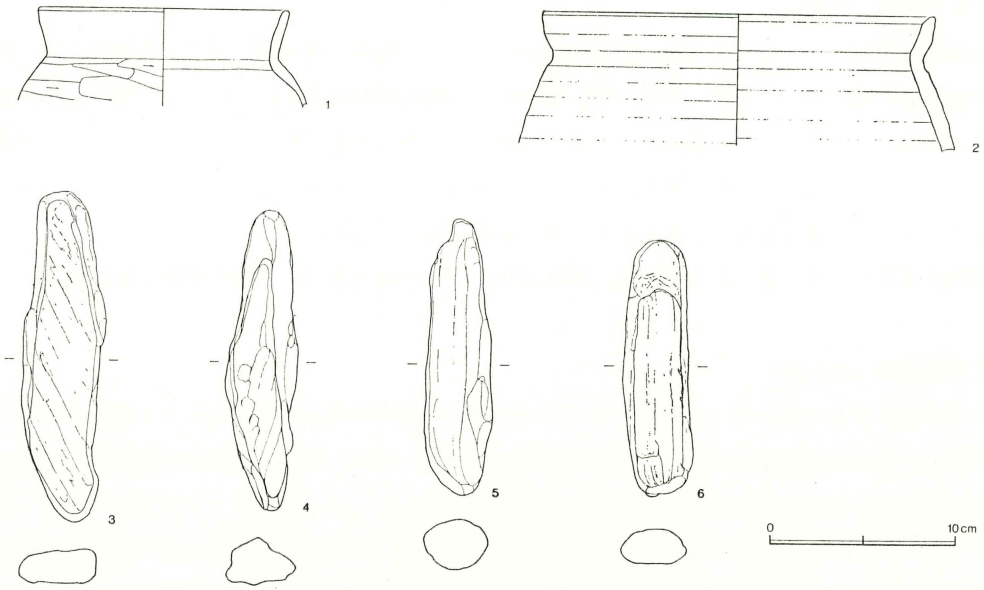
遺物は北東コーナー部から土師器甕、須恵器坏、P_1の西側床面から編み物石４個が出土している。

6号住居跡（第17図）

５号住居跡の北西部を切って構築されている。260×262㎝の隅丸方形を呈し、主軸は方位から若干ずれる。壁高は北壁で15㎝、西壁で10㎝を測る。幅５～18㎝、深さ５～10㎝の周溝が北、西辺及び東、南辺の半ばにめぐる。西辺では狭く、南辺で幅広となっている。カマドは東南コーナー部に設けられており、南辺の東延長方向で壁外に約30㎝のびている。底は床面から18㎝程低く、焼土は15～20㎝堆積していた。側壁には片岩が設置されていたと思われるが残存するものは一部で、多くは焼土上に散乱していた。この片岩に混じて土師器甕、羽釜、灰釉陶器が出土している。柱穴は、P_1～P_5の５本ある。P_1は５号住居跡にまたがるが、カマドの平面形がP_1に規制を受けているため本跡に伴うものと判断した。



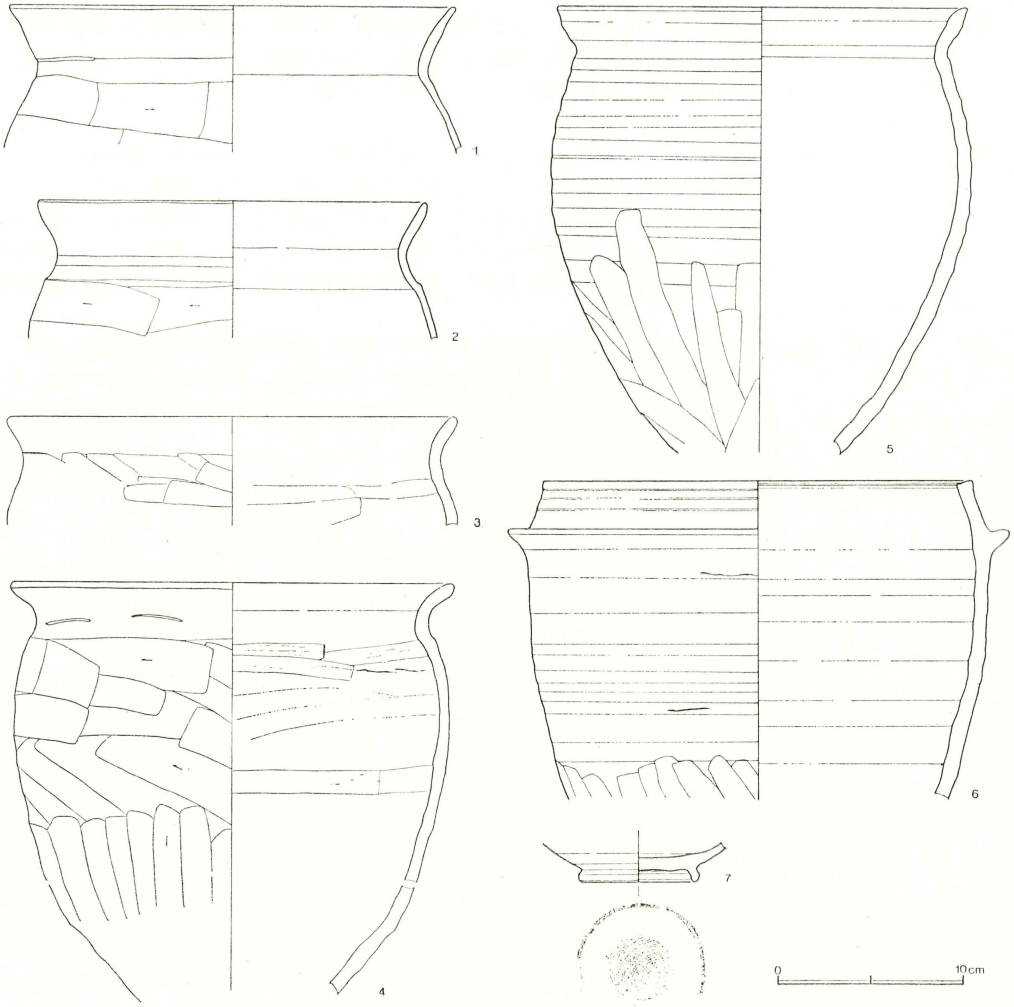
第17図　５・６号住居跡



第18図　5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物（第18図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形甕	1	口径 13.5	なだらかな肩部から頸部で括れ直立気味に開き口縁は外反気味に立ち上がる。微細粒砂含み密。焼成良。外面茶褐色一部黒褐色。内面暗褐色まだらに橙褐色。	口縁部整形横ナデ後肩部外面ヘラケズリ。内面滑かなヘラナデ。口縁内面にもヘラナデが施される。	口縁部50% 肩部45%
甕	2	口径 23.0	なだらかな肩部より頸部で括れ、口縁は内湾しながら開き、内面にゆるい稜をもって外反する。微粗粒砂小石含む。焼成良。橙褐色。	ろくろ使用と思われるが、内面肩部にナデおさえの痕がみられる。外面の整形は整う。	覆土 口縁部22%
編物石	3	長さ 17.8 幅 4.2 厚さ 1.9	石質絹雲母片岩。扁平で全体的に磨かれ丸味をもつ。	重さ213g	No.1
編物石	4	長さ 16.2 幅 3.8 厚さ 2.6	石質絹雲母片岩。全体的に丸みをもつか凹凸が激しい。中央部両側がやや凹み重心点となる。	重さ177g	No.1
編物石	5	長さ 14.8 幅 3.5 厚さ 2.7	石質絹雲母片岩。上部の左部が欠けるが、全体的に丸味をもちなめらか。重心点の一方が磨りへる。	重さ216g	No.1
編物石	6	長さ 13.8 幅 3.5 厚さ 1.9	石質絹雲母片岩。全体的に磨かれなめらか。重心点の一方が凹む。	重さ145g	No.1



第19図　6号住居跡出土土器

6号住居跡出土土器（第19図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径　24.0	丸味を持って張る肩部から頸部で緩く括れて口縁は「ハ」の字に開き先端はやや外反する。微細粒砂含む。焼成良。外面黄褐色、内面橙褐色。	口縁部整形横ナデ後肩部外面横位のヘラケズリ。内面横位のヘラナデ。	カマド内出土 30%
甕	2	口径　20.9	張りの少ない肩部から頸部は大きく括れ口縁は「ハ」の字に開き先端は直立する。微細粒砂、わずかに小石含む。焼成良。橙褐色。	口縁部整形横ナデと外面肩部のヘラケズリの間は明瞭な稜となる。内面は滑かで、頸部下に一条指頭によるナデが回る。	カマド内出土 18%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	3	口径 24.4	肩部にやや丸味をもち、頸部で緩く括れ口縁はやや肥厚して開く。微粗粒砂含む。硬質。褐色。	口縁部横ナデ整形。肩部外面乾燥が進んでからの横ヘラケズリ以下縦位。内面横ヘラナデ。	口縁部29% 肩部10%
甕	4	口径 23.8	器肉厚い。体部下半に張りをもち直線的に開く。肩部の張りは小さく頸部で強く屈曲し口縁は外反して開く。微粒砂、少量の小石含み密。外面暗茶褐色。内面明茶褐色。	口縁部整形横ナデ後、外面肩部横位、体部上半斜位、下半は縦位のヘラケズリが施される。内面滑か木口状工具によるナデが、肩部と体上半の屈曲部に見られる。	No.3 カマド内、フク土出土。接合しないが口縁部65%、体部45%
甕	5	口径 22.0	器肉厚い。窄まった底部付近より体部下端でやや張り、上半に最大径をもち緩やかに移行する。頸部で括れ外面に稜をもって外反しながら開く。微粗粒砂、石含む。軟質。橙褐色。外面口縁一部灰黒色。体部一部茶褐色。	ろくろ整形。外面体部下半は縦位の粗いヘラケズリ。内面体部下端は縦位の指頭によるナデが施される。	No.3、No.4 フク土、カマド出土、口縁部25%、体部50%
羽釜	6	口径 23.0	体部上半にわずかな張りをもち鍔部上位で内傾し口縁は立ち気味となり先端は幅が広い。鍔は断面三角形を呈する。微粗粒砂含む。焼成良。黄灰色、一部灰色。	巻き上げ成形後ろくろ整形。外面体部下半には不明瞭なヘラケズリ痕がみられる。鍔は貼付けによる。	No.9 25%
坏	7	高台径 6.2 高台高 0.7 底径 6.2	径の小さな底部から体部は内湾しながら大きく開く。高台は外側に丸味をもちやや開く。微細粒砂、鉄分を含む砂粒を含むが非常に密で粘着感がある。焼成堅緻。灰白色、釉は淡緑色。	ろくろ水挽成形。底部外面に右回りの回転糸切り痕。高台は貼付。釉は刷毛によって体部内外面に施される。内面には重ね焼痕。	No.10 底部と体部下半のみ80%

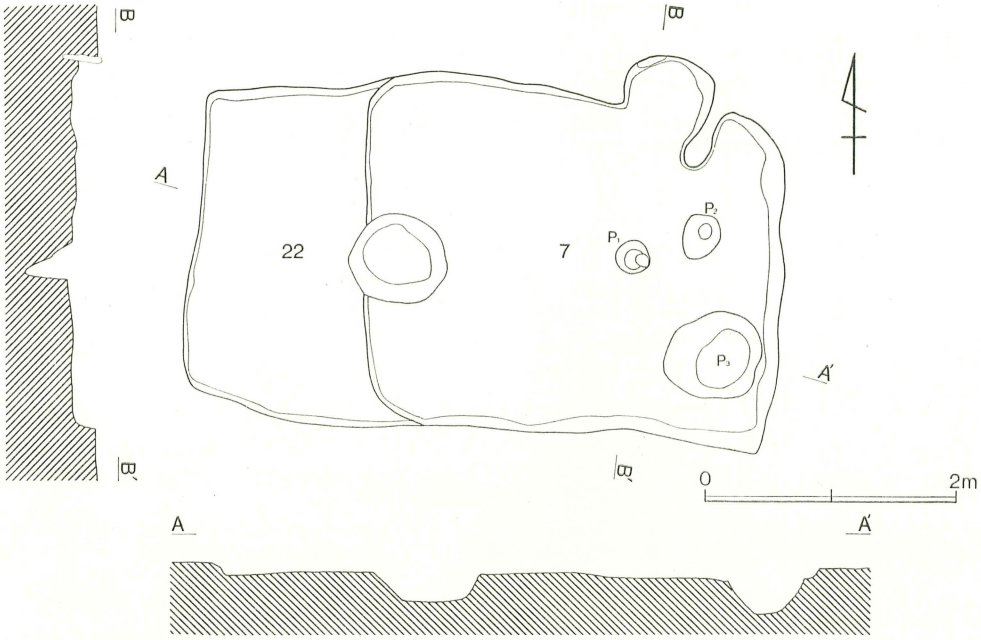
7号住居跡（第20図）

5、6号住居跡の南側に近接する。335×277cmの隅丸長方形を呈し、長軸はほぼ東西にある。西半では22号住居跡を切っている。壁高は10～15cmで平均している。カマドは北辺の東寄りに設けられている。右側にのみ掘り残しロームによる袖を備え、煙道部先端には片岩が設置されている。カマドの長軸線は東西辺に平行しない。底は床面から5cm前後低く、焼土が若干堆積していた。柱穴は3本検出された。西辺にかかるものは本跡に伴う落ち込みかどうか不明。P_1は深さ41cm、P_2は34cm、P_3は26cmを測る。床面は堅緻でほぼ平坦、22号住居跡の床面よりも若干低い。

遺物はカマド周辺から土師器甕、須恵器坏、鉄製品、西辺寄りで須恵器坏が出土している。

22号住居跡（第20図）

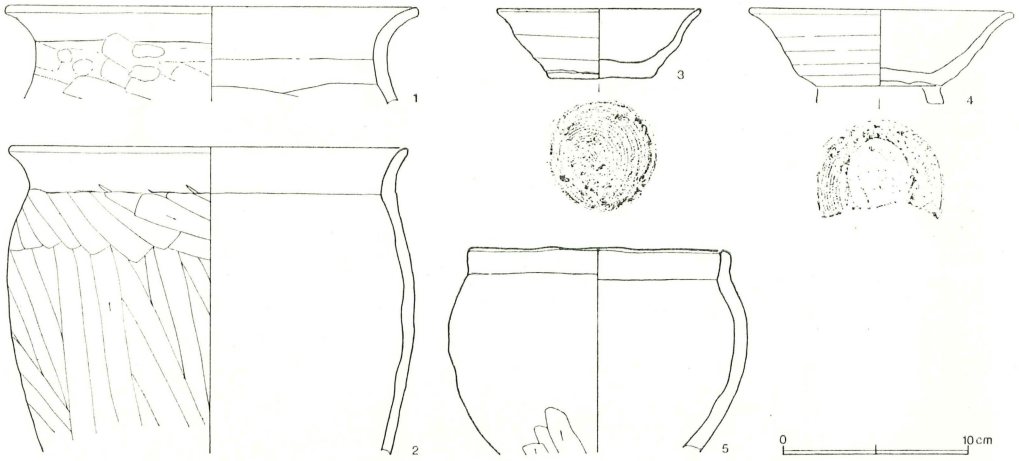
東半を7号住居跡により切られている。西辺は267cmを測る。南、北辺は現存部からするとほぼ7号住居跡と共通する。壁高は約5cm。カマド、柱穴は残存部には検出されなかった。床面は軟弱であった。遺物は土師器坏が1個体床直で出土したのみであった。



第20図　7・22号住居跡

7号住居跡出土土器（第21図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 22.2	頸部は直立し、口縁は外反する。微粗粒砂小石含む。非常に硬質。橙褐色。	口縁部横ナデ。外面頸部と肩部横ヘラケズリ。頸部には指頭圧痕残る。内面肩部横ヘラナデ。	口縁部20%
甕	2	口径 21.4	体部上半に最大径をもち、肩部に張りを持ち、頸部で括れ、短い口縁は外反しながら開く。微粗粒砂小石を含む。密。焼成堅緻。茶褐色外面体部一部黒色。	3.3cm前後の輪積痕のとおりに割れる。頸部外面には輪積痕が顕著に残る。口縁部は内面にやや硬い工具をあてて短い単位で横ナデするため器肉一定せず、外面はやや乾燥が進んでから削られておりナデ様となる。内面横位のヘラナデ	カマド内出土 口縁部60% 体部上半85%
坏	3	口径 10.9 器高 3.8 底径 5.5	径の小さな底部から体部は大きく開き中位で立ち上がり、口縁は外反する。微粗粒砂小石含む。焼成良。褐色一部明茶褐色。	ろくろ水挽成形。底部は右回りの回転糸切り痕。糸入れと糸出しの差2mmあり一部に段となって残る	No.3 口縁部30%を欠く。
坏	4	口径 14.3 器高 4.1 底径 6.8	高台は剝落する。口径に比して小さな底部から体部は下端に張りをもって大きく開き口縁はさらに外反する。微粗粒砂含む。やや軟質灰色内面一部灰黒色。	ろくろ水挽成形。底部は回転糸切りによる。高台の貼付部は2.3cmで、中央部は回転ナデによって糸切り痕が消滅する。	カマド内出土 63%
小型甕	5	口径 14.1	体部は球状に張り内面に明瞭な稜	口縁部横ナデ整形後、内面を指頭	No.4

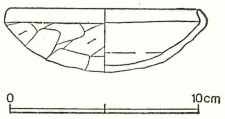


第21図　7号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	5		をもって頸部は括れ、短い口縁は内湾気味に直立する。口唇は平坦となる。微粒砂、少量の小石含む焼成良。黒褐色一部淡褐色。外面肩部に煤付着。	によって横ナデし稜をつくる。頸部外面に接合痕が明瞭に残る。体部上半はヘラによって雑にナデられるが成形時の凹凸が残る。下端にヘラケズリ痕。内面は上半横位下半は斜位のヘラナデが施される	30%

22号住居跡出土土器（第22図）

土師器坏。口径は10.2cm、器高は3.4cmを計る。口縁の35%を欠く。形態は弧状の底部より稜をもって短い口縁が強く内湾する。胎土は密で、微細粒砂と少量の小石を含む。焼成は良好である。色調は内面茶褐色、外面は褐色を呈するが、一部明茶褐色となる。全体的に粗雑なつくりである。手法は口縁部横ナデ整形後、外面はヘラケズリ、内面は指頭によるナデが施される。



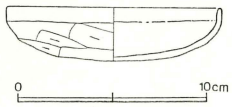
第22図　22号住居跡出土土器

8号住居跡（第24図）

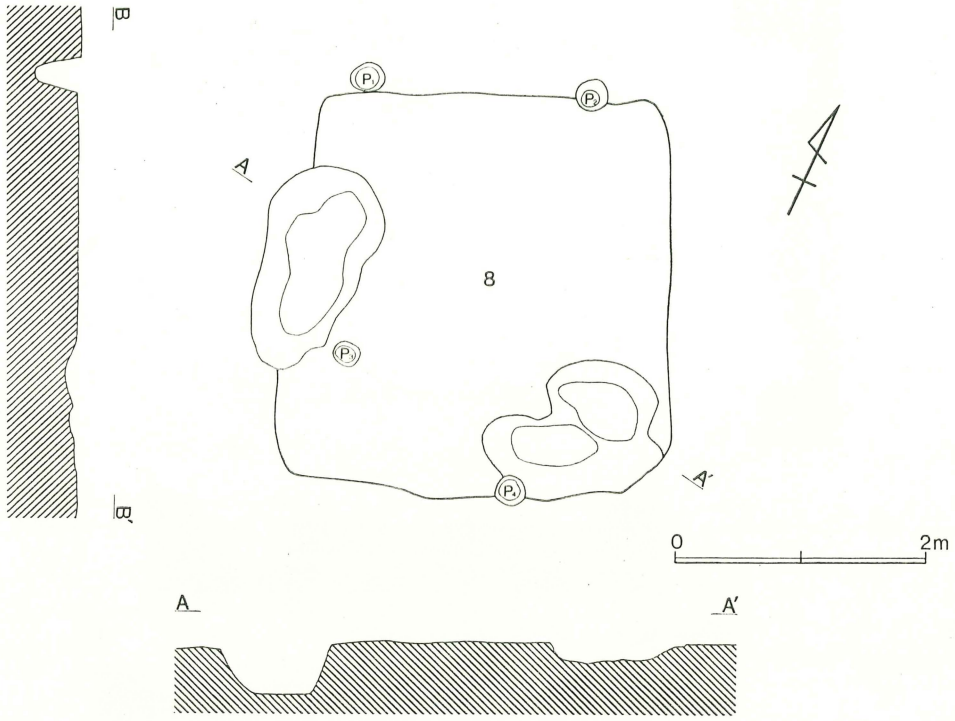
5、6号住居跡の西側に検出された。321×317cmの隅丸方形を呈する。プランの対角線がほぼ方位に合う。南西辺中央は土壙により切られている。壁高はほとんど無く、東コーナー部に設置されたカマド及び床面の広がりからプランを把握した。カマドは壁外にのびず、コーナー部床面をハの字形に15cm前後掘り窪めたもので底に焼土、炭がわずかに認められた。柱穴は4本検出されている。うちP_1、P_2、P_4は壁にかかって穿たれている。深さP_1は10cm、P_2は32cm、P_3は15cm、P_4は27cmを測る。遺物は本跡が覆土を欠くため少く、図示できるものはカマド内出土の土師器坏（第23図）のみである。

8号住居跡出土土器（第22図）

土師器の坏。口縁部28%が残存しているにすぎない。推定口径は11.3cm、器高は2.8cmとなる。器形は扁平となり、底部との境に緩い稜をもって口縁は直立する。胎土は密で微細粒砂を含む。焼成も



第23図　8号住居跡出土土器



第24図　8 号 住 居 跡

良好である。色調は内面が暗茶褐色、外面は暗橙褐色を示し、一部褐色となる。手法は口縁部が横ナデ整形、外面はヘラケズリ。内面は指ナデ整形。覆土よりの出土。

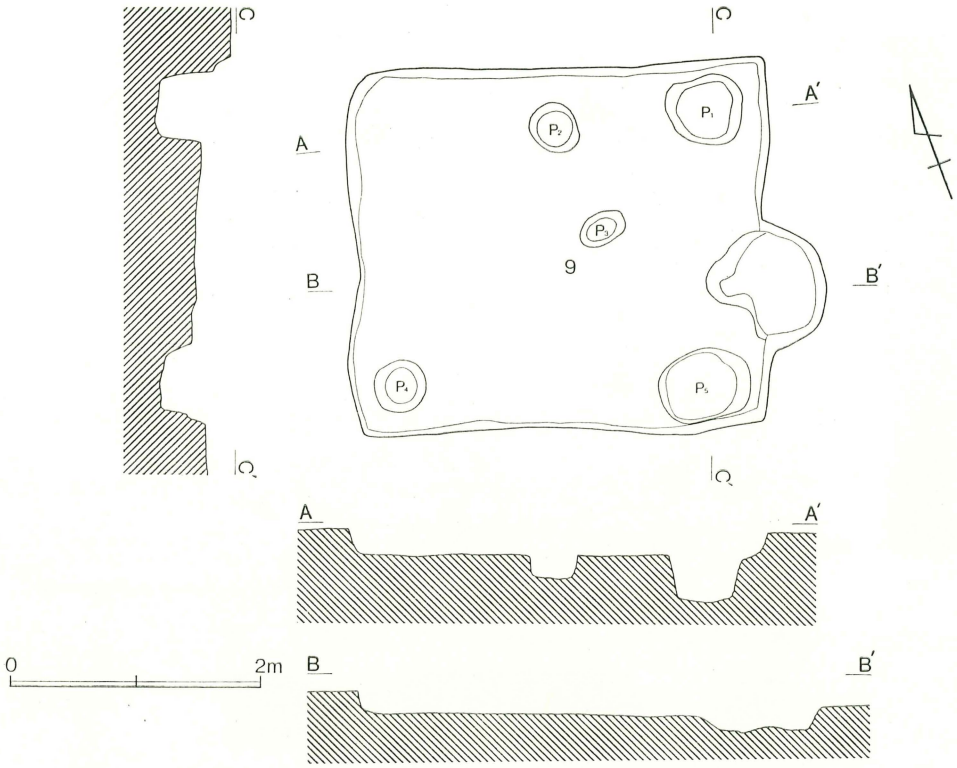
9 号住居跡（第25図）

発掘区北寄り、1 号溝と 2 号溝の交点の南側に検出された。336×296㎝の隅丸長方形を呈する。主軸は N—80°—W をさす。北群の住居跡の中では掘り込みが20㎝前後と深く良好な状態で検出された。カマドは東辺にあり壁外に約50㎝掘り込んでいる。内部には側壁に用いられていたと思われる片岩が多量に落ちこんでいた。底は床面から約15㎝下がっている。焼土は顕著でなかった。柱穴は北東、南東コーナー部にある貯蔵穴と考えられるもののほか 3 本検出された。P_1 の深さは 25㎝、P_2は52㎝、P_3は32㎝である。 カマド左側の貯蔵穴は62×56㎝、深さ31㎝、右側は75×55㎝、深さ25㎝で55×30㎝大の片岩が上にかぶるように遺存していた。床面は堅緻でカマド周辺が若干深い。

遺物は土師器甕、須恵器甕、坏がカマド周辺および右側貯蔵穴周辺から出土している。

9 号住居跡出土土器（第26図）

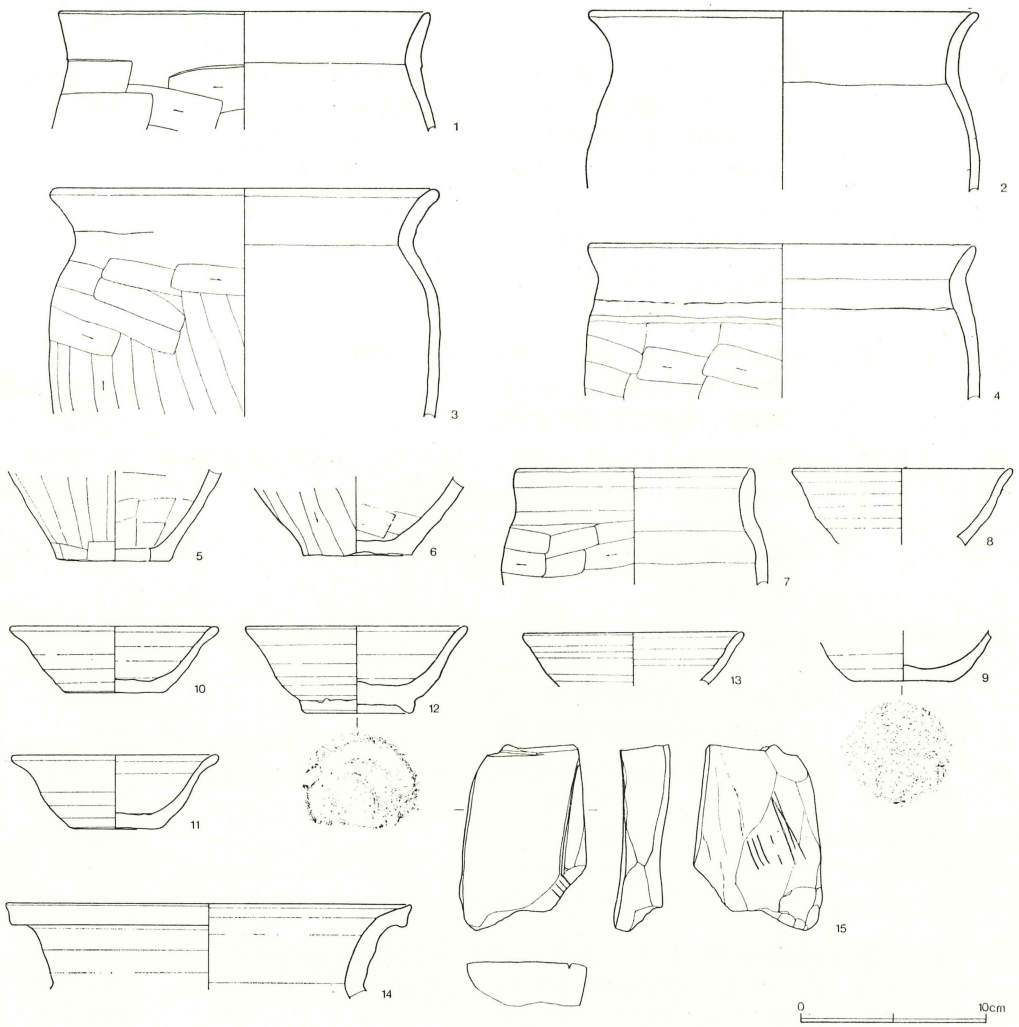
器 種	番号	大きさ(㎝)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甕	1	口径 20.0	肩部の張りは弱く頸部で括れ、口縁は「ハ」の字に開く。微粗粒砂含む。2次的加熱のためもろくなる。橙褐色。	口縁部横ナデ整形後肩部外面横位のヘラケズリ。内面横位のヘラナデ。	カマドNo.7 20%
甕	2	口径 20.9	張りの弱い肩部から頸部は外面で	口縁部横ナデ整形後外面肩部は横	カマドNo.5



第25図　9 号 住 居 跡

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	2		は括れも目立たず直立し、口縁は外反する。微細粗粒砂含む。焼成堅緻。明茶褐色。	位のヘラケズリが施されるが、乾燥が進んでからのためナデ様となる。頸部、体部に成形時の指頭圧痕。内面横位のヘラナデ。3.3cm幅の輪積み成形。	25%
甕	3	口径　21.0	直線的な体部から肩部はわずかに張りをもち、頸部で括れぶ厚い口縁は外反する。微粗粒砂小石含む。硬質。内面淡褐色外面茶褐色一部褐色。	口縁部横ナデ整形。外面は乾燥が進んでからのナデ様ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	カマドNo.6 No.12、No.17 21%
甕	4	口径　20.8	肩部はほとんど張りをもたず頸部は内傾する。口縁は「ハ」の字に開く。微粗粒砂含む。粗。器肉厚く重い。暗橙褐色一部橙褐色。	口縁部に接合痕。口縁部横ナデ整形と肩部外面ヘラケズリの間は幅5mmの棒状工具による沈線が一周する。内面横位のヘラナデ。	カマドNo.13 No.16 26%
甕	5	底径　6.2	径の小さな底部より体部はわずかに内湾して開く。器肉厚い。微粗粒砂含む。底部外面には砂粒が多い。焼成良。淡褐色。内面と外面の一部は器面剥離して橙褐色を呈する。	外面縦位のヘラケズリ。最下端に横位のヘラケズリが施される。底部は砂粒多く整形痕不明。内面は横ヘラナデ。	底部のみ40%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	6	底部 5.9	径の小さな底部より体部は「ハ」の字に開く。微粗粒砂小石含む。粗。重量感があり9と同様である。暗橙褐色外面体部下端一部褐色。	底部外面はほとんど整形されておらず器面粗い。体部は縦位から斜位のヘラケズリ。内面は木口状工具によって細い刷毛目が残る。	カマドNo.12 底部のみ
台付甕	7	口径 12.9	丸味をもった肩部より頸部はわずかに括れ、口縁は直立する。微粗粒砂含む。2次的加熱のためもろくなる。淡橙褐色。	口縁部整形横ナデ後肩部外面横位のヘラケズリ。内面はヘラナデが施されるが器面の剥離が激しい。	カマドNo.8 27%
坏	8	口径 11.8	体部は中位に張りをもって開き口縁は外反する。微粗粒砂小石含む。焼成良。黄褐色部分的に橙褐色。	ろくろ整形。	覆土 口縁部と体部のみ50%
坏	9	底径 5.5	扁平な底部より下端に丸味をもって体部は開く。微細粒砂小石含む 2次的加熱によりもろくなる。淡橙褐色部分的に茶褐色、灰色、灰黒色を呈する。	ろくろによる整形。底部は右回りの回転糸切り痕。	カマドNo.17 底部と体部下半のみ
坏	10	口径 11.2 器高 3.6 底径 5.3	径の小さな底部よりわずかに内湾して体部は開き、玉縁となる口縁は外反する。微細粗粒砂含む。粗。焼成良。橙褐色外面体部紅褐色。	ろくろ水挽成形。底部は器面荒れ糸切り痕は不明である。	カマドNo.15 口縁部26% 底部40%
坏	11	口径 11.2 器高 4.0 底径 5.5	径の小さな底部から体部は中位に張りをもって開き玉縁となる口縁は強く外反する。微細粗粒砂少量の小石含む。2次的加熱のため器面荒れる。黄褐色内面体部紅褐色	ろくろによる整形。底部右回りの回転糸切り痕。	カマドNo.9 口縁部30% 底部70%
坏	12	口径 11.9 器高 4.2 底径 6.1 高台径 6.0 高台高 0.7	器肉の厚い底部から体部下半に張りをもって開き口縁は外反する。高台は低く不整形。微細粗粒砂含む。2次的加熱のため器面荒れる。内面灰褐色外面橙褐色底部灰黒色	ろくろ整形。底部右回りの回転糸切り痕。高台は貼付による。	カマドNo.10 口縁部30% 底部70%
坏	13	口径 11.9	丸味をもった体部から口縁はやや外反する。微粗粒砂含む。焼成良暗灰色外面一部灰色。	ろくろ整形。口唇部に整形時の段を有す。	カマドNo.10
甕	14	口径 21.8	頸部は括れて「ハ」の字に開き口縁は外反し外面に断面三角形の凸帯が廻る。微粗粒砂含む。軟質淡灰褐色部分的に灰色、灰黒色。	ろくろ整形。	フク土 18%
砥石	15	現存長10.0 現存幅 6.7 厚さ 2.7	石質は細粒砂岩。上面と右側面は使用され平滑となる。上面に一条深さ4mmの鋭い溝がある。裏面は左側と左側面の大半が平滑となるが凹凸が激しい。三条の浅く丸味をもった条痕が2ケ所と、左側面に鋭い条痕が3条つく。		

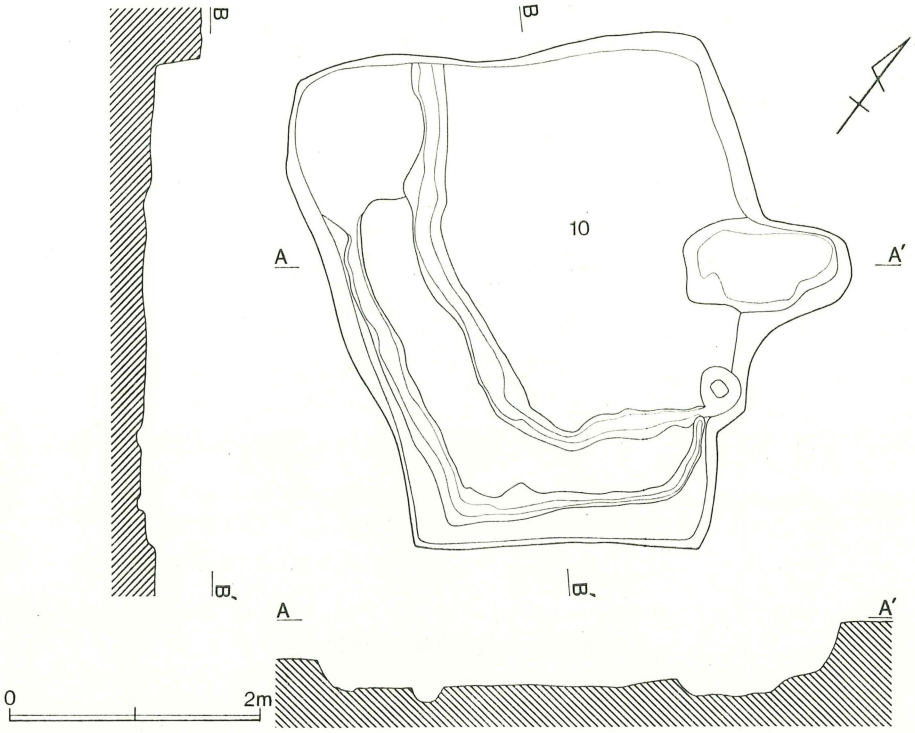


第26図　9号住居跡出土遺物

10号住居跡（第27図）

9号住居跡の南側に位置している。406×360、290、250㎝の不整梯形に近いプランを呈する。東辺カマド右側がコーナー状にくびれる部分があり、調査時に2軒の重複かと考えたが、土層に変化がなく、また2本の周溝の状況から、住居跡の拡張を考え単一の住居跡と判断した。壁高は斜面上部にあたる北、東辺は30～50㎝を測るが南辺は6㎝前後と浅い。周溝は平行して2本あり、カマド右側のくびれ部から西、南辺に沿ってL字状にめぐる。壁寄りの周溝は幅10～25㎝、深さは5㎝前後で北西コーナー部では床面が低くなっているため不明瞭となる。内側は幅25㎝、深さ5～15㎝。カマドは東辺中央にあり壁外に約80㎝掘り込んでいる。底は床面から10㎝前後下がっている。柱穴は東辺くびれ部、壁際に1本検出された。深さは25㎝。床面は凹凸があり南半が若干深くなっている。

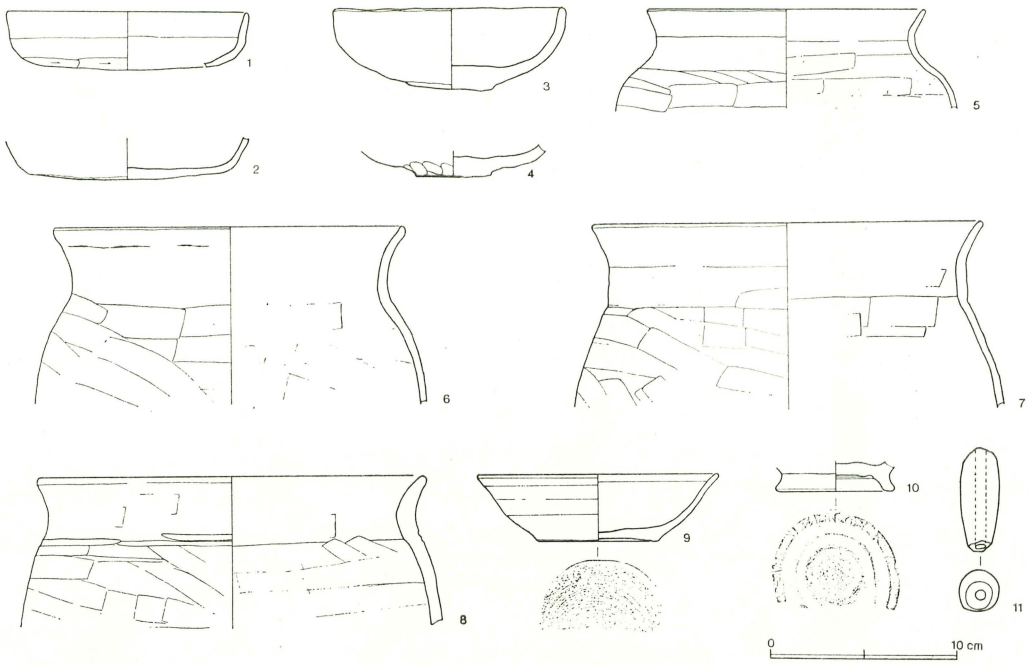
遺物は土師器甕、坏、須恵器坏、土錘がカマド周辺、柱穴際、西辺壁際から出土している。



第27図　10 号 住 居 跡

10号住居跡出土土器（第28図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径　12.8	扁平な器形となる。平底から屈曲して口縁は立ち上がり内湾気味にやや開く。微細粒砂含む。密。焼成良。暗橙褐色。	口縁部整形横ナデと底部ヘラケズリの間は約1cm開きナデが施される。	№2 18%
坏	2	底径　10.5	口縁部を欠く。扁平な器形。平底から体部は緩やかに開く。微粗粒砂含む。軟質。橙褐色。	底部ヘラケズリと口縁部整形の間は開きナデられる。内面は器面荒れ整形痕は不明である。	№1 底部と体部のみ
坏	3	口径　12.5 器高　4.5 底径　4.8	器肉厚い。器形は弧状を呈するが底部が意識され 2～3mm 高くなる。口縁はわずかに外反して直立する。微粒砂赤色粒子を含む。やや軟質。内面と外面の一部淡橙褐色外面黄褐色。	口縁部横ナデ整形。内外面とも器面荒れ整形痕は不明瞭となるが、外面はヘラナデにより滑か。	覆土 口縁部48% 底部100%
坏	4	底径　4.1	底部のみ。3と同様の器形を呈する。微粒砂赤色粒子含む。やや軟質。橙褐色、外面一部淡橙褐色。	底部は円板を埋め込んでいる。外面ヘラナデ。内面には成形時の指頭圧痕残る。器面磨滅、指ナデ。	覆土 底部のみ70%
台付甕	5	口径　14.8	肩部は丸味をもって強く張り頸部	口縁部と頸部横ナデ整形後肩部外	覆土



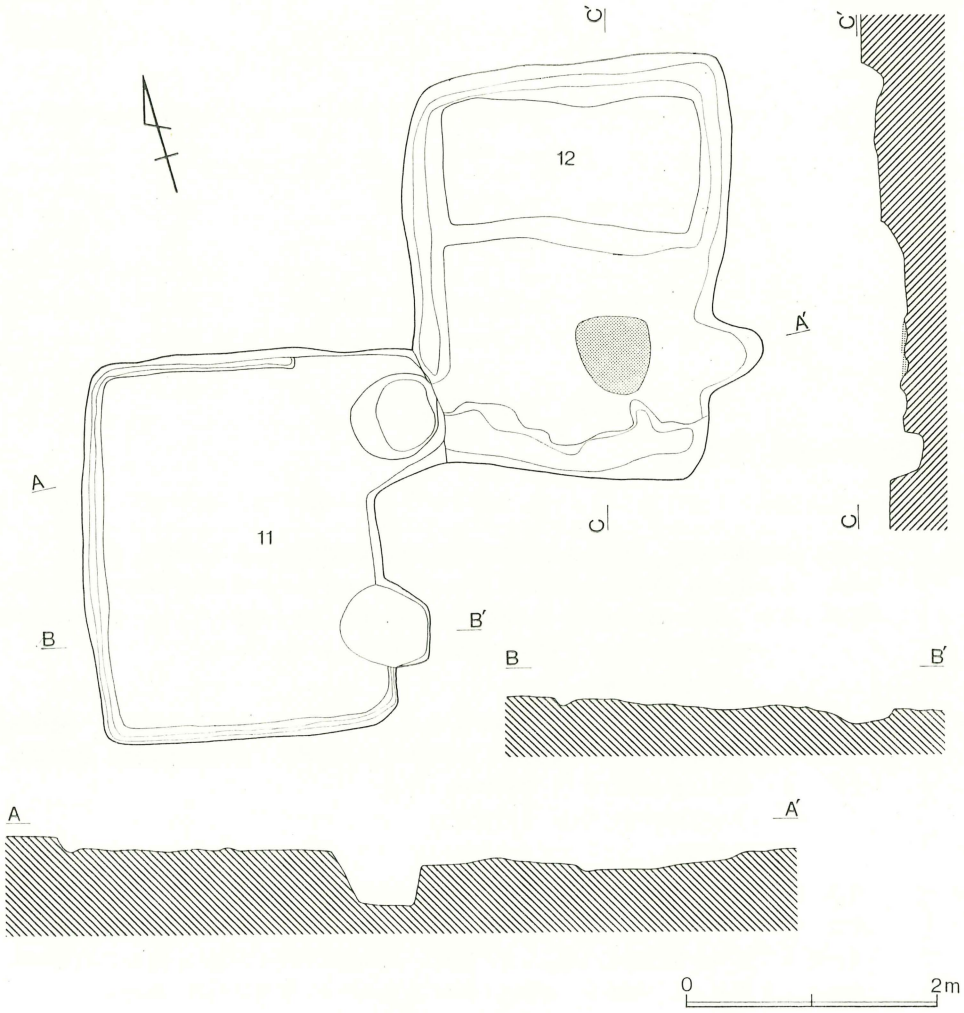
第28図　10号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	5		は内傾して括れ、口縁は「ハ」の字に開く。微細粒砂含む。焼成堅緻。茶褐色。	面横位のヘラケズリ。内面横位のヘラナデ。	口縁と肩部のみ13%
甕	6	口径　18.8	丸味を持った肩部から頸部は緩く括れ、口縁は外反しながら開き先端は内湾気味に直立する。微細粒砂赤色粒含む。軟質。明橙褐色。	口縁部整形横ナデ後肩部外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。口縁外面に巻上げ痕。	№4、№7 口縁と肩部のみ30%
甕	7	口径　21.0	肩部の張りは弱く頸部はやや内傾して直立し、口縁は「ハ」の字に開く。微細粒砂含む。焼成良。茶褐色部分的に橙褐色まだらに褐色となる。	口縁部と頸部は2度に分けて横ナデ整形される。肩部外面ヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。口縁外面に指頭圧痕。	№6、カマド覆土、口縁部接合しない2片65%、体部30%
甕	8	口径　20.9	張りの弱い肩部から頸部は内傾して括れ、口縁は外反して開く。微細粗粒砂、小石含む。焼成良。淡褐色口縁部暗橙褐色。	口縁部整形横ナデと肩部外面ヘラケズリの間は棒状工具による沈線が廻る一部二重になる。内面はヘラナデが頸部にも及ぶ。	覆土 口縁部5% 肩部13%
坏	9	口径　13.0 器高　3.6 底径　6.6	底部はやや上げ底となり、体部は中位に張りをもって開き口縁は更に開く。微粗粒砂小石含む。焼成良。灰色。	ろくろ水挽成形。底部は右回りの回転糸切り痕が残る。	覆土 口縁部20% 底部50%
坏	10	底径　5.8	高台は「ハ」の字に開き接地部は	内黒土器。ろくろ整形。底部右回	覆土

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	10	高台径 6.4 高台高 1.0	扁平となり外側で接地する。微細粒砂含む。焼成良。赤褐色内面黒色。	りの回転糸切り痕。貼付高台。内面はみがきにより光沢をもつ。	底部のみ74%
土錘	11	最大径 2.1 孔径 0.5	大形。端部は使用により磨滅する微細粒砂含む。橙褐色。20.5g	孔の径はほぼ一定する。外面は指頭によるナデにより滑か。	覆土 70%

11号住居跡（第29図）

9、10号住居跡の東側、円形周溝の北側に検出された。308×241cmの隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ南北である。北東コーナー部近くで東辺が張り出し12号住居跡と接しているが前後関係は把握できなかった。壁高は北、西辺で約10cm、南東辺はほとんど掘り込みがなく周溝、カマドからプランを把握した。カマドは東辺の南東コーナー寄りに構築されている。壁外に約30cm掘り込まれており、底は床面から15cm下がっている。北東コーナーの張り出し部には70×65cm、深さ45cmの貯蔵穴



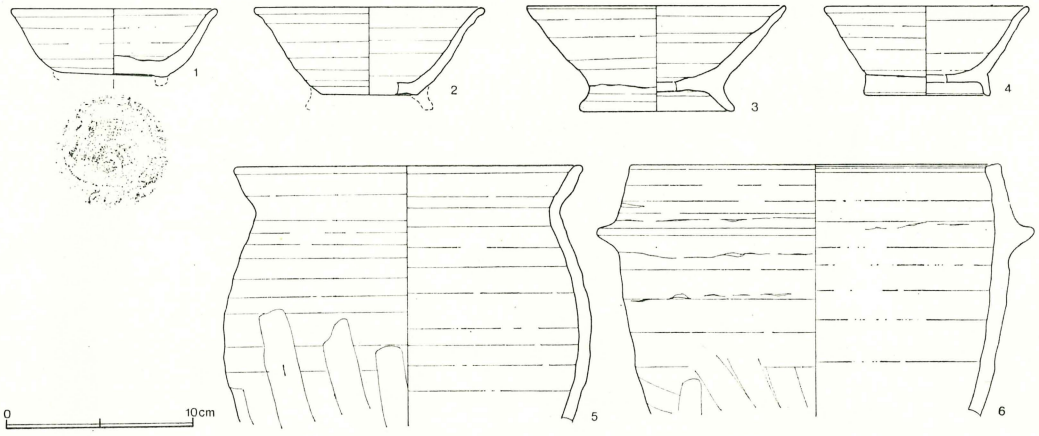
第29図　11・12号住居跡

がある。柱穴は検出されなかった。床面は堅くしまっているが凹凸があり、とくにカマド焚口部付近が深くなっている。12号住居跡床面より10㎝前後高い。

遺物は貯蔵穴周辺から土師器甕、羽釜、須恵器坏が出土している。

12号住居跡（第29図）

11号住居跡の東に接して検出された。340、304×260㎝の隅丸梯形に近いプランを呈する。主軸は11号住居跡とほぼ同じである。プラン確認面の南北辺のレベル差は約25㎝を測るが、床面が南に傾斜しているため壁高は南北辺とも10㎝前後である。幅20～35㎝、深さ6～13㎝前後の周溝がほぼ全周する。南辺で深い。カマドは11号住居跡と同じく東辺南東コーナー寄りに構築されている。焚口部幅60㎝、壁外に約40㎝掘り込まれており、底は床面より15㎝低い。焚口部床面に焼土が約3㎝堆積していた。柱穴は検出されなかった。床面は南半のカマド周辺で凹凸が激しい。北半では205×100㎝の範囲がベッド状を呈し、カマド周辺よりも約20㎝高い。遺物は床面、覆土とも少なかった。



第30図　11号住居跡出土土器

11号住居跡出土土器（第30図）

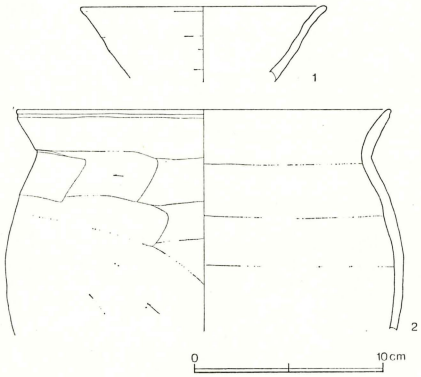
器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 11.1 器高 3.5 底径 6.0	器肉厚い。内面中央が高く扁平な底部から体部は下半に張りをもって開き口縁は外反する。微細粒砂小石含む。密。やや軟質。橙褐色まだら状に淡褐色。	器形はやや歪む。ろくろ整形。底部にはわずかに糸切り痕が残る。貼付高台は全く剥落している。坏底部よりもずれている。	№1 高台を欠くがほぼ100%
坏	2	口径 12.4 器高 4.7 底径 5.2	径の小さな底部からわずかに張りをもって「ハ」の字に開き、口縁は外反して更に開く。微粗粒砂、6～15㎜の石を含む。やや軟質。赤茶褐色。	ろくろ水挽成形。底部は回転糸切りによる切離し。貼付高台は剥落する。	口縁部38% 底部15%
坏	3	口径 14.0 底径 7.3 高台径 8.4 高台高 1.3	体部は内面に段をもち大きく「ハ」の字に開く。高台は高く外反気味に開き接地部は内側となる。微粗粒砂含む。焼成良。黄褐色一部橙褐色。	内面と口縁部にはろくろ整形痕がみられるが、外面体部には成形時の指頭圧痕残り不定方向の指ナデが施される。底部は不明。高台は貼付後ろくろ整形。	№1 口縁部25% 底部20%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	4	口径 11.0 器高 4.1 底径 5.8 高台径 6.8 高台高 1.3	体部はわずかに内湾し「ハ」の字に開き、口縁は内面に稜をもって更に開く。高台はわずかに開く。微粗粒砂含む。やや軟質。暗灰色。	ろくろ水挽成形。底部回転糸切り高台は貼付。	口縁部35% 底部20%
甕	5	口径 18.8	胴上半に丸味をもって張り肩部はなだらか。頸部で括れ外面に稜をもって口縁は外反して開く。微細粗粒砂小石含む。焼成良。明茶褐色内面黄褐色。煤付着。	3〜3.5cm幅の輪積痕。ろくろ整形後体部下半は下方よりの縦位のヘラケズリ。	口縁部13% 体部20%
羽釜	6	口径 20.0	鍔直下に最大径をもち口縁は内傾する。口唇はほぼ平坦となり内面寄りに浅い2条の沈線が廻る。鍔は断面三角形。微細粒砂小石含む。灰色外面一部暗灰色。	巻上げ成形後ろくろ整形。体部下半は縦位から斜位のヘラケズリ。鍔は貼付けられる。	№2 40%

12号住居跡出土土器（第31図）

1.　ろくろ使用の土師器坏。口縁部25%のみ。推定口径は13.0cm。体部は直線的に開き、口縁は外反する。微粒砂小石含む。やや軟質。暗黄褐色。

2.　土師器甕。接合しない3片より成る。推定口径19.9cm。体部は球形となり、頸部で括れ、口縁は「ハ」に開き先端は直立気味となる。口縁外面に一条の深い沈線が廻る。細粗粒砂小石含む。内面淡黄褐色、外面橙褐色で煤付着。整形は口縁部横ナデ整形後外面ヘラケズリ。内面はナデられるが成形時の凹凸が残る。



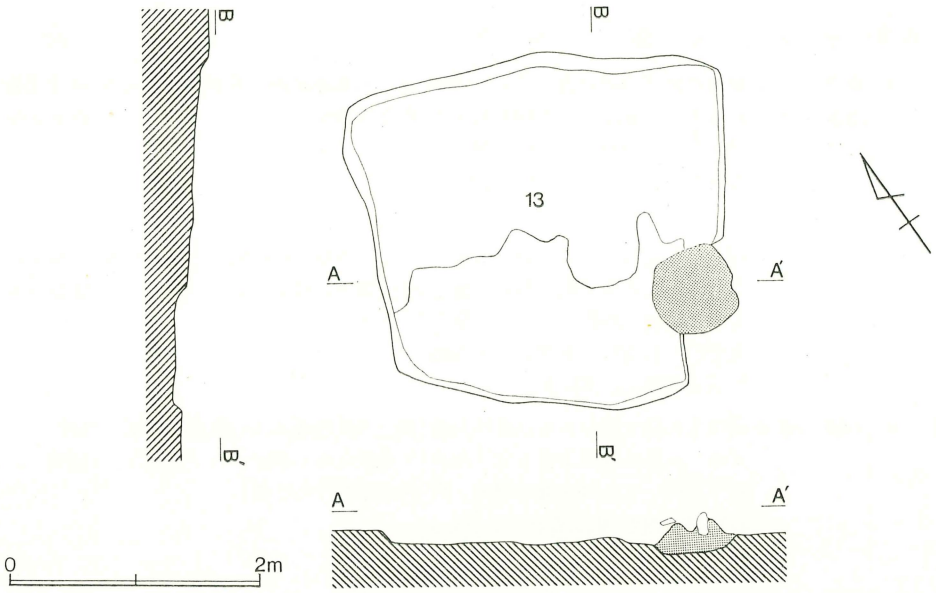
第31図　12号住居跡出土土器

13号住居跡（第32図）

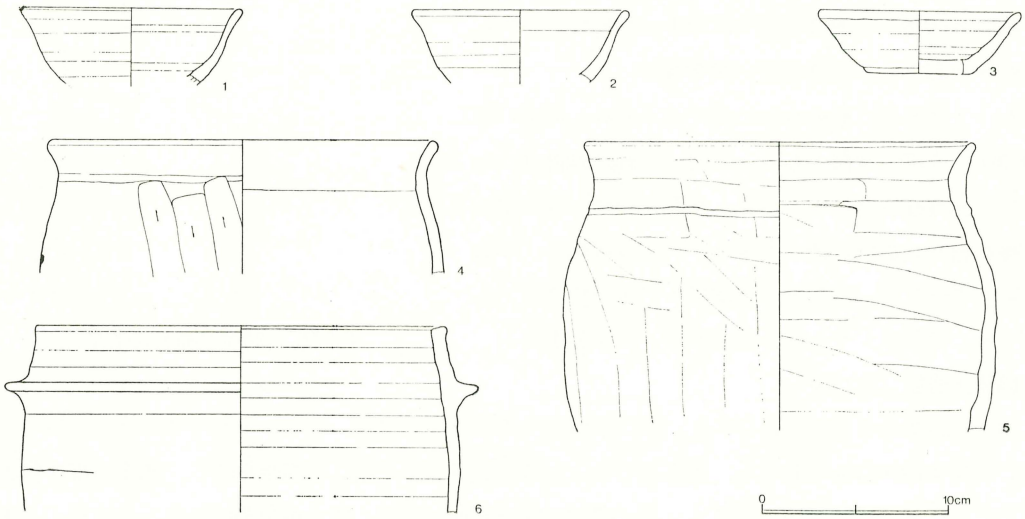
12号住居跡の東側に検出された。307×284cmの不整方形を呈す。プランの軸はN—55°—Wである。壁高は10cm前後であるが、南北辺のプラン確認面のレベル差は約25cmを測り、床面は南に傾斜している。カマドは東辺、南東コーナー寄りに構築されている。焼土が約20cm堆積しており、上部には天井石および側壁を補強していたと思われる片岩、礫が混在していた。カマドの底は床面から約10cm下がっている。床面は軟弱であり南に傾斜している。とくに南辺寄り100cmでは約10cm落ち込んでいる。遺物はカマド充土中から集中的に出土した。

13号住居跡出土土器（第33図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	推定口径 11.9	体部は下半に張りをもって開き、口縁は肥厚して外反する。微細粗粒砂含む。焼成良。灰色口縁部暗灰色体部一部淡橙褐色。外面一部黒色。	ろくろ整形。	カマド内出土 口縁部10% 体部20%



第32図　13 号 住 居 跡



第33図　13号住居跡出土土器

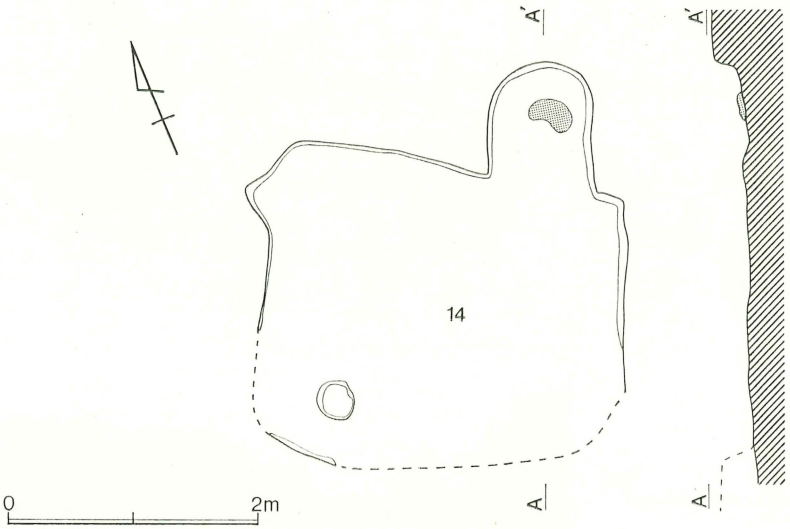
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	2	推定口径 11.6	体部下半に張りをもって開き、口縁は肥厚して外反する。微細粒砂含む。やや軟質。内面明茶褐色外面茶褐色。	ろくろ整形。	カマド内出土 13%
坏	3	推定口径 10.8 器高 3.4 底径 5.4	器肉厚い。体部下半に張りをもって開きわずかに括れて口縁は外反する。微細粗粒砂含む。やや軟質灰色底部から体部下半は灰黒色。	ろくろ整形。底部には糸切痕がわずかにうかがえる。	カマド出土 15%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	4	推定口径 21.0	なだらかな肩部より頸部でわずかに括れ口縁は「ハ」の字に開く。微粗粒砂小石含む。焼成堅緻。暗茶褐色口縁部内面明茶褐色。	口縁部横ナデ整形後肩部外面上方から下方へのナデ様ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	カマド内出土 10%
甕	5	口径 20.5	胴上位に最大径。肩部なだらか。頸部はわずかに括れ口縁は内側に肥厚して「ハ」の字に開く。微粗粒砂小石含む。粗い。焼成良。橙褐色部分的に黄褐色。	口縁部整形横ナデ後、頸部から肩部横ヘラケズリ。体部縦ヘラケズリ。頸部外面に浅い一条の沈線。内面横位のヘラナデ。	カマド内出土 口縁部10% 体部40%
羽釜	6	口径 22.0	体部上位に最大径。鍔のところでやや内傾し口縁はわずかに立ち上がる。口唇はわずかに丸味をもつ鍔は断面三角形。微細粒砂小石含む。密。茶褐色一部明茶褐色。	ろくろによる整形。鍔は貼付け。	カマド内出土 20%

14号住居跡（第34図）

10号住居跡の東側に近接している。掘り込みが浅く、斜面下側にあたる南辺は現出できなかったが290×255cm、梯形ぎみの長方形を呈すると思われる。主軸は N—65°—W である。壁高は北辺で約10cmを測る。 カマドは北辺の北東コーナー部近くにある。壁外に約100cmと大きく掘り込んで構築されている。底は床面より −5cm、 奥壁部ではほぼ垂直に立ち上がっている。柱穴は南西コーナー近くに１本ある。深さ15cm。床面は軟弱で地表の傾斜に従い南が深くなっている。

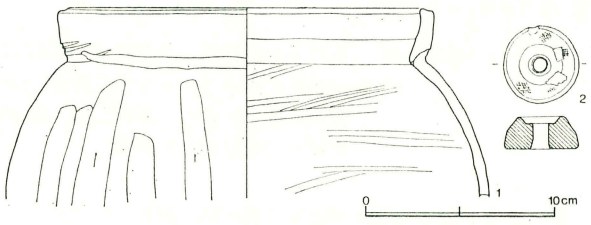
遺物は土師器坏、甕、須恵器坏がカマド充土中から出土している。



第34図　14 号 住 居 跡

14号住居跡出土遺物（第35図）

土師器甕。25%の残存率。推定口径は19.9cm。体部は丸味をもち頸部で括れ、口縁は内湾して立ち上がる。口唇部は平坦となる。胎土は比較的密で焼成もふつう。淡茶褐色。内面一部黒色。頸部内外面に接合痕。口縁部横ナデ。外面ヘラケズリ時の木口が頸部にあたる。内面横ヘラナデ。

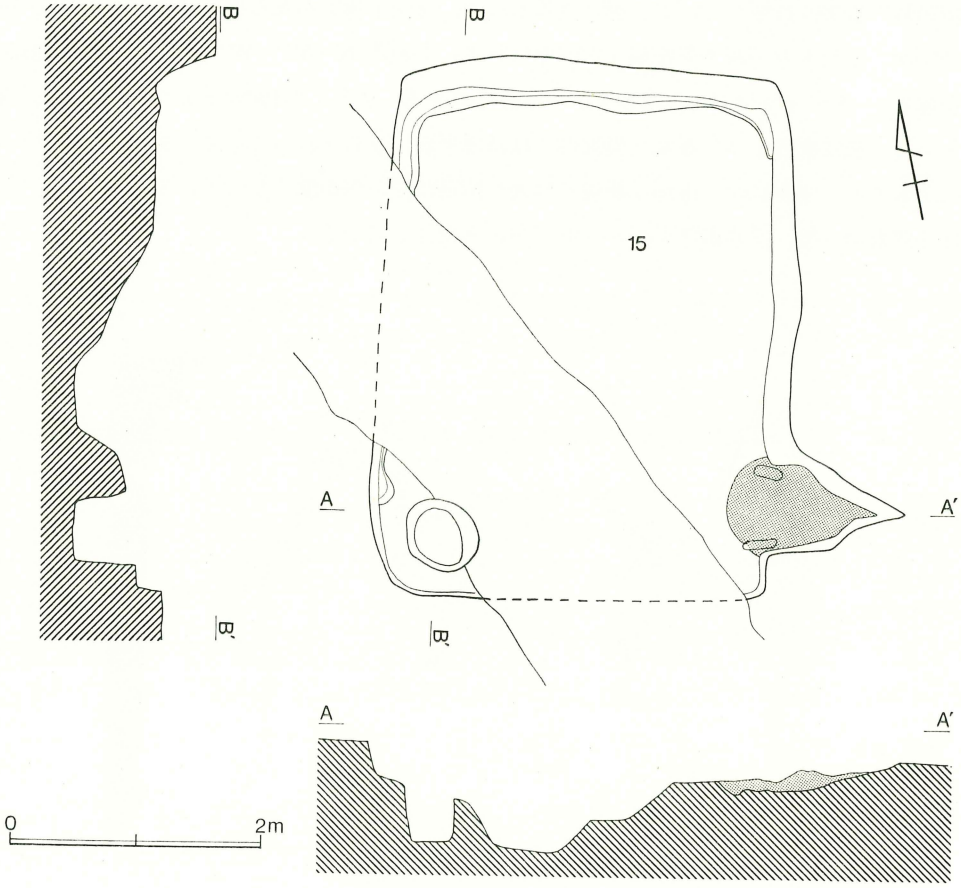


第35図　14号住居跡出土遺物

2は滑石製紡錘車。径4.0cm、厚さ1.7cm、軸径は0.7cmで下面がやや太い。表面の6ヶ所に細い沈線により格子目状のモチーフが描かれている。重さ48g。

15号住居跡（第36図）

14号住居跡の東側に位置している。西辺から南辺にかけて西南コーナ部を残し大きく2号溝に切られている。430×323cmの隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ南北にある。壁高は北辺で50cm、南西コーナー部で30cmを測る。周溝は幅15cm、深さ5cm前後で北東コーナー部から南西コーナー部にかけて約半周する。カマドは東辺の南東コーナー部近くにあり約100cm壁外に掘り込まれている。両側



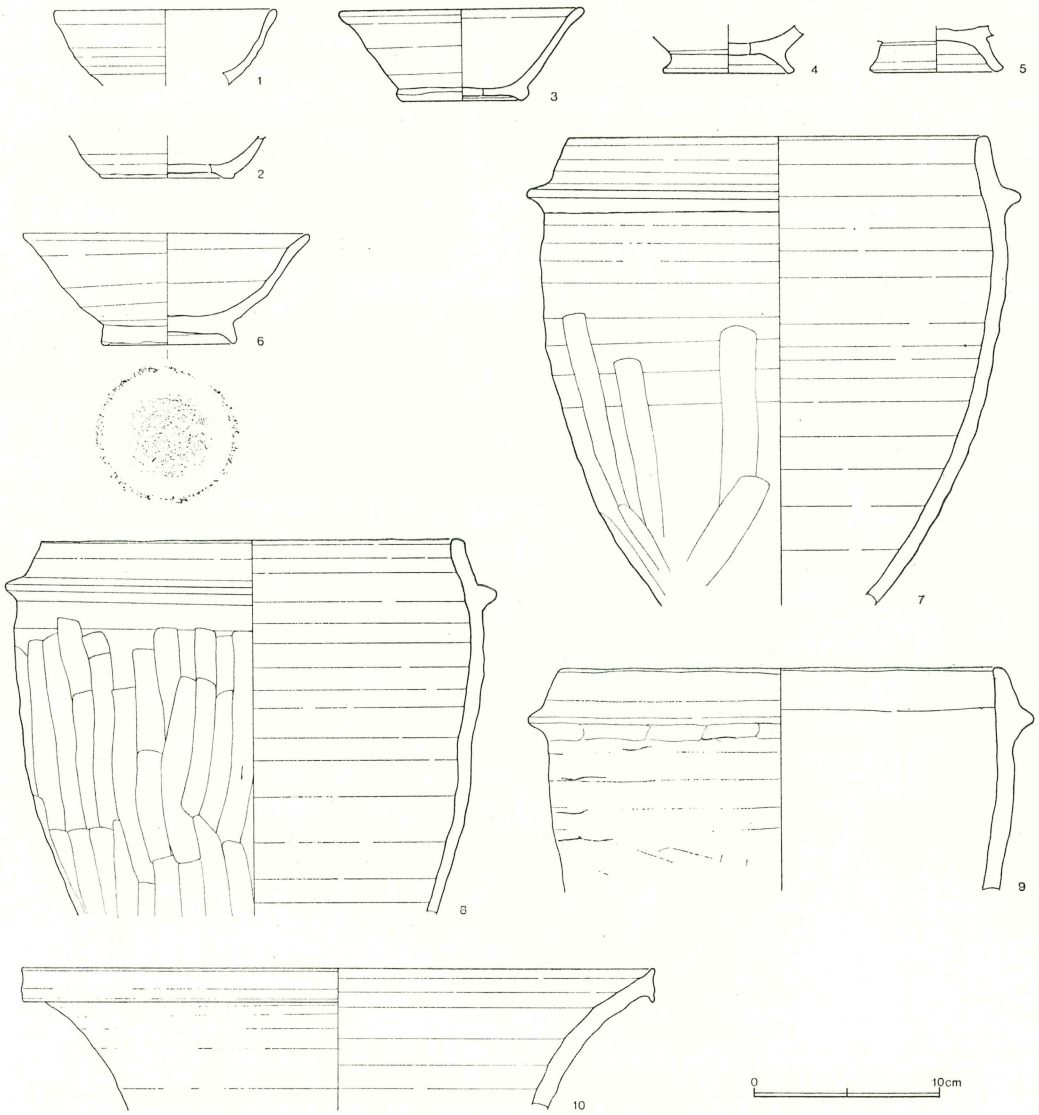
第36図　15号住居跡

壁には緑泥片岩を2個立てて補強しており、中央には支脚に用いたと思われる礫が据えられていた。底は床面より約10cm低い。煙道部は先細りしている。床面は平坦、堅緻であった。柱穴は南西コーナー部で2号溝にかかって1本検出された。深さ55cm。

遺物は土師器甕、坏、羽釜、須恵器甕、坏が覆土下部、カマド周辺から出土した。第37図7、8の羽釜はカマド内につぶれた状態で出土している。

15号住居跡出土土器（第37図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 11.1	体部は中位に張りをもち、口縁は玉縁となって更に開く。微細粗粒砂小石含む。やや軟質。橙褐色。	ろくろ整形。	No.5 底部欠損 10%



第37図　15号住居跡出土土器

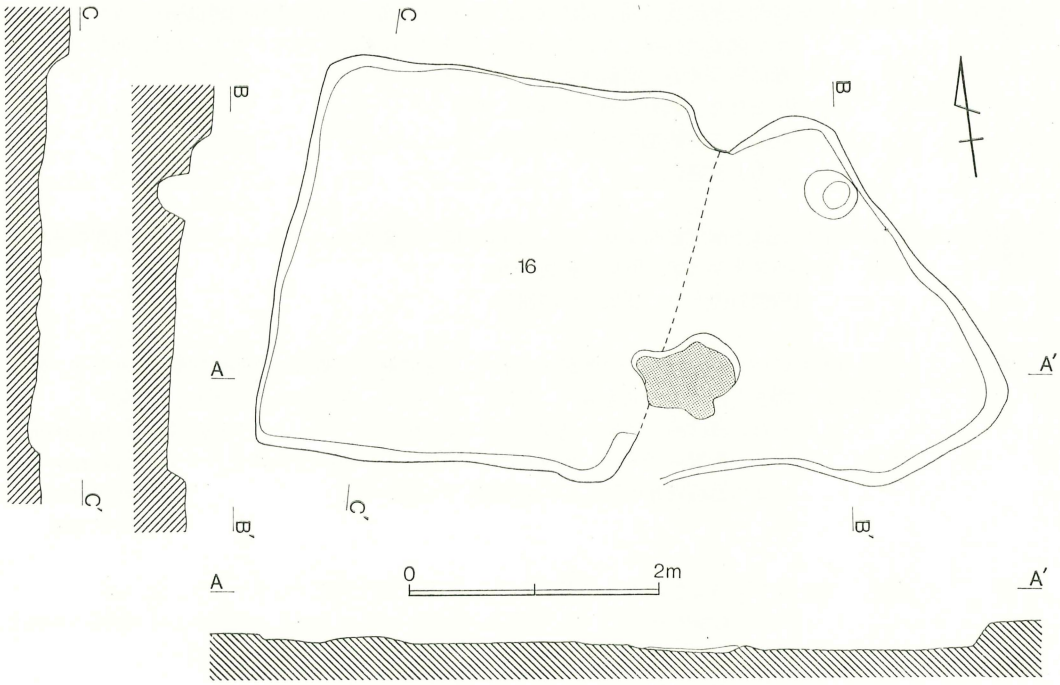
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	2	口径 6.1	体部下端は丸味をもって張り、高台は3㎜と低く雑なつくり。微粗粒砂含む。焼成良。黄褐色。	ろくろ整形。高台は貼付け。	覆土 25%
坏	3	口径 13.2 器高 4.2 底径 6.9 高台径 7.2 高台高 0.7	体部は直線的に「ハ」の字に開き口縁は玉縁となって更に開く。底部の器肉は薄い。高台は低く雑なつくりとなる。微粗粒砂小石含む焼成良。黄褐色。一部橙褐色。	ろくろ整形。高台は貼付け。	覆土 20%
坏	4	底径(推定) 6.2 高台径 7.0 高台高 1.0	高台は内側の長さと外側の長さが著しく異なり、大きく「ハ」の字に開く。接地部は内側。微細粗粒砂含む。焼成良。橙褐色。坏底部内面は褐色。内黒土器。	ろくろによる整形。高台は貼付け後丁寧に調整される。坏底部内面はヘラミガキが施される。ミガキも余り丁寧ではなく色も真黒にはならず褐色を呈する。	覆土 底部のみ25%
坏	5	底径 5.6 高台径 7.2 高台高 1.7	高台は高く「ハ」の字形に開く。歪む。微細粒砂小石含む。軟質。橙褐色。	高台は貼付けと言うよりも埋め込まれている。横ナデ整形。外面底部との境は棒状工具によるナデが溝状となり一周する。坏部内面に爪痕が多数残る。	覆土 底部のみ50%
坏	6	口径 15.4 器高 5.0 底径 7.0 高台径 7.3 高台高 1.0	径の小さな底部から体部下半に張りをもって大きく開き、口縁は更に外反し先端は立ち気味となる。高台は余り開かず接地部は内側。微粗粒砂石含む。焼成良。橙褐色一部黄褐色。内面底部から体部中位まで黒色。内黒土器。	ろくろによる整形。底部には糸切り痕が残る。高台は貼付後ナデ整形、つくりはやや雑である。内面こ横位のヘラミガキにより平滑。黒色処理は全面に及ばず、底面から体部中位までである。	No.4、No.3、No.5 口縁22%を欠く。
羽釜	7	口径 22.5	窄まった底部付近より緩やかに開き鍔直下に最大径をもち内傾して口縁は立ち気味となる。鍔は小さく断面三角形。細粗粒砂小石含む焼成堅緻。淡褐色体部部分的に茶褐色。外面に黒斑、内面下半器面荒れる。	巻き上げ痕はろくろ整形によってていねいに消される。鍔は貼付後ろくろナデ。体部下半のヘラケズリは上方から下方に施されるが粗くまばらである。	No.3 底部と体部の一部を欠くが口縁は全周する。
羽釜	8	口径 22.8	体部は中位と上位に張りをもち鍔付近から内傾し口縁は立ち気味。口唇部は平坦。鍔は小さく断面三角形。微粗粒砂小石含む。焼成良淡橙褐色。外面部分的に褐色。口縁から体部上半に煤付着。内面にも一部煤付着。	巻き上げ成形後ろくろによる整形体部外面鍔下2㎝のところから上方から下方への縦ヘラケズリ。鍔は貼付け。	No.5、No.3 覆土出土。 底部を欠く。 75%
羽釜	9	口径 23.9	器肉厚い。体部の張りは弱く内傾も少なく口縁は立ちあがり先端は	外面に1.3〜2.0㎝の巻き上げ痕が顕著に残る。ろくろ整形。鍔は貼	No.5、覆土 口縁部20%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	9		内湾する。口唇は平坦。鍔は小さく断面三角形。微粗粒砂小石含むやや軟質。淡橙褐色。部分的に2次的加熱のためもろく紅褐色。	付時の指ナデ付け痕が残る。整形は雑であるが内面はなめらか。	体部25%
甕	10	推定口径 44.0	頸部より大きく朝顔形に開き口縁は先端が尖り、直下に鍔状につまみ出される。微粗粒砂小石含む。軟質。灰色。	ろくろ整形。	覆土 口縁部のみ 10%

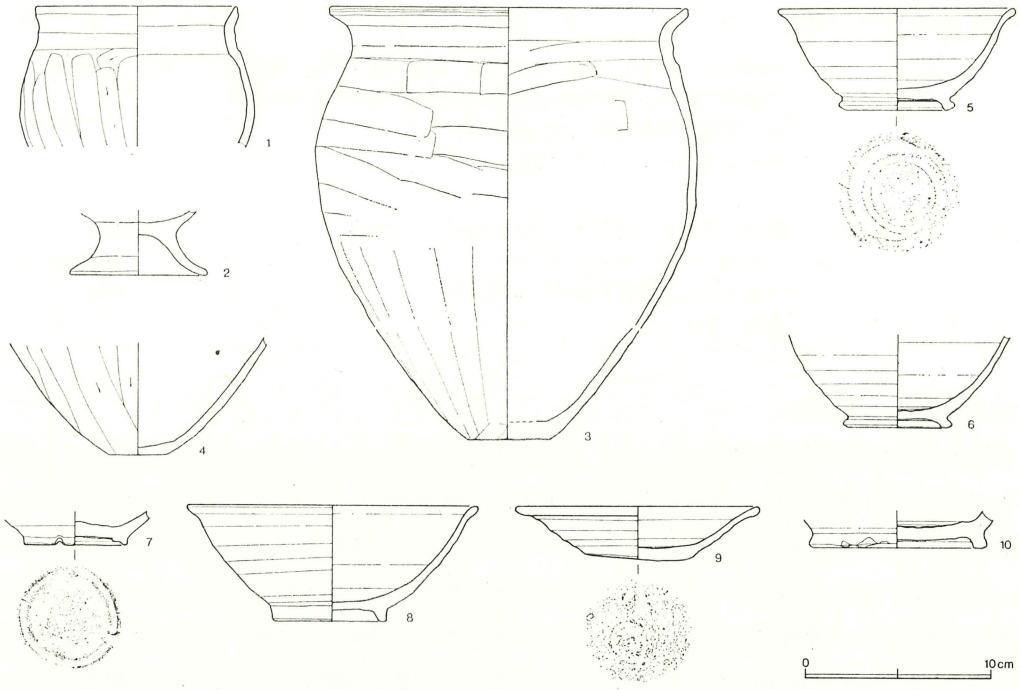
16号住居跡（第38図）

発掘区の最北部の緩斜面に検出された。東側には性格不明の落ち込みがあり東辺は把握できなかった。(350)×320cmのややくずれた隅丸方形を呈し、軸は方位に合う。壁高は斜面上部にあたる北辺では18cmあるが、南辺では5cm前後と浅い。カマドは東辺の東南コーナー寄りに構築されている。掘り込みは浅く貧弱であった。焼土が確認された範囲外からも遺物（第39図2、6）が出土しており、本来さらに壁外にむかって煙道部に相当する部分が存在したと思われる。柱穴は検出されなかった。床面は凹凸が激しい。特に西辺寄りでは250×100cmの範囲が5～8cm前後隆起していた。

遺物はカマド周辺から集中して土師器甕、須恵器坏が出土している。本跡東側の落ち込みについてはそのプラン、規模等から住居跡と認定し得なかった。



第38図　16号住居跡



第39図　16号住居跡出土土器

16号住居跡出土土器（第39図）

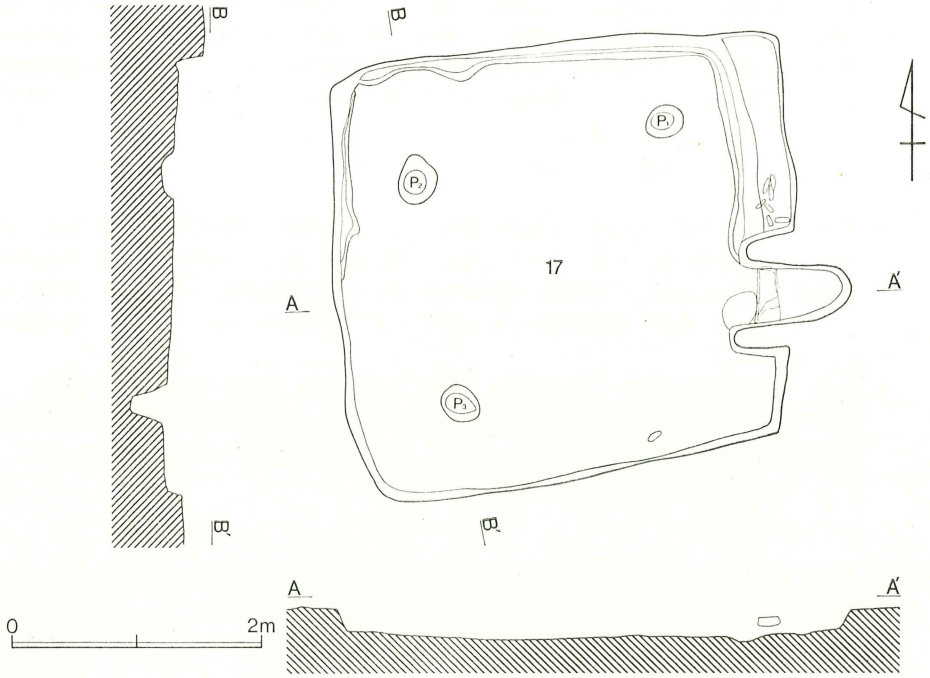
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形台付甕	1	口径　10.9	体部上位に最大径。肩部はなだらか。頸部は内傾して立ち上がり口縁は外反する。先端は尖り立ち気味となる。微粗粒砂小石含む。焼成良。二次的加熱のためにもろくなる。橙褐色。	口縁部横ナデ整形後外面肩部横位の以下は縦位のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	カマド出土 25%
小形台付甕	2	底径　4.2 台径　7.4	台は小形で底部より「ハ」の字に開き下半で更に開いて接地する。微粗粒砂含む。軟質。明橙褐色。	横ナデ整形。	台部のみ80%
甕	3	口径　19.4 推定器高　23.1 底径　4.3	径の小さな底部より体部は大きく開き上位に最大径をもつ。頸部で括れ口縁は強く外反し先端が直立する。微粗粒砂含む。焼成良いが内面の器面剥離が著しい。赤茶褐色。	口縁部横ナデ整形。外面肩部横位以下斜位、縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。で頸部には単位のやや細い工具によるヘラナデが施される。	カマド、No.6 No.7 口縁部90% 体部40% 底部35% 復元実測
甕	4	底径　3.0	径の小さな底部より体部は大きく開く。微細粒砂含む。密。焼成良。内面橙褐色。外面茶褐色。	体部下端は斜位のヘラケズリ。底面はヘラケズリによって造られる内面は下端は2段横位の、以上は縦位のヘラナデ。	No.6 底部のみ80%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	5	口径 13.5 器高 4.9 底径 6.0 高台径 6.3 高台高 0.7	径の小さな底部より体部は下端と中位に張りをもって開き、口縁は肥厚して外反する。高台は低く雑なつくりとなる。微細粒砂小石含む。焼成良。褐色。部分的に灰色を呈し軟質。	ろくろ水挽成形。底部に回転糸切り痕。高台は貼付け後ろくろナデ内面に棒状工具によるナデが一条廻る。内面は器面剥離が激しい。	No.1、No.2 高台45% 底部100% 口縁部25%
坏	6	底径 5.3 高台径 5.9 高台高 0.6	径の小さな底部より体部は下端と中位に張りをもって大きく開く。高台は低くやや歪む。微粗粒砂含む。軟質。黄褐色部分的に橙褐色	ろくろ水挽成形。底部整形痕は不明。高台は貼付け後横ナデ。外面坏との接合部は棒状工具によってナデられ稜をつくる。	No.6、No.3 高台50% 底部95% 体部30%
坏	7	底径 5.7 高台径 5.6 高台高 0.4	底径は小さい。高台は低く内側に浅い沈線が廻る。正円にはならず歪む。微細粒砂小石含む。軟質。灰色外面一部灰黒色。内面一部黄灰色。	ろくろ整形。底部に右回りの回転糸切り痕。高台は貼付け後横ナデ一ヶ所に棒状工具によって切られる。	覆土 底部のみ
坏	8	口径 15.8 器高 5.6 底径 6.0 高台径 6.2 高台高 0.7	小さな径の底部より体部は下端と上半に張りをもって開き、口縁は玉縁となって外反する。高台は低く直立する。微粗粒砂小石含む。焼成良。灰黒色。二次的火熱を受けた部分は軟質で橙赤褐色を示す	ろくろ整形。底部右回りの回転糸切り痕。高台は貼付け。	カマド No.4 No.5、No.6 口縁部40% 底部85%
皿	9	口径 13.2 器高 2.9 底径 5.8	底部は一部突出し不安定。体部は中位に張りをもち大きく開き口縁は玉縁状となり更に開く。微粗粒砂小石含む。軟質灰色。一部灰黒色を呈し焼きしまる。	ろくろ整形。底部は右回りの回転糸切り痕。中央に小石の抜けた痕がありやや突出した底部となる。	No.3 口縁部30%を欠く。
甕	10	底径 9.3 高台径 9.6 高台高 0.7	高台は接地部が広く凹凸が激しい微細粒砂小石含む。焼成良。内面青灰色。外面暗青灰色。	ろくろ整形。底部は回転と一定方向のヘラケズリ。高台貼付後ナデにより内側に稜をもつ。高台接地部にヘラ起しの凹凸。	No.1 底部のみ

17号住居跡（第40図）

16号住居跡の南側に位置している。370×350cmの隅丸方形を呈し、軸はほぼ方位に合う。壁高は20cm前後で良好な状態で検出された。幅10cm前後、深さ5cmの周溝が北半にめぐる。東辺では壁から30cm内側にめぐり、カマド裾につづく。この部分は床面より若干高く張り出し状を呈している。カマドは東辺にあり、ローム層を掘り残した袖をもち、壁外に約40cm掘り込んでいる。焚口部幅は50cmで片岩の天井石が落下せずに遺存していた。右袖部には浅いピット状の落ち込みがある。カマド底は床面とほぼ同レベルとなっている。柱穴は南東コーナー部を除き各コーナー部に検出された。P_1は深さ7cm、P_2は10cm、P_3は30cmを測る。床面は平坦で堅緻であった。

遺物はカマド内及び右袖部で土師器坏、甕、須恵器坏が出土した他、P_2、P_3間で床面から若干



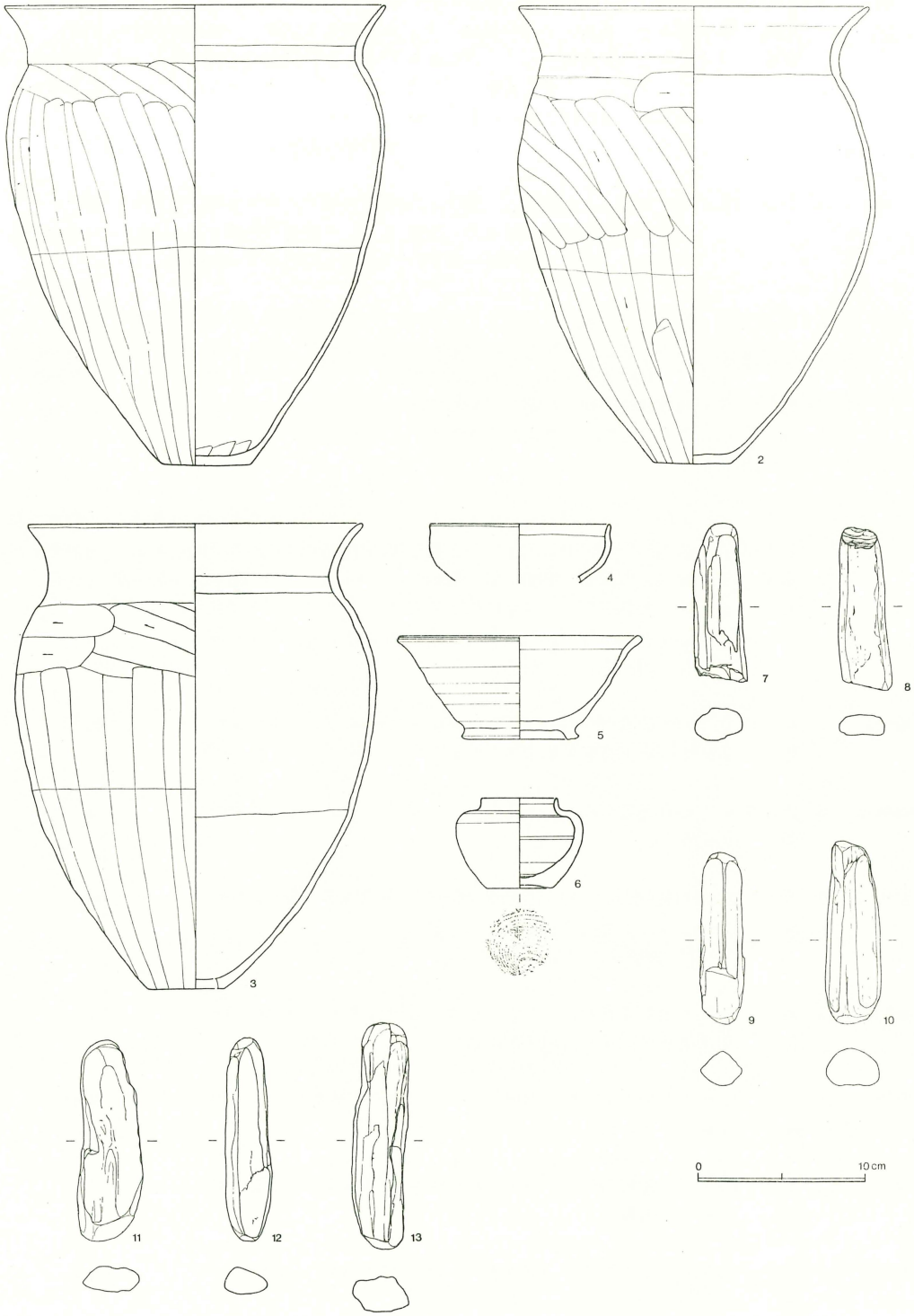
第40図　17 号 住 居 跡

浮いて底部に「中」のへら書きのある須恵器薬壺（第41図 6）が出土している。またカマド左裾寄りのテラス状の部分から編み物石が 9 個出土している。うち 1 個は壁際に立って出土した。

17号住居跡出土遺物（第41図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 22.5 器高 27.6 底径 5.2	器肉薄い。窄まった底部より体部は中位直下に張りをもち直線的に開き上位に最大径をもつ。頸部は直立し口縁は「ハ」の字に開く。微細粒砂小石含む。軟質。底部より12～13cmのところに色の境界線あり。内面は 5 ～10mm下がる。上半は橙褐色。下半は淡橙褐色外面一部褐色。	頸部外面に巻上げ痕。口縁部横ナデ整形。外面肩部横位以下斜位のヘラケズリ。底部は一定方向のヘラケズリ。外面は特に器面の磨滅が著しい。内面はヘラナデでやや器厚の凹凸がみられる。	№1、№2 カマド 口縁部50% 体部30%を欠く。
甕	2	口径 21.0 器高 27.4 底径 4.7	器形は 1 とほぼ同様。微細粒砂小石含む。焼成良。 1 と同様底部より12cm前後のところに色の境界線をもつ。やはり内面は 1 cm前後下がる。上半赤褐色下半は淡橙褐色外面一部褐色を呈する。	胴部中位に接合痕。頸部外面巻き上げ痕。口縁部整形横ナデ後、肩部外面横位以下斜位、縦位のヘラケズリ。底部一定方向のヘラケズリ。内面横位のヘラナデ。	№1、№2 覆土 口縁部60% 体部40%を欠く。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	3	口径 20.1 器高 27.9 底径 4.5	器形は1とほぼ同様。微細粒砂小石含む。底部より12cm前後のところに色の境界線をもつ。内面はやはり下がる。上半橙褐色。下半淡橙褐色。外面体部全体に粘土が焼付く。	内面体部中位に接合痕。口縁部外面に巻き上げ痕。口縁部整形横ナデ後、外面肩部横位以下斜位、縦位のヘラケズリ。底部もヘラケズリ。内面ヘラナデによりなめらか全体的に磨滅する。	No.2、No.1 覆土 底部80%、体部20%を欠く
坏	4	口径 10.9	丸味をもった底部から口縁は立ち上がり先端はやや外反する。微粗粒砂含む。軟質。橙褐色一部褐色	器面磨滅のため整形痕は不明瞭となる。口縁部整形横ナデと底部ヘラケズリの間は1cm前後開く。	覆土 口縁部28%
坏	5	推定口径 14.4 推定器高 5.7 底径 6.4 高台径 6.7 高台高 0.6	径が小さく扁平な底部より体部は大きく開き口縁は内面に稜をもって口縁は外反する。高台は低く接地面は中央がやや窪む。微粗粒砂小石含み粗い。焼成良。灰黒色。	ろくろ水挽成形。底部は回転糸切りによる切り離し、高台は貼付け	覆土 口縁部11% 底部48%
薬壺	6	口径 4.5 最大径 7.6 器高 5.4 底径 4.0	底部は小さくやや上げ底となる。体部は下半と中位にわずかな張りをもって開き、肩部は強く屈曲する。頸部で窄まり口縁は直立し先端は尖る。微粒砂小石含む。焼成良。明灰色。	ろくろ水挽成形痕が内側に明瞭。底部は右回りのゆるい回転糸切り痕。「中」のヘラ書き。体部下端に一部ヘラケズリが施される。肩部外面に自然釉が付着する。	口縁部を細く欠損するがほぼ完形。
編物石	7	現存長 9.5 幅 2.9	石質絹雲母片岩。全体的に丸味をもつ。下方を欠損する。	重さ83g、厚さ1.9cm	No.3
編物石	8	現存長 9.7 幅 2.8	石質絹電母片岩。上下を欠く。扁平。	重さ61g、厚さ1.3cm	No.4
編物石	9	長さ 10.3 幅 2.5	石質絹雲母片岩。上面は三角形を呈し、下面は弧状を呈するが全体的に磨かれて丸味をもつ。	重さ72g、厚さ2.1cm	No.6
編物石	10	長さ 10.9 幅 3.3	石質絹雲母片岩。丸味をもつ。重心点付近が一方わずかに凹む。	重さ124g、厚さ2.3cm	No.5
編物石	11	長さ 12.0 幅 3.4	石質絹雲母片岩。扁平。	重さ106g、厚さ1.5cm	No.8
編物石	12	長さ 12.2 幅 2.6	石質絹雲母片岩。全体的に丸味をもち形整う。	重さ76g、厚さ1.6cm	No.9
編物石	13	長さ 13.5 幅 3.3	石質絹雲母片岩。全体的に小形が多いなかで最大。石質による凹凸が残る。重心点付近の右側がわずかに磨り減る。	重さ146g、厚さ2.1cm	No.7



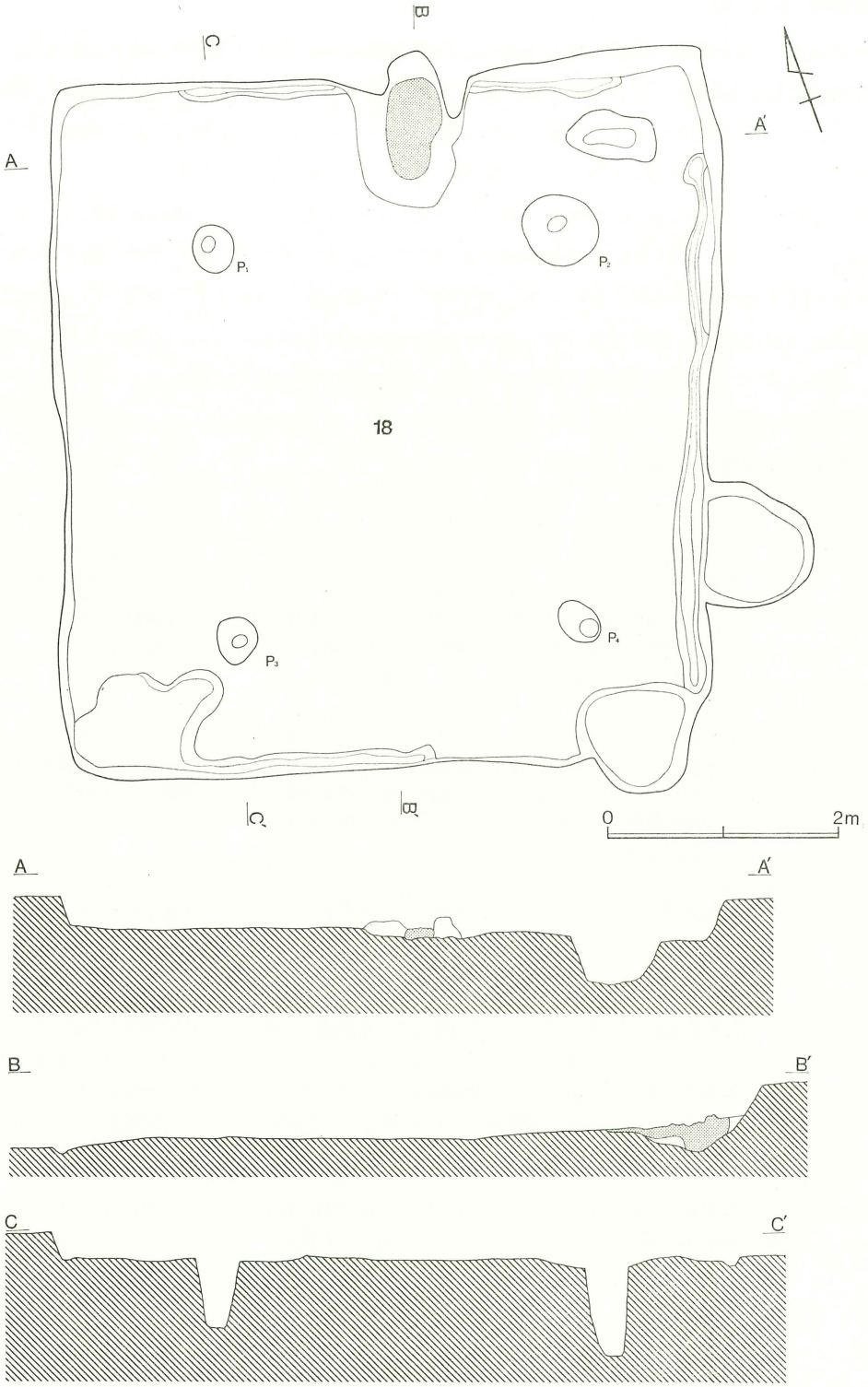
第41図　17号住居跡出土遺物

18号住居跡（第42図）

1号住居跡及び円形周溝の西側に検出された。保存状態は良好で610×582㎝の隅丸方形を呈し、本遺跡で検出された住居跡のうちで最古期に属す。軸はN—25°—Eである。壁高は斜面上部にあたる北辺では25～30㎝前後あるが、南側は5㎝前後と浅い。周溝は西辺を除く各辺に確認されたがそれぞれはコーナー部で途切れ連続しない。幅10～25㎝、深さ5㎝前後である。カマドは北辺ほぼ中央に構築されている。壁外に約20㎝掘り込んでいるが主体は内部にある。袖は粘土混りのロームによりつくられている。底は床面から約20㎝下がっている。カマド右側に80×42㎝、深さ70㎝の不整楕円形を呈する貯蔵穴が検出されている。柱穴はプラン対角線上で各コーナー寄りに4本検出された。床面は全体的に固く良好であった。とりわけ床面がわずかに上がっているカマド周辺は堅緻である。遺物はカマド、貯蔵穴近辺に集中していた。第43図7は貯蔵穴に落ちこんでいたものである。灰釉陶器13は北東コーナー部でプラン確認面から出土したものである。

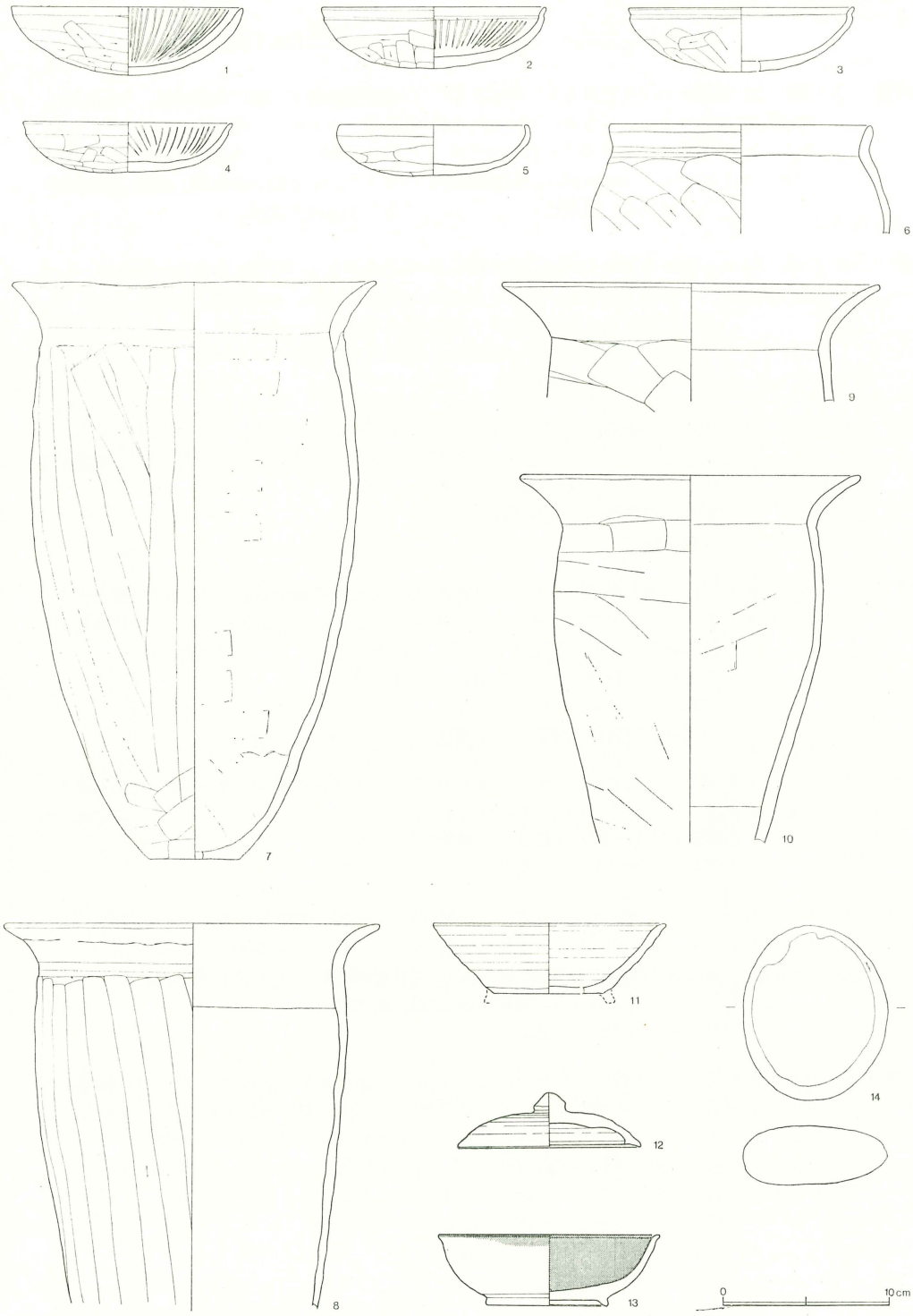
18号住居跡出土土器（第43図）

器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 14.0 器高 4.1	円弧状の底部より、外面に稜をもって短い口縁はわずかに立ち上がる。微粗粒砂含む。焼成良いが内面の器面剥離が激しい。赤褐色外面部分的に黒褐色を呈する。	口縁部整形横ナデ後、底部外面横位のヘラケズリ。内面はよくヘラミガキされ平滑となり、底部中央から口唇直下まで放射状の暗文が施される。	覆土出土 70%残存
坏	2	口径 13.5 器高 3.7	1とほぼ同様であるが、わずかに扁平となり口縁は外反し内側に稜をつくる。微粗粒砂含む。焼成良。橙赤褐色。外面に黒色部あり、まわりは黄褐色となる。	口縁部整形横ナデと底部外面ヘラケズリの間は約1㎝開きナデられる。内面は磨かれず、放射状の暗文も雑である。	№6 口縁部60% 底部70%
坏	3	口径 13.6 器高 3.9	器形は2と近似するが口縁の外反が強くなり、器肉も薄くなる。微粗粒砂含む。焼成良。明橙褐色。	手法も2と同じ。内面は磨かれず暗文は不明瞭となる。	№2、№3 40%残存
坏	4	口径 12.5 ～13.0 器高 3.4	器形はやや扁平となる。丸味をもった体部より稜をもって短い口縁は外反して立ち上がる。微細粗粒砂含む。焼成良。赤茶褐色一部褐色。外面に炭化物付着。	口縁部横ナデ整形後、外面直下から横ヘラケズリ。底面は一方方向のヘラケズリ。内面は器面剥離が著しいが光沢をもち放射状の暗文が施される。	№1 口縁部15%を欠く。
坏	5	口径 10.8 器高 3.2	扁平な底部から口縁は強く内湾する。微細粗粒砂含む。焼成良。焼成時のひび割れが目立つ。橙褐色外面底部黒色。	底部外面に巻上げ痕。口縁部整形横ナデと底部ヘラケズリの間は開き適当なナデが施される。内面ヘラナデ。つくり整形とも雑で指頭圧痕が残る。	覆土出土 80%
小形甕	6	口径 15.9 最大径18.0	体部上位に最大径をもち、肩部は張りをもつ。頸部は緩く括れ、口縁は肥厚し、わずかに開く。微細	口縁外面に巻き上げ痕。口縁部横ナデ整形後、外面肩部斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデが	覆土出土 20%



第42図　18 号 住 居 跡

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			粗砂含む。焼成良。淡橙褐色。	施されるが器面の剥離が著しい。	
土師甕	7	口径 22.0 最大径19.8 器高 34.7 底径 5.4	径の小さな底部より、胴部下端に張りをもって開き、上半に最大径をもつ。頸部で括れ口縁は外反して「ハ」の字に開く。微粗粒砂含む。焼成良。橙褐色。	口縁部整形横ナデ後、外面斜位、縦位のヘラケズリ。胴部中位以下に粘土が焼け付く。内面は横位のヘラナデ。中位以下は器面が剥雑する。底部に木葉痕。	№10、11、カマド出土 口縁部50% 底部25%
甕	8	口径 22.6 最大径18.9	体部は直線的で上端に最大径をもつ。頸部はわずかに窄まり口縁は強く外反する。微細粗粒砂小石含む。焼成良。明橙褐色。内面と外面口縁以下一部に煤付着。	外面肩部より口縁部に巻き上げ痕が明瞭に残る。口縁部横ナデ整形後外面縦位のヘラケズリ。内面斜斜位から横位のヘラナデ。	№7、8、9 №10、13 カマド出土 体部下半と口縁部18%欠損
甕	9	口径 22.8	胴部は直線的、頸部の括れは弱い。大きな口縁は外反して「ハ」の字に大きく開く。微粗粒砂含む。焼成良。淡橙褐色。口縁部内面に3ヶ所黒斑。	口縁部整形横ナデ後、外面斜位のヘラケズリ。内面横ヘラナデ。	№5、6 口縁部65%
甕	10	口径 20.6 最大径16.2	器肉は最大径付近で薄く、口縁と胴下半は肥厚する。下部より直線的な開きをみせた胴部は上半で丸味をもつ。頸部でわずかに括れ、口縁はやや外反して大きく開く。粗粒砂小石含む。軟質。明橙褐色	軟質で器面磨滅する。口縁部整形横ナデ後、外面上部横位、以下は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。	覆土出土 口縁部25%
須恵坏	11	口径 14.0 器高 4.2 底径 6.6	扁平な底部より、体部は一度立ち上がって開く。口縁は外反する。微粒砂小石含む。焼成良。淡灰色内面口縁を除き、黒色を呈する。	ろくろ水挽き整形。高台は剥落する。	覆土出土 口縁部20%
須恵蓋	12	口径 11.0 器高 2.1 つまみ径 1.9 つまみ高 1.2	つまみは宝珠形。天井部より丸味をもって開き、かえりをもつ。器肉は天井部周辺の内面が肥厚するしっかりしたつくり。微粗粒砂小石含む。焼成良。灰色。	ろくろ整形。天井部外面は回転ヘラケズリ。つまみは貼付けられる。天井部内面につまみ貼付け時の指頭圧痕が残る。	完形。
灰陶坏	13	口径 13.4 器高 3.9 底径 7.3 高台径 7.4 高台高 0.5	器肉はやや厚い。器形は内面と外面では感じを異にする。外面は扁平な底部より体部は下半に張りをもって開き、短い口縁は外反する。内面は底部中央が凹み体部の一番張りをもつ部分までが底面となる微細粒砂含む。やや粗。焼成良。淡灰色。釉色は淡緑色。	ろくろ水挽整形。底部はヘラ切りか？　高台は貼り付けられたものと思われる。その後回転ナデ整形。施釉方法はすくいがけ。一方に釉薬をこぼしたあとが外側につく。	口縁部35%を欠損
磨石	14	長さ 10.5 幅 8.7 厚さ 3.5	石質砂岩。下面の方がなめらかである。右側面に使用痕が認められる。	重さ429g	№1



第43図　18号住居跡出土遺物

19、20号住居跡（第44図）

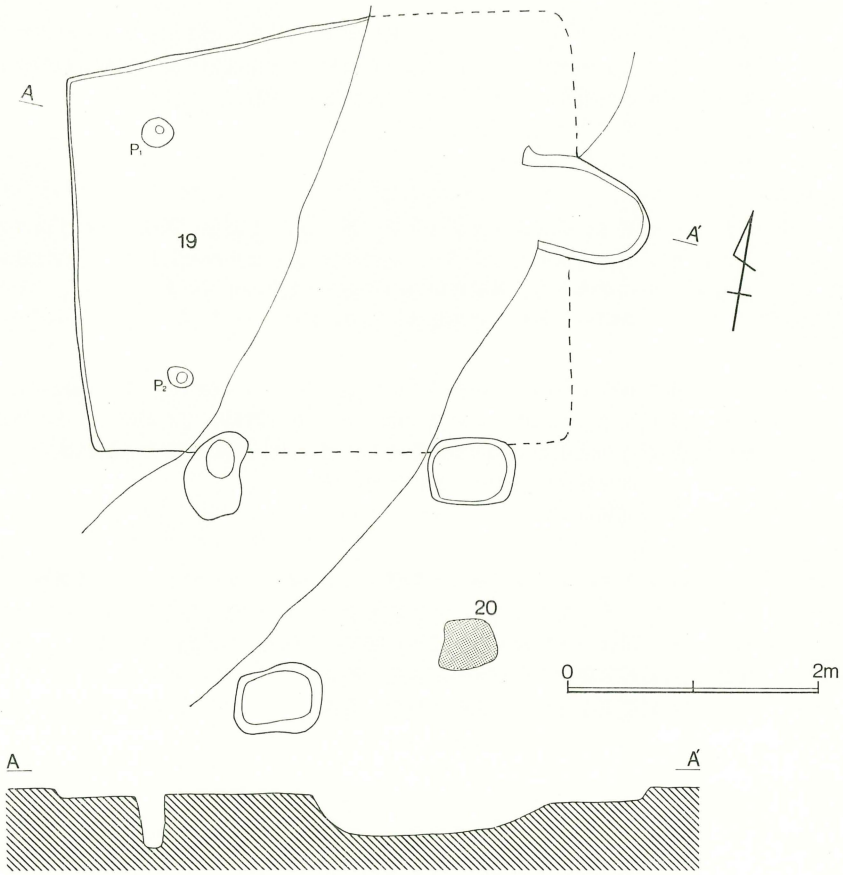
19号住居跡は円形周溝の東側周溝上に検出されたもので、さらに西辺で1号建物跡と重複している。円形周溝の墳丘は本跡が構築された時期には既に一部が削平されていたことが知れる。覆土から円筒埴輪片が出土している。

重複した部分の壁は明瞭でなく確認し得なかったが、周溝内側に掘り込まれた部分と外側のカマドからおおよその規模は把握できた。主軸をほぼ東西にもつ(400)×315㎝の隅丸長方形を呈する。壁高は西辺で10㎝を測る。カマドは東辺にあり100×75㎝、深さ10㎝の規模で、一部周溝にかかり多量の焼土が残存していた。カマド長軸は住居跡の長軸に対しずれている。柱穴は西辺の各コーナー寄りに2本検出されている。規則的な配置から東辺コーナー寄りにも2本想定される。P_1は深さ40㎝、P_2は46㎝。床面は平坦でなく、また貼床部分も良好な状態ではなかった。

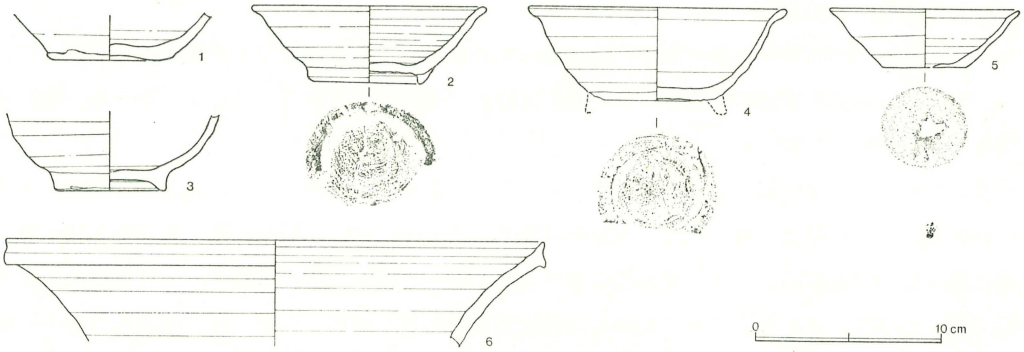
遺物は須恵器坏、甕のほか、刀子（第57図6）が床直で出土している。

20号住居跡は19号住居跡南側にカマドと考えられる焼土跡（40×40㎝）から認定した。したがってプラン規模、柱穴、床面等は不明である。その位置からすると円形周溝、建物跡と重複関係にあったものと思われる。

遺物は焼土跡から小片岩に混じって検出されたものである。



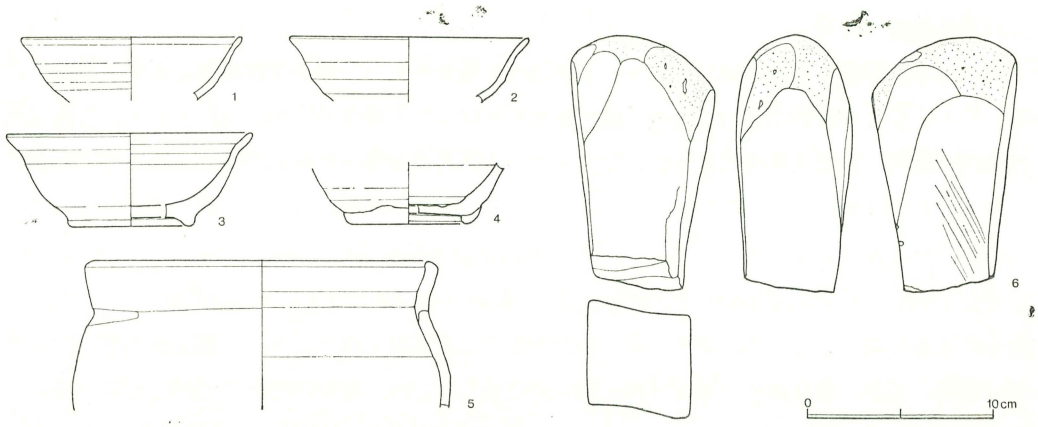
第44図　19・20号住居跡



第45図　19号住居跡出土土器

19号住居跡出土土器（第45図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	底径　6.7	底面は歪む。全体的に雑なつくり。微粗粒砂小石含む。軟質。淡橙褐色。外面底部黒色。	ろくろ整形。底部外面右回りの回転糸切り痕。一部は糸切り時に粘土がめくれて高台風となる。	覆土 底部と体下半60%
坏	2	口径　12.7 器高　3.5 底径　5.8 高台径 6.5 高台高 0.5	底部は切りそこなって一部隆起する。体部は「ハ」の字に開き口縁は外反する。高台のつくりは雑で接地面は内側となる。微細粒砂小石含む。橙褐色。	ろくろ水挽成形。底部には右回りの回転糸切り痕。高台は貼付後ナデ整形。	覆土 口縁部14% 底部90%
埦	3	底径　6.5 高台径 6.1 高台高 0.9	扁平な底部より体部は下端で張り中位に段をもって開く。高台はほぼ立直する。微細粗粒砂小石含む橙褐色。内面一部淡褐色。	ろくろ整形。底部にはわずかに糸切り痕が認められる。高台は貼付け後ろくろナデ。	覆土 底部50% 体部30%
坏	4	口径　13.9 器高　4.9 底径　6.2	扁平な底部より体部は中位に張りをもって開き、口縁は玉縁となって外反する。高台は剥落する。微細粗粒砂小石含む。底部灰色。体部褐色。	ろくろ水挽整形。底部回転糸切り痕は磨滅して不明瞭となる。底部には高台貼付時の爪跡が残る。	覆土 口縁部25% 底部80%
坏	5	口径　10.0 ～10.3 器高　4.2 底径　4.3 ～4.8	小形、小さな底部より体部は上半に張りをもって「ハ」字に開き口縁は内面に稜をもって更に開く。微細粗粒砂小石含む。灰色、外面底部より口縁にかけて黒色、黄灰色を呈す。底部穿孔。	ろくろ水挽成形。底部は磨滅のため不明瞭であるが、回転糸切り痕が残る。穿孔は焼成前。	覆土 口縁部をわずかに欠くがほぼ完成。
甕	6	推定口径 29.0	大きく「ハ」の字に開いた口縁は外側につまみ出され先端で尖る。微細粒砂小石含む。やや軟質。淡灰色。	ろくろ整形。	覆土 8%



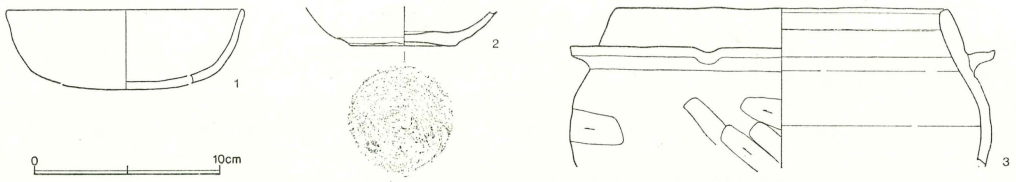
第46図　20号住居跡出土遺物

20号住居跡出土土器（第46図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	推定口径 12.0	体部下半に張りをもち口縁は肥厚して外反する。微細粗粒砂小石含む。焼成良。暗灰色。	ろくろ整形。	覆土 16%
坏	2	推定口径 12.9	体部は下半で張り中位外面に稜をもって開く。口縁は更に開く。微細粗粒粒含む。軟質。橙褐色。	ろくろ整形。	覆土 10%
坏	3	口径 12.5 器高 4.5 底径 6.0 高台径 6.2 高台高 0.4	器肉厚い。扁平な底部より体部は下端に張りをもって開き器厚を減じた口縁は内面に稜をもって更に開く。高台は低く雑なつくりである。微細粒砂少量の小石含む。橙褐色。	ろくろ整形。底部は回転糸切り痕が残り、糸切り時の粘土が付着する。高台は一部剥落するが、雑なつくりで、接地面に棒状工具でおこした痕が残る。	覆土 口縁60%と底部中央35%を欠く。
坏	4	底径 6.0 高台径 7.0 高台高 0.5	器肉の薄い低部より体部は下端で肥厚して張る。高台は低くつくりも雑である。微細粒砂含む。茶褐色一部褐色。	ろくろ整形。底部に回転糸切り痕。高台は貼付け後雑なナデ。	覆土 底部と体下半のみ40%
甕	5	口径 19.0	肩部はやや張り頸部で括れ、口縁は内湾気味にわずかに開いて立ち上がる。先端で内側につまみ出される。微細粗粒砂小石含む。焼成良。淡橙色内面淡褐色。	頸部内面に明瞭な巻き上げ痕がみられる。粘土紐の幅は2.7～3.0cm 内面は口縁つまみ出し直下から以下横位のヘラナデ。外面は磨滅し不明瞭となるが、横位、一部斜位のナデ様ヘラケズリ。	覆土 口縁と肩部のみ30%
砥石	6	現在長13.6 最大幅 7.8 厚さ 6.1	石質中粒砂岩。 四面全部が使用されているが、幅の狭い方が両面とも非常に平滑である。先端にも使用痕がある。		カマド出土

21号住居跡（第48図）

19、20号住居跡の南側に検出された。1号溝に中央を切られ、北側で建物跡と重複（新旧関係不明）している。平面形は452×290㎝の隅丸長方形を呈し、主軸はN—22°—Eである。壁高は東辺で約10㎝前後、西辺は確認できなかった。カマドは西辺の南寄りにあるが溝により主体は破壊されており、左側壁がわずかに残存しているだけである。カマドに用いられていたと思われる50×20㎝大の焼けた片岩がP_1近くから出土している。柱穴は3本検出されている。P_3は溝の壁中に確認したものである。P_1は深さ19㎝、P_2は22㎝、P_3は床面から25㎝を測る。床面は軟弱で凹凸が激しく、溝をはさんだ南、北側とでは10㎝のレベル差がある。遺物は少なく、カマド前面から床直で出土した土師坏、羽釜、須恵器坏（第47図13～15）が出土している。ほかに鎌が1点出土している。



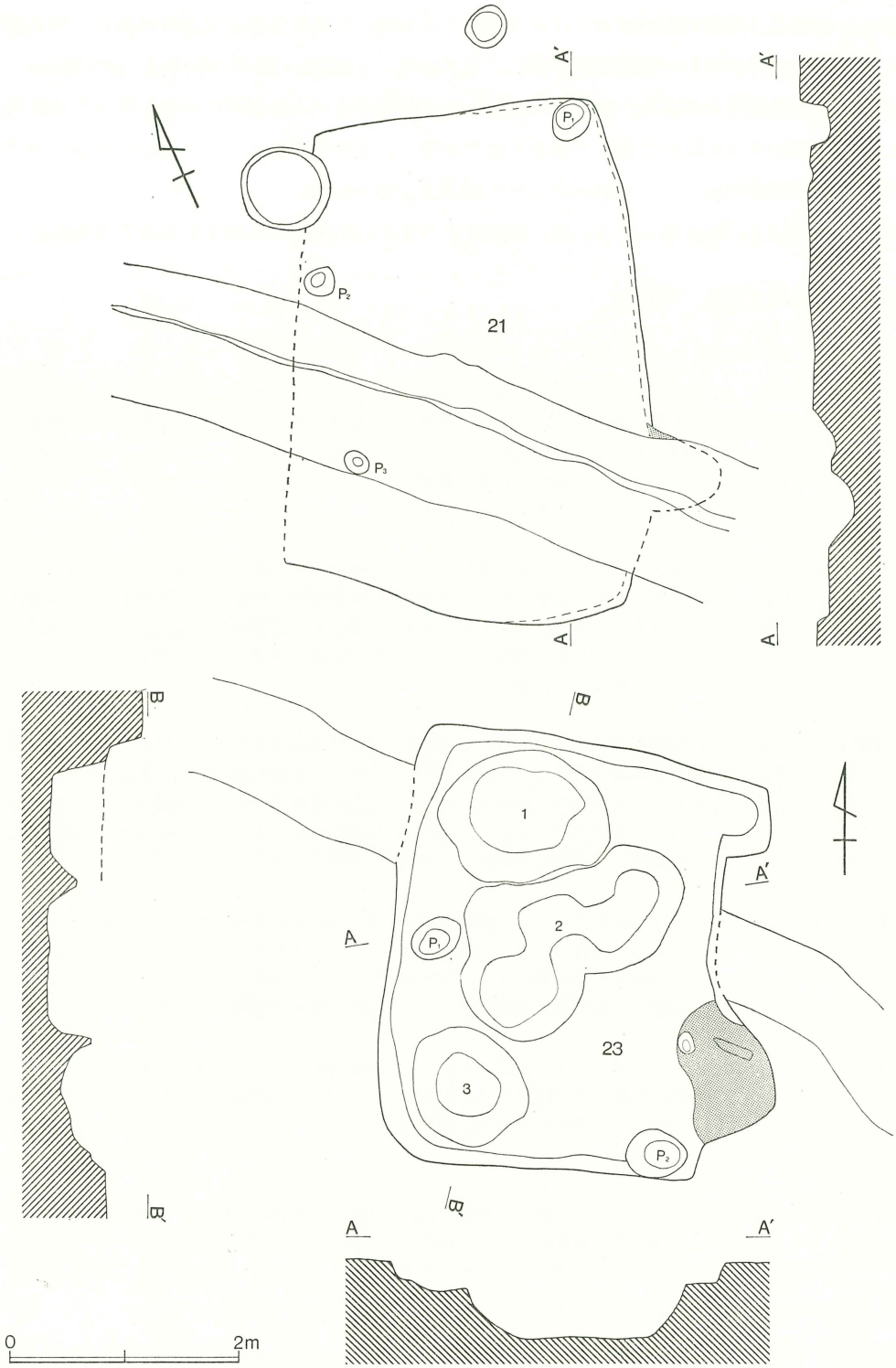
第47図　21号住居跡出土土器

21号住居跡出土土器（第47図）

器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径　12.8	体部は内湾気味に開き内面に緩やかな稜をもって口縁はわずはに開く。微粗粒砂含む。軟質。淡橙褐色。	器面磨滅のため整形痕は不明瞭となる。	No.3 口縁部12%
坏	2	底径　5.7	底部は中央がややもち上がり体部は下端に張りをもつ。微粗粒砂小石含む。焼成良。青灰色一部灰色	ろくろ水挽成形。底部右回りの回転糸切り痕。	No.3 底部と体部下半のみ。
羽釜	3	口径　18.0	丸味をもった体部は鍔部直下より内傾し口縁はやや立ち上がる。鍔は比較的長く一度つまんで先端をひき上げている。細粗粒砂小石含む。焼成良。淡橙褐色外面一部淡褐色。	口縁部横ナデ整形が施されるが多少歪む。鍔部は貼付け後横ナデ整形一部歪む。以下外面横位から斜位のヘラケズリ。内面は口唇直下まで横位のヘラナデ。	No.1、覆土 口縁部24% 体上部30%

23号住居跡（第48図）

13号住居跡の南側に位置している。4号溝にほぼ中央を切られているが床面には達していない。380×280㎝の隅丸長方形を呈し、長軸はほぼ南北である。北東コーナー部は70×40㎝の範囲が東側に張り出している。壁高は北壁で30㎝、南壁で10㎝である。カマドは東辺の東南コーナー寄りにある。焚口部幅60㎝、壁外に約60㎝掘り込まれており、側壁には片岩が設置されている。焼土は約12㎝堆積しており、多くの遺物が残存していた。カマド巻側、東南コーナー部に55×40㎝、深さ20㎝の貯蔵穴と思われる落ち込みがある。



第48図　21・23号住居跡

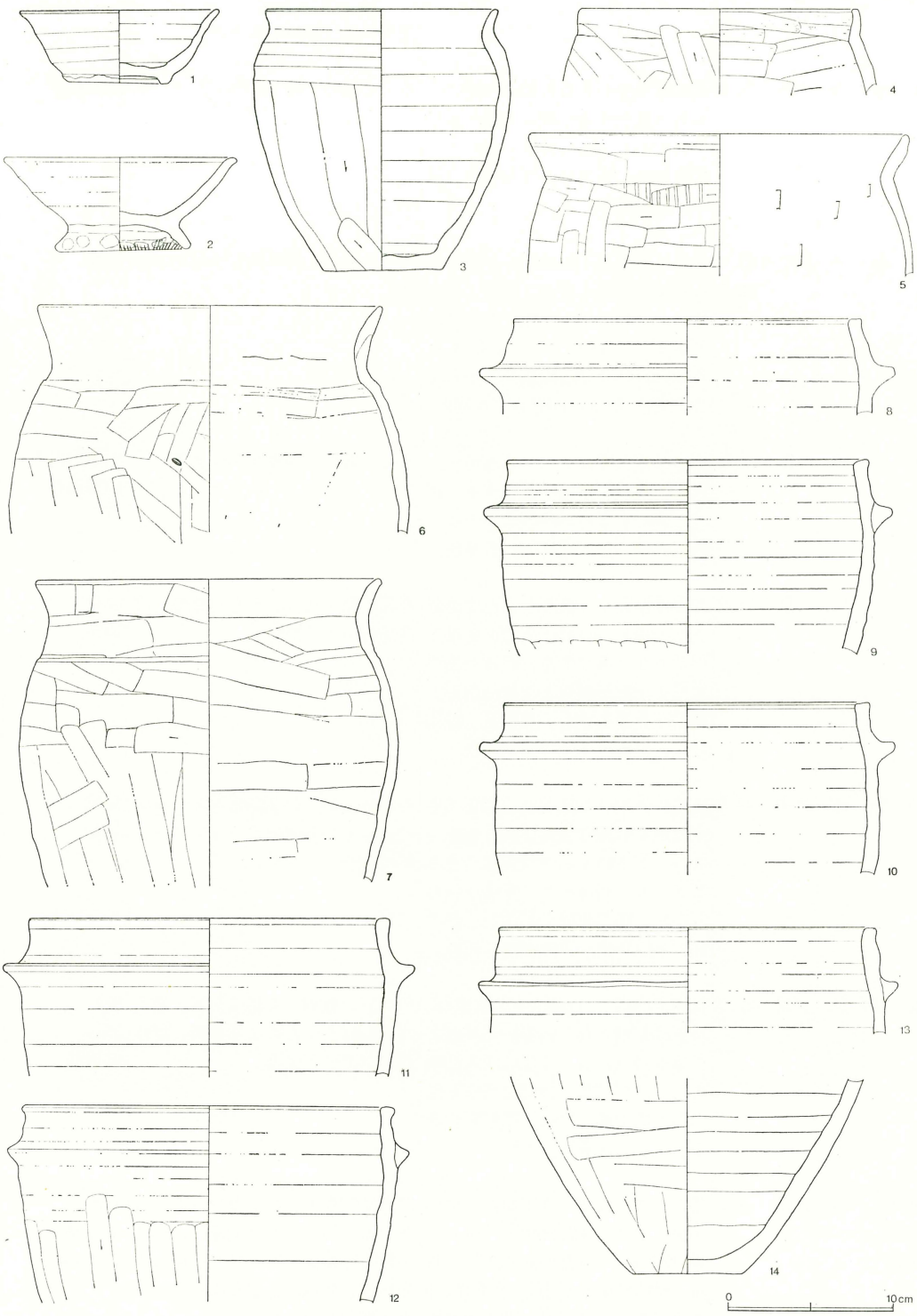
床面ほぼ全面にわたり落ち込み（北側から1、2、3）がある。1は150×115㎝、深さ45㎝（床面から）を測る。床面に相当するレベルにはロームを用いた貧弱な貼床が認められた。出土遺物はない。2は215×140㎝の不整楕円形を呈し、深さ45㎝。3は110×90㎝の楕円形、深さ35㎝。2、3の覆土と住居跡覆土は区別し得ず、出土遺物も住居跡のそれと時期的に大きな隔たりは認められないが、位置から住居跡に付属する施設とは考え難く、重複関係をもつものと思われる。床面は凹凸が激しいが堅緻であった。とりわけカマド前面は良好である。

遺物は第49図4が床面落ち込み、2、他は全てカマドから集中して出土したものである。

23号住居跡出土土器（第49図）

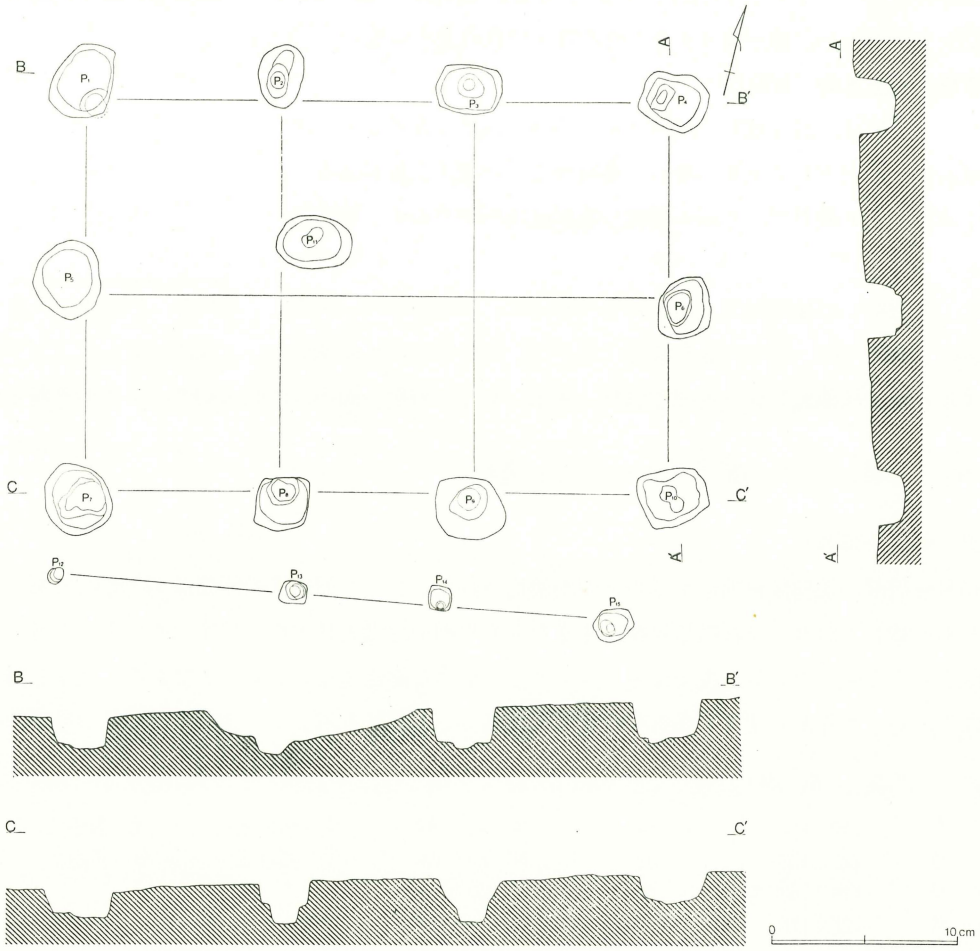
器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 12.1 器高 4.0 底径 6.7 高台径 6.3 高台高 0.5	器肉厚い。扁平な底部より体部は下端に張りをもって開き、内面に稜をもって口縁は更に開く。高台は低くつくり整形とも雑。微細粒砂含。軟質。黄褐色内面一部褐色	ろくろによる整形。底面の切り離し痕は不明である。高台は貼付けによる。	カマド内出土 口縁部40% 底部80%
坏	2	口径 14.2 器高 4.2 底径 6.9 高台径 8.2 高台高 1.6	底部わずかに上げ底。体部は下半に張りをもち大きく開く。口縁は外反する。高台は大きく高いが雑なつくりを示す。微細粒砂小石含む。焼成良。橙茶褐色。	坏部はろくろ整形による。高台は貼付後手持ちの横ナデが施されるが適当で、成形時の指頭圧痕が内外面に残り内部には刷毛目が一定方向につく。	№10 口縁部25% 底部100%
小形甕	3	口径 14.1 器高 15.8 底径 7.2	器肉厚い。扁平な底部から体部は上半に最大径をもって開き肩部に張りをもち頸部で括れ短い口縁は開く。微粗粒砂小石含む。焼成良淡褐色。外面体部朱褐色。一部煤	肩部外面に巻き上げ痕。肩部外面にはろくろ整形痕のようであるが内面の成形痕や口縁一部の歪みから回転台によるものと考えられる肩部以下と底部はヘラケズリ。	23住、23住内土壙 口縁部50% 底部75%
甕	4	口径 16.8	わずかに丸味をもった肩部より頸部で括れ口縁は内湾しながら直立し先端は内側に突出する。微粗粒砂含む。焼成良。淡橙褐色。	頸部外面に巻き上げ痕。口縁部整形横ナデ後肩部外面指頭によるナデ。内面口縁部と肩部木口状の工具によるナデ整形。	23住、№10 口縁部25%
甕	5	口径 23.0	肩部の張りは弱く頸部で括れ、口縁は外反し先端は立ち上がり気味となる。微細粗粒砂含む。焼成良淡橙褐色。	口縁部横ナデ後、外面肩部横位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。	№9 口縁部25% 肩部20%
甕	6	口径 21.0	丸味をもった体部より頸部で括れ口縁は外反気味に開く。微粗粒砂含む。やや軟質。暗橙褐色。形態は7に近似する。	口縁部内外面に輪積痕。口縁部横ナデ整形と外面肩部横ヘラケズリの間に一条の浅い沈線が廻る。内面肩部横ヘラナデ。	体部外面にもみ痕。№9 25%残存
甕	7	口径 21.0	体部は上半に最大径をもち頸部は内傾し、口縁は外反気味に開く。微粗粒砂含む。焼成良。橙褐色。	口縁部外面に巻き上げ痕。口縁部整形横ナデ後肩部外面横位、以下縦位のヘラケズリ。内面横位のヘ	№2、3、7 №9、10 60%

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
	7			ラナデは一部頸部に及ぶ。	
羽釜	8	口径 21.2	鍔部に丸味をもち口縁は内傾し、口唇は直立する。鍔は上部が水平で丸味をもった三角形を呈する。微細粒砂小石含む。明茶褐色口縁部一部黒褐色。	ろくろ整形。鍔は貼付られる。	20%残存
羽釜	9	推定口径 21.0	体部は鍔部直下にわずかに張りをもち器肉も薄くなる。鍔部より内傾し、口縁は立ち気味となり先端平坦となり外側につまみ出される。鍔は11と同様。微粗粒砂小石含む焼成良。橙褐色内面主に茶褐色。	ろくろ整形。鍔は貼付け後ナデ整形。	12%
羽釜	10	口径 22.2	わずかに丸味をもった体部から、鍔部で内傾し口縁は直立する。鍔は上面が水平の三角形を呈する。微細粒砂含む。焼成良。茶褐色。	ろくろ整形。鍔は貼付による。	土壙内出土 15%残存
羽釜	11	口径 21.9	体部はほとんど張りをもたず鍔直上で内傾し、口縁は先端が肥厚し平坦となり直立する。鍔は上部が水平で下部が斜辺となる三角形。微粗粒砂小石含む。焼成良。器面磨滅。橙褐色口縁一部黄褐色。	外面に巻上げ痕。ろくろ整形。鍔は貼付後ナデ整形。	No.4 20%
羽釜	12	口径 22.6	直線的に開いた体部から鍔部でやや内傾し口縁は立ち上がり気味となる。口唇は平坦で外面につまみ出される。鍔は小さく断面三角形となる。微粗粒砂小石含む。焼成良。淡橙褐色一部赤褐色、褐色。	ろくろ整形。外面は鍔下3.5～4cmのところから縦位のヘラケズリ。鍔は貼付けによる。	No.12 20%
羽釜	13	口径 22.9	鍔部で内傾し、口縁は立ち上がる。口唇は平坦となりわずかに外側につまみ出される。口縁は歪み波状となる。鍔は低く断面三角形を呈するが成形雑で歪む。微細粗粒砂小石含む。焼成良。灰色。	つくり、整形とも雑である。巻上げ成形後ろくろによる整形。鍔は貼付け後ナデ成形。	No.1 25% 須恵器
甕又は羽釜の底部	14	底径 6.5	径の小さな底部より下端にわずかな張りをもち体部は大きく開く。器肉は均一ではないが厚手である。微粗粒砂小石含む。焼成良。外面明茶褐色一部褐色。内面橙黄褐色で器面磨滅。	内面は回転ナデ痕がみられるが整然としておらず特に底部には凹凸が激しく体部にはヘラナデ痕もみられる。外面は体部も底部もヘラナデ整形が施される。	No.6 体部25% 底部100%



第49図　23号住居跡出土土器

(3) 建物跡（第50図）



第50図　建　物　跡

円形周溝の東南部を切り、さらに19、20号住居跡と重複している。3間×2間（625×423*cm*）の東西棟建物跡。長軸はN—79°—E。柱間は7尺等間。柱掘形は P_1、P_2、P_5、P_7 が楕円形で、他は角ばった平面プランを呈している。規模、深さは表に示した。桁行南側は柱筋が心心をきれいにとおっているが、北側は P_1、P_4 の妻柱を除き若干ずれている。覆土から土師器坏、須恵器坏の

No.	大きさ	柱痕	深さ	No.	大きさ	柱痕	深さ
P_1	85×65	30	34	P_9	75×66	40×34	41
P_2	69×48	38×22	40	P_{10}	74×61	30×20	33
P_3	72×54	24	45	P_{11}	82×56	25×15	15
P_4	71×61	29×18	46	P_{12}	20×16	16×13	20
P_5	85×71		35	P_{13}	29×24	16	32
P_6	64×57	37×30	39	P_{14}	27×25	10	20
P_7	79×70	50×46	29	P_{15}	42×35	19×13	27
P_8	58×56	35×30	45				

（単位　*cm*）

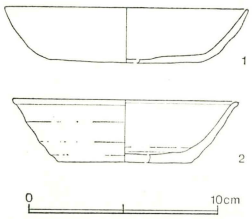
少片が出土している。

南側に隣接して小ピット（P_{12}～P_{15}）が並ぶ。建物跡とそろわないため廂と考え難く、柵に近い機能をもつものか。覆土はサラサラの黒色土で柱穴充土に近い。

建物跡出土土器（第51図）

1.　土師器坏。25％残存。推定口径12.9㎝。扁平な底部より、体部はわずかに内湾して開き口縁へと移行する。口縁は先端が尖る。胎土はやや粗く軟質で、全体が磨滅し整形痕は不明である。明橙褐色。

2.　須恵坏。口縁部20％。底部50％の残存率。口径12.0㎝、器高3.3㎝、底径7.1㎝。径の大きな底部は扁平で、体部はわずかに内湾し、口縁は玉縁となってやや外反する。胎土は微粗粒砂含みやや軟質。灰色。ろくろ整形。底部は回転糸切りによる切り離し。



第51図　建物跡出土土器

(4)　土壙、井戸、溝、トレンチ出土遺物

土　壙（第53図）

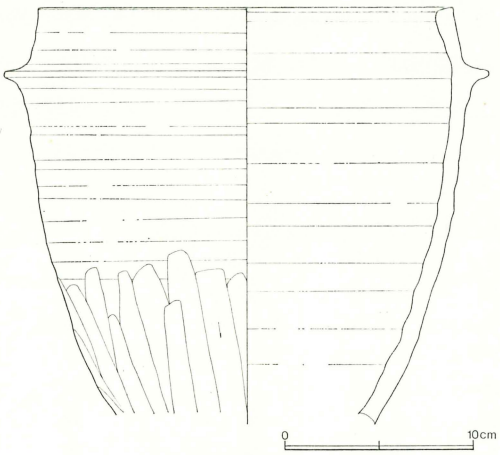
15号住居跡の北側緩斜面に4基の土壙が検出された。プラン確認面の標高は77.78ｍである。4基とも近接しており、ほぼ同じ規模、深さをもち平面形は隅丸長方形を呈す。うち1～3号土壙は主軸をそろえ並んでいる。覆土はロームブロックを含む黒色土ないし褐色土である。図示し得る遺物はないが、小片からすると集落の時期と大差はないと思われる。データは下表のとおりである。

	規　模（㎝）	深　さ（㎝）	主　軸	覆　土	
1　号	159×120	16	N—25°—W	①　褐色土	②　黒色土
2　号	143×123	22	N—20°—W	①　褐色土	②　黒色土
3　号	146×　98(131)	19	N—20°—W	褐色土	
4　号	121×110	12	N—30°—W	黒色土	

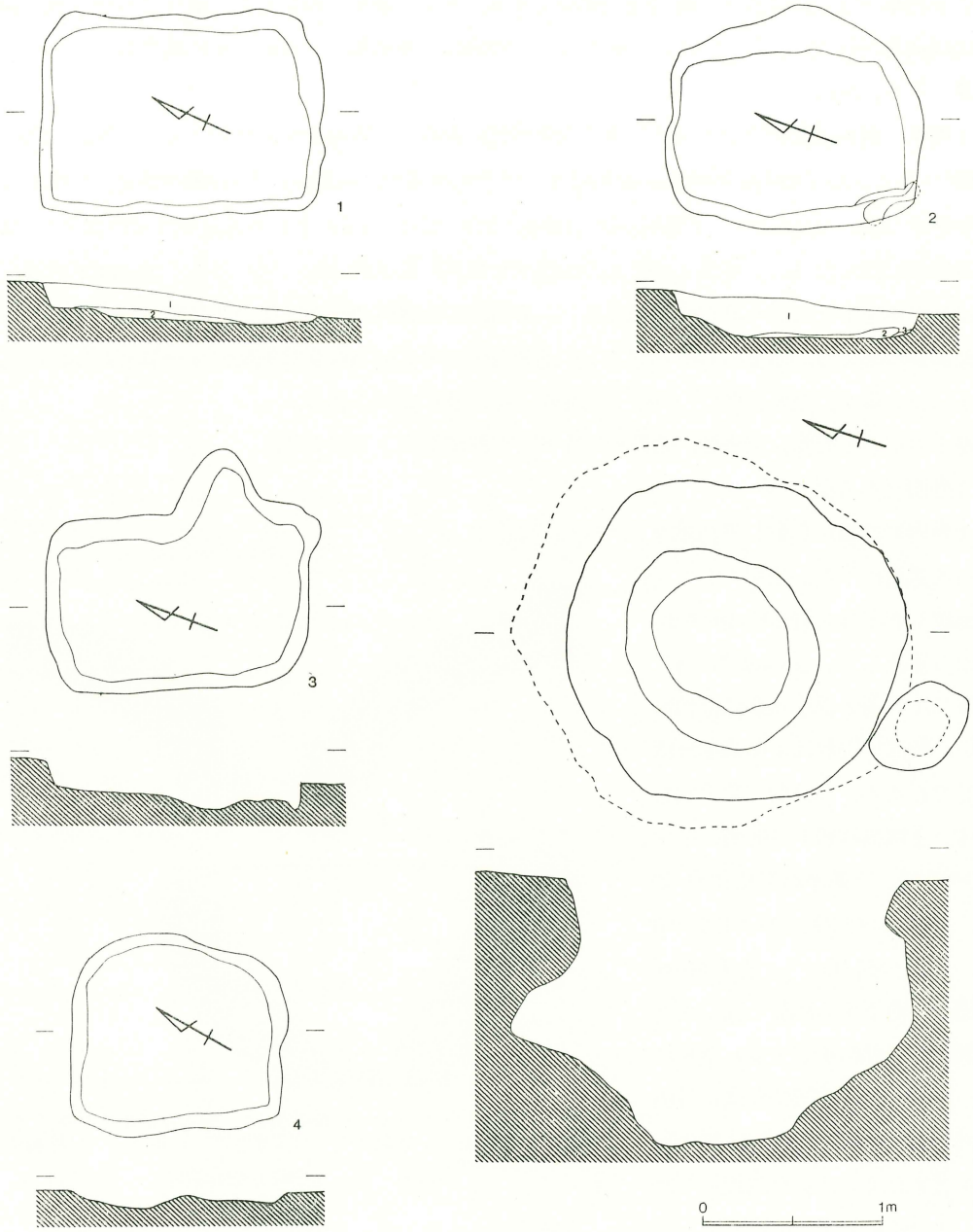
井戸跡（第53図）

調査区南寄り、2号住居跡と5、6号住居跡の中間に検出された。平面形は220×205㎝の楕円形を呈し、プラン確認面から80㎝下がった所でオーバーハングし、－150㎝で底に到る。底はほぼ平坦で、調査時（7月）に20～30㎝の湧水を見た。覆土は自然堆積の状況を呈しておりローム粒子混りの黒色土が主体をなしていた。上部でわずかながら焼土が認められた。

遺物は陶器小片を覆土中から得たのみであるが、上面南側に55×40㎝、深さ20㎝の浅い落ち込みがあり、第52図のほぼ一個体分の羽釜が出土した。



第52図　井戸跡出土土器



第53図　土 壙、井 戸 跡

井戸跡出土土器（第52図）

土師器羽釜、口径22.0㎝。胴下半、底部を欠き体部中位に張りをもつ。口縁は内側に肥厚し、鍔部より内傾する。鍔は小さく断面三角形を呈する。ロクロ整形、外面大半は縦位のヘラ削り。体部内面は剥落が目立つ。胎土に砂、小石を含み、焼成良。暗茶褐色。体部下半に煤付着。

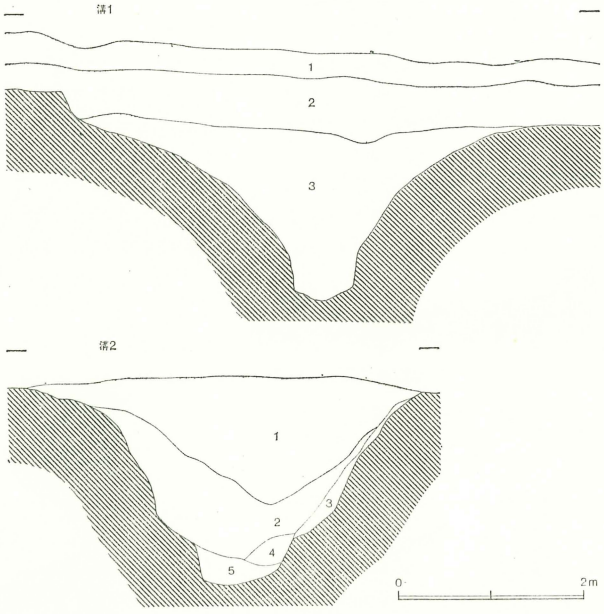
溝（第6、54図）

1号溝　調査区北側で安光寺2号墳の周溝南側に隣接し、路線をほぼ横切ってのびる。走向はN—55°—Eで、わずかに蛇行する。断面は＼_／状で上端幅222～128㎝、平均200㎝前後、両端の2号溝を併せた部分では270㎝、下端幅は30～50㎝、深さは斜面上部にあたる北東寄りで約100㎝、南西するに従い浅くなり、2号溝との交点では75㎝を測る。底は部分的に凹凸があるがほぼ平坦で、徐々にレベルを下げており排水には都合良い。第54図の土層断面図は安光寺2号墳の南北土層断面の延長部分にあたる。覆土はロームブロック及び黒色土をまだらに含む黒褐色土一層であった。良くしまった土層で、近世以降のいわゆる境界溝とは明瞭に識別される。

覆土中から土師器、須恵器、陶器の小片および鉄滓が出土している。

2号溝（第6図）

1号溝の西端から発し等高線を切って東南に下る。途中トレンチで確認した部分を含め約100ｍにわたり調査した。走向はN—41°—Wで1号溝と成す角度は直角に近い。断面の形状は1号溝とほぼ同じであるが、部分的にV字状を呈す。上端幅は190～100㎝、平均150㎝前後、下端平坦部幅100～40㎝、平均50㎝前後、深さ120～50㎝、両端の底のレベル差は470㎜を測る。南下するに従い浅くなり未調査区で谷に連結すると思われる。右図土層断面図位置は15号住居跡北側、1号褐色土には炭化物片が含まれている。南西寄りでは3、4層に加え2層に近似する黒色土、黒褐色土が主体となっている。



1号溝　1. 表土　2. 褐色土　3. 黒褐色土（ローム黒色土ブロック含）
2号溝　1. 褐色土　2. 暗褐色土　3. 黄褐色土　4. 褐色土　5. 黒褐色土

第54図　1、2号溝土層断面図

覆土中から土師器、須恵器、陶器、磁器（舶載青磁含）片、および鉄滓が出土している。

3号溝（第6図）

調査区北寄り、18号住居跡の南に検出された。N—34°—E方向にのびている。全長6ｍを確認したのみで、東側は古墳周溝跡中に消え、西側は攪乱を受けているためその消長は不明。幅120㎝。深さ50㎝前後。覆土中から須恵器片のほか刀子、鏃（第57図）、寛永通宝が1枚出土している。

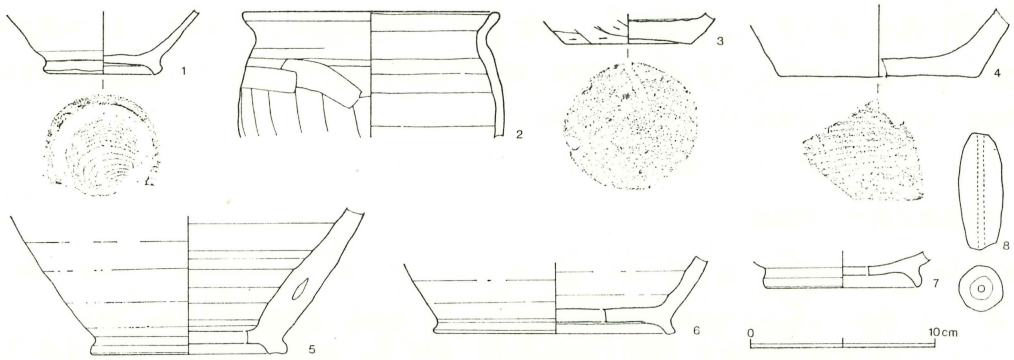
4号溝（第6図）

3号溝の南側でほぼ平行し、古墳周溝、1号溝を切り、23号住居跡近くで南に折れる。走向はN—32°—E。幅95～155㎝、深さは23号住居跡と重複する部分で42㎝、2号溝との重複部分で120㎝を測る。23号住以南では浅くなり明らかにし得なかった。

覆土上部から須恵器、陶器、磁器片がわずかに出土している。

2号溝出土遺物（第55図）

器種	番号	大きさ(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	底径 5.6 高台径 6.4 高台高 0.6	小さな径の底部より体部は下端に張りをもって開く。高台は歪む。接地部内側。微細粒砂小石含む。焼成良。淡褐色、底部外面黒色。	ろくろ整形。底部に右回りの回転糸切り痕。高台は貼付け。つくり整形とも雑。坏部内面はほとんど器面が剥落する。	覆土 底部のみ 高台30%欠損
小形甕	2	口径 14.0	丸味をもった体部より頸部で括れ口縁はやや内湾して「ハ」の字に開く。微粗粒砂含む。密。焼成良黒色、内外面とも一部淡橙褐色。	口縁部整形横ナデ後、外面肩部横位、以下縦位のヘラケズリ。内面指頭による横位のナデ。	円形周溝 25%
甕	3	底径 7.0	底部は器肉厚く中央がややもち上がる。微細粒砂含む。密。焼成良内面橙褐色。外面茶褐色部分的に褐色。	ろくろ整形。底部は静止糸切りによる切り離し。外面体部下端はヘラケズリ。	円形周溝 底部のみ
甕	4	底径 10.8	扁平な底部は器肉薄く体部下端は器厚を増す。微細粒砂多く含む。小石。内面暗灰色。外面淡灰青色	底部外面に静止糸切痕。体部下端はヘラナデ。内面は器面磨滅のため不明。	溝2号 20%
甕	5	推定底径 10.2 高台径10.7 高台高 0.8	器厚は底部に比し体部が非常に厚くなる。空気が入っていたための空洞が2ヶ所にみられる。高台は低く接地部が広い。微粒砂含む密焼成良。内面暗灰色。外面灰青色体部と高台接地部まで施釉。	ろくろ整形。高台は貼付け。	溝2号 20%
甕	6	底径 12.6 高台径13.1 高台高 0.6	器厚は均一で底部扁平。体部はわずかに丸味をもって開く。高台は削り出しによる。白く細い針状の鉱物、微粒砂、小石少量含む。密内面紫赤色。外面黒褐色。一部自然釉が付着し剥落する。	ろくろ整形。高台は横ナデ後、内面周囲を回転ヘラケズリ。	溝2号 30%
坏	7	底径 8.3 高台径 8.6	底部は中央がやや突出する。高台は高く「ハ」の字に開き外面に段をもち接地部は内側となる。胎土密。比較的硬質。灰白色。釉色は淡緑色。	ろくろ水挽整形。底部は回転ヘラケズリ。高台は貼付による。坏部内面に重ね焼痕。	溝2 40%
土錘	8	現在長 6.2	端部を欠くがほぼ完形。茶褐色。	孔径3㎜。重さ28.5㌘。	

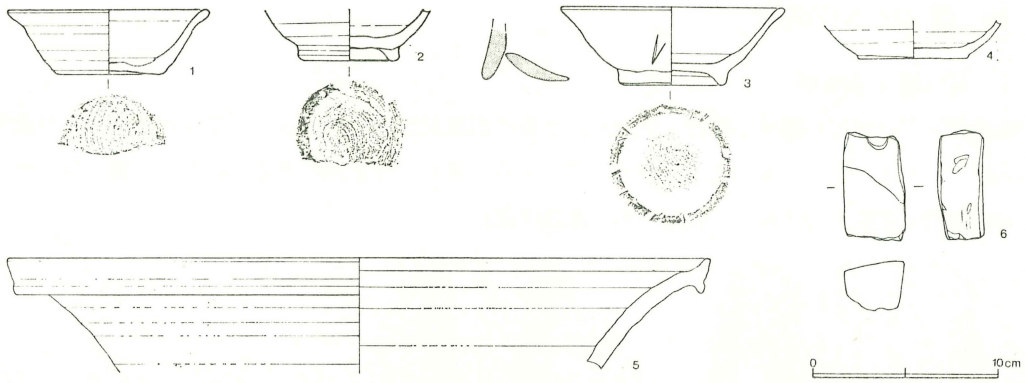


第55図　2号溝出土遺物

トレンチ出土遺物（第56図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 10.9 器高 3.5 底径 5.9	小形。底部は器肉薄い。体下端は肥厚して開き、内面に稜をもって口縁は開く。微粗粒砂含む。焼成良。黄褐色まだらに淡褐色。体部下半に内外面とも黒斑。	ろくろ整形。底部は右回りの回転糸切り痕。糸切り時の粘土の凹凸が残る。	トレンチ 40%
坏	2	底径 5.4 高台径 5.5 高台高 0.7	扁平な底部より体部は下半に張りをもって開く。高台は余り開かず接地面は丸味をもつ。微細粗粒砂小石含む。軟質。内面淡褐色。内面の半分と外面は淡橙褐色を示しもろくなる。	ろくろ整形。底部は回転糸切り痕高台は貼付け。	トレンチ 5 底部75% 高台30%
坏	3	口径 12.1 器高 3.4 底径 6.0 高台径 5.8 高台高 0.8	小さな径の底部より体部は下半に張りをもって開く。口縁は内面に緩い稜をもって外反する。高台のつくりは雑である。微細粗粒砂小石含む。焼成良。色調は2と同様底部に黒斑。	ろくろ整形。底部に糸切り痕。高台はつくり、整形ともに雑で歪み、貼付けた所から全部剥離している	墨書「人」 口縁部25%を欠く。
坏	4	口径 7.3	扁平な底部より体部は下端に張りをもつ。微粗粒砂含む。焼成良。淡灰色。	ろくろ水挽成形。底部回転糸切りは一度糸の入れなおしをしており体下端に糸痕が残る。	トレンチ 3 30%
甕	5	推定口径 48.0	頸部より大きく開き更に外反して外側に凸帯をつまみ出し、口縁先端は立ち上がる。微粗粒砂小石含む。硬質。暗灰青色。	ろくろ使用。	トレンチ 12%
砥石	6	2.9×5.6	凝灰岩製。四面とも使用される。		厚さ 2.6

（遺構—中島　宏、遺物—鈴木仁子）



第56図　トレンチ出土遺物

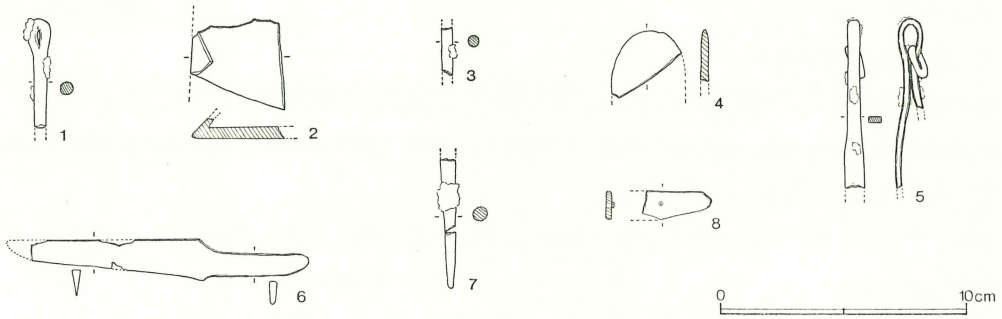
陶磁器（図版14）

表土および1、2号溝覆土から陶磁器細片が検出されている。

1、2は中国製青磁。1は灰色がかかった暗緑色、2は白緑色に発色している。1は発色にむらがあり器面がうすく剥れているのが目立つ。2は竜泉窯系青磁で内外面とも釉は厚い。3、6は鉄釉天目茶碗。6は口縁上部が直立ぎみで口唇部が外反する。3は淡いチョコレート色。6は黒褐色に発色している。胎土は3が青白色、6は黄味がかかった灰白色。4は志野小皿。低い高台がつき見込みにはトチンの痕がのこる。貫入が著しい。5も志野系。小さな高台がつく碗底部。見込み部に銅緑釉がかけられ暗緑色に発色している。7は常滑風の甕小片。胎土、釉調が北坂遺跡例（図版69）に酷似しており在地産の可能性がある。8は美濃擂鉢。底部は0.5㎝とうすいつくり。9、10は甕底部、ぶ厚なつくりで内面に自然釉がふいている。7と同様に在地産とも考えられる。

（中島　宏）

(5)　鉄　器（第57図）



1. 1号住　2. 2号住　3. 7号住　4. 15号住　5. 18号住　6. 19号住　7. 8. 3号溝

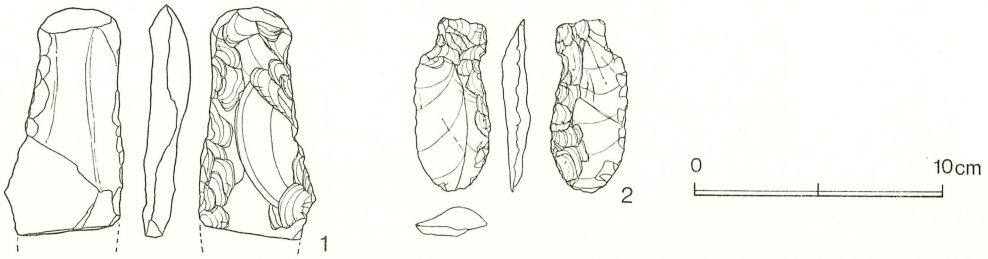
第57図　鉄　　器

①～⑧　鉄製品　②は鍛造の犂先、③⑦は鉄鏃片、⑤は鑷子、⑥⑧は刀子と考えられる。②の犂刃部は鋭利で、袋部は肉がやや薄い。⑤は元来毛抜的機能と考えられてきたが、頭部に円環が見られ、端部が欠損して不明であるが、ここが木質部等に接合され、環部に懸ける用途が想定される。⑥の刀子に関しては、背幅もしっかりし、刃部は差程研減は見られない。　（増田逸朗）

(6) 縄文時代の遺物

i 石 器（第58図）

本遺跡からは若干の縄文土器片とともに、２点の石器が出土している。いずれも平安時代の遺構から出土したもので、本来の出土位置は不明である。あるいは東側に隣接する古墳の墳丘から出土した石器群と関連があるかもしれないが、確証はない。



第58図 石 器

１は撥形を呈した打製石斧である。刃部が欠損している。厚さは一定せず、基部が最も厚い。側辺部からの調整で形を整えているが、丁寧なつくりとはいいがたい。基部付近に、僅かに磨耗した痕跡が認められるが、風化がすすんでいるため詳細は不明である。 長9.2㎝、巾4.7㎝、厚1.6㎝、重76ｇ、細粒砂岩製、２号溝出土。２は縦長剥片を素材とした石匙である。打撃面に近い両側辺を調整加工して僅かに抉りを入れ、基部を作出している。片側辺は表裏面からの調整加工が施されているが、もう一方の側辺には、加工痕か使用痕か判断に苦しむ小さな剥離痕がみられる。形のよく整った優品で、完形品である。 長7.0㎝、巾3.0㎝、厚1.0㎝、重23ｇ、硬質砂質頁岩製、15号住居跡出土。

以上２点が本遺跡から出土した石器のすべてである。僅か２点の出土であり、該期の遺構も検出されていないので、多くを語ることはできない。正確な帰属時期も不明であるが、僅かに出土した縄文の土器片が目安となろう。 （水村孝行）

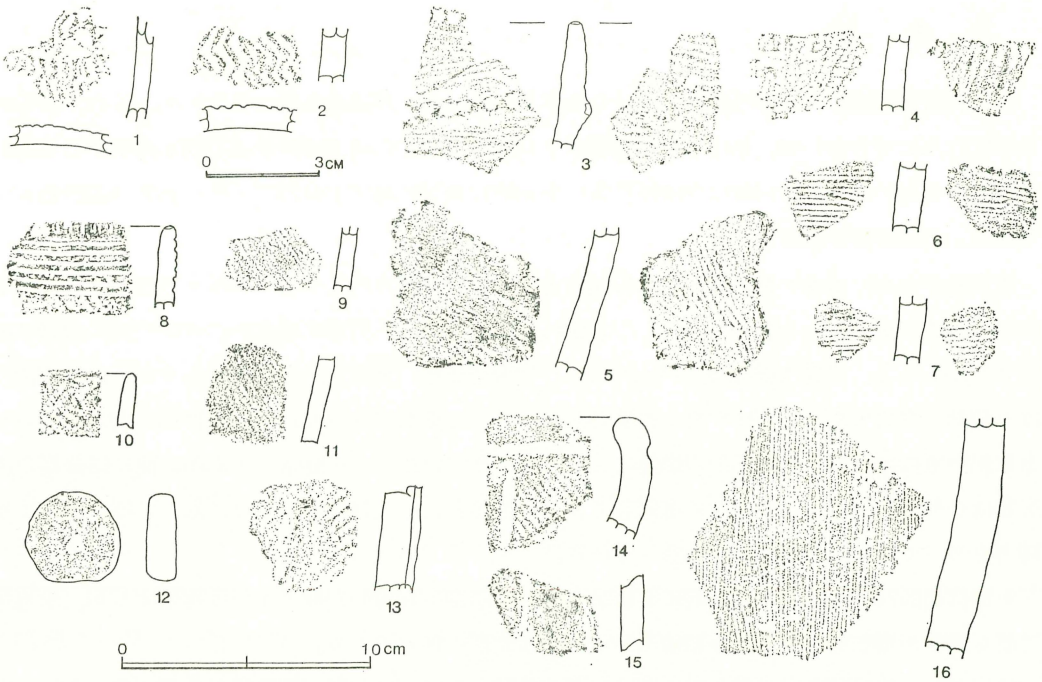
ii 縄文土器（第59図）

清水谷遺跡で出土した縄文土器は表土、国分期の住居跡および溝の覆土から出土したもので、該期の遺構は検出されなかった。総計64片で早期から中期の土器があるが、主体は加曽利Ｅ式土器である。以下時期、型式ごとに報告する。

Ⅰ群 早期を一括する。押型文土器（１類）と条痕文系土器（２類）がある。

１類（１、２）

山形文が施文されたもの、２片とも胴部破片で縦位施文。１は全面施文と思われる。条は４ないし５条、原体の径は復元できない。胎土にチャートチップ、長石、微砂粒、片岩を含む。うち片岩（最大６㎜）は多く含まれ、器表に出たものが施文を妨げている。赤褐色。２は無文部があり密接施文ではない。条は３条以上で、山形の各振幅は不規則である。施文にあたり力をぬいた部分があり〝半置半転の縄文〟に近い山形文となっている。胎土に微砂粒、雲母、片岩粒を含む。焼きは良く、赤褐色を呈す。



第59図　縄　文　土　器

2類（3～7）

貝殻条痕が施された群。胎土に繊維を含む。3は内外面に浅い条痕が横走し、口唇上と〝たが〟上に円形竹管文が施文されている。〝たが〟に施された刺突は等間でなく、施文角度も一定でない。波状口縁を呈しそうであるが、小破片のため不確定。褐色を呈し、焼成は良く堅緻である。4は表面に縄文ＲＬ、内面に条痕が施文されている。繊維を多量に含み空洞になっている部分がある。表面茶褐色、内面黒色、5～7は内外とも条痕文。5の外面の条痕は浅く擦痕状。6、7は深く施文されている。5は茶褐色、6は暗褐色、7は赤褐色を呈す。3は茅山下層式、5は該様式末葉に比定できよう。

Ⅱ群（8～11）　諸磯式土器を一括する。8は地文に縄文ＲＬを施し、口縁に沿って多截竹管により平行沈線を引く。口唇上には不規則な刺突が施されている。灰褐色を呈す。諸磯ｂ式に比定されよう。9、11は縄文ＲＬ、10は口縁部で縄文ＲＬとＬＲにより羽状縄文が施文されている。9～11は赤褐色。

Ⅲ群（12～16）　加曾利Ｅ式土器を一括する。12は土器片利用の土製円板。3.6×3.7cmのほぼ円形。周囲の研磨は顕著ではなく〝打ち欠き〟整形によっている。重さ20g、13は深鉢胴部破片。地文に縄文ＲＬが縦位に施文され、隆帯が垂下する。ＥＩ式に比定できる。14はわずかに内湾する口縁部片。口縁に沿って太目の沈線がめぐり、「の」字状の沈線が垂下する。地文は縄文ＬＲか。15の懸垂文は上端で連結すると思われる。16は6本単位の条線が施されている。16はＥⅡ式、14、15はＥⅢ式に比定されよう。　（中島　宏）